

北 小 木 古 窯 跡 群
大 沢 13 号 古 窯 跡

主要地方道多治見犬山線道路改良工事に伴う
緊急発掘調査報告書

1997

岐 阜 県

財団法人 岐阜県文化財保護センター



(上) 北小木大谷洞29・30号窯
(下) 大沢13号窯

序

本報告書は、平成7及び8年度に実施した主要地方道多治見犬山線道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査結果をまとめたものです。調査の対象となった遺跡は、岐阜県多治見市北小木町地内に所在する「北小木大谷洞28・29・30号古窯跡」、「北小木神明洞1号炭焼窯跡」、それに同多治見市大沢町地内に所在する「大沢13号古窯跡」です。

これら各遺跡とも岐阜と愛知の両県境にあたる丘陵部に立地し、一帯は中世以降の古窯跡が数多く遺存する古窯跡群を形成しています。多治見市は「陶都」と称されるごとく窯業と深い係わりをもつ町で全国有数の陶磁器産地として名を馳せており、また、中央自動車道や国道19号が市域を東西に走り両県を直結する交通の要衝にもあたります。

発掘調査の結果、中世に用いられた陶器である「山茶碗」を焼成した4基の古窯跡や作業場、不良品を廃棄した灰原、それに木炭を焼成した1基の炭焼窯跡が確認されるとともに、窯体や灰原からは3万点を超す大量の「山茶碗」片をはじめ、少量ながらも小型の仏具類等が発見されています。

美濃窯で知られる岐阜県東濃地方の核をなす多治見市域の窯業は奈良時代（8世紀）の須恵器の生産に端を発しますが、その後生産活動が拡大し、鎌倉時代（13世紀）になり山茶碗の生産で最盛期を迎える堂々たる歴史を誇ります。一方では、中世の窯業において一大産地であるとともに流通の拠点でもあったわけですが、本報告書では当時の流通形態にまでは言及できなかったものの、こうした調査成果の蓄積に伴って近々、中世窯業の生産・流通形態の全容が解明されるであろうことは想像に難くありません。

なお、本報告書の刊行にあたっては、多治見市文化財保護センター、地元北小木・大沢両地区の皆様を始め、関係諸機関ならびに関係各位から終始多大なご援助、ご協力を賜りましたことに、末尾ではありますが、改めて厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 篠田幸男

例　　言

1. 本書は岐阜県多治見市北小木町に所在する北小木大谷洞28,29,30号古窯跡、北小木神明洞1号炭焼窯跡および同市大沢町に所在する大沢13号古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は主要地方道多治見犬山線道路改良工事に伴うもので、岐阜県土木部多治見土木事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 北小木大谷洞29・30号古窯跡の発掘調査は平成7年度に実施し、大参義一愛知学院大学教授(故人)の指導のもとに小木曾文和・小淵忠司が担当した。また、大沢13号古窯跡、北小木大谷洞28号古窯跡・神明洞1号炭焼窯跡の発掘調査は平成8年度に実施し、大参教授の指導のもとに澤村雄一郎が担当した。
4. 発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたっては、上記担当者の他、下記の職員が協力した。
片桐隆彦、藤岡比呂志、佐野康雄、村瀬泰啓、小野木学
5. 本書に記載した遺物の実測・拓本・トレースは次の者が行った。
小島和子、丹羽香、丹羽和代、渡辺真紀子、渡辺由起、瀬戸かな子
6. 遺物の写真撮影は澤村が行った。
7. 本書の執筆は、第1章第1節を小木曾、第2章第1節を藤岡、第3章第1節・第3節を小淵、第7章を藤根久(パレオ・ラボ)、その他を澤村が行った。本書の編集は澤村による。
8. 調査前の地形測量、発掘区の設定および航空写真測量は株イビソクに委託して行った。
9. 自然科学分析は株パレオ・ラボに委託して行った。
10. 発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(順不同、敬称略)
田口昭二、桃井勝、山内伸浩、林順一、望月精司、森内秀造
多治見市文化財保護センター、土岐市埋蔵文化財センター
11. 発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。
発掘作業員　市原亜季、市原豊、伊藤秋巳、遠藤保宏、尾石彦、奥村芳一、梶田千鶴子、加藤英二、
北島博、佐々木祥二、田端豊、田口昇、仲林敏行、瀬戸
整理作業員　小島、丹羽(香)、丹羽(和)、渡辺(真)、渡辺(由)
12. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 北小木大谷洞29・30号窯	10
第1節 遺構	10
第2節 遺物	13
第3節 小結	42
第4章 大沢13号窯	43
第1節 遺構	43
第2節 遺物	55
第3節 小結	65
第5章 北小木大谷洞28号窯	66
第1節 遺構	66
第2節 遺物	68
第3節 小結	70
第6章 北小木神明洞1号炭焼窯	71
第1節 遺構	71
第2節 遺物	72
第3節 小結	72
第7章 自然科学分析（熱残留磁化測定による焼成年代推定）	78
第8章 まとめ	86
第1節 各類型の概要	86
第2節 窯の時期	91

挿 図 目 次

第1図 多治見市の位置	4	第27図 大沢13号窯灰原・掘抜排土セクション (2)	51
第2図 遺跡の位置	6	第28図 SK 3 (OS) 実測図	54
第3図 周辺の遺跡	7	第29図 SK 2・SK 4 (OS) 実測図	55
第4図 北小木大谷洞29・30号窯調査前地形図	14	第30図 大沢13号窯作業場実測図	56
		第31図 大沢13号窯内出土遺物	58
第5図 北小木大谷洞29・30号窯全体図	15	第32図 大沢13号窯灰原出土遺物(1)	59
第6図 北小木大谷洞29・30号窯灰層平面図	16	第33図 大沢13号窯灰原出土遺物(2)	60
		第34図 大沢13号窯灰原出土遺物(3)	61
第7図 北小木大谷洞29号窯窯体実測図	17	第35図 SK 2～SK 4 (OS) 出土遺物	63
第8図 北小木大谷洞29号窯床面調整詳細図	19	第36図 遺構外(OS) 出土遺物	64
第9図 北小木大谷洞29号窯断ち割り断面図	20	第37図 北小木大谷洞28号窯調査前地形図	67
第10図 北小木大谷洞30号窯窯体実測図	21	第38図 北小木大谷洞28号窯全体図	68
第11図 北小木大谷洞30号窯断ち割り断面図	23	第39図 北小木大谷洞28号窯窯体実測図	69
第12図 北小木大谷洞29・30号窯土坑・灰原断面 図	25	第40図 北小木大谷洞28号窯窯内出土遺物	70
第13図 北小木大谷洞29号窯内出土遺物	32	第41図 北小木神明洞1号炭焼窯調査前地形図	73
第14図 北小木大谷洞30号窯内出土遺物(1)	33	第42図 北小木神明洞1号炭焼窯全体図	74
第15図 北小木大谷洞30号窯内出土遺物(2)	34	第43図 北小木神明洞1号炭焼窯窯体実測図	75
第16図 SK 1 (KO) 出土遺物	36	第44図 北小木神明洞1号炭焼窯掘抜排土・灰 原セクション	76
第17図 SK 2 (KO) 出土遺物(1)	37	第45図 北小木神明洞1号炭焼窯出土遺物	77
第18図 SK 2 (KO) 出土遺物(2)	38	第46図 Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲 線	78
第19図 SK 3 (KO) 出土遺物	39	第47図 大谷洞29号窯床面焼土No.12の段階交 流消磁測定結果	80
第20図 G 5南端 (KO) 出土遺物	40	第48図 大谷洞30号窯床面焼土No.05の段階交 流消磁測定結果	80
第21図 遺構外 (KO) 出土遺物	41	第49図 大沢13号窯床面焼土No.03の段階交流 消磁測定結果	81
第22図 大沢13号窯調査前地形図	44	第50図 大谷洞28号窯床面焼土No.11の段階交 流消磁測定結果	81
第23図 大沢13号窯全体図	45	第51図 神明洞1号炭焼窯床面焼土No.04の段 階交流消磁測定結果	82
第24図 大沢13号窯埋土セクション	46	第52図 各窯跡の残留磁化方向と永年変化曲線 の一部 (Shibuya,1980)	84
第25図 大沢13号窯窯体実測図	47		
第26図 大沢13号窯灰原・掘抜排土セクション (1)	49		

表 目 次

表1	周辺の遺跡地名表	8
表2	北小木大谷洞29号窯跡 窯床・窯壁観察表	27
表3	北小木大谷洞30号窯跡 窯床・窯壁観察表	27
表4	北小木大谷洞29号窯跡 断ち割り土層観察表	28
表5	北小木大谷洞30号窯跡 断ち割り土層観察表	28
表6	北小木大谷洞29・30号窯跡 窯内埋土・灰原土層観察表	29
表7	窯焼土の残留磁化測定と統計計算結果	83
表8	考古地磁気年代推定	85
表9	山茶碗の型式	88
表10	美濃窯山茶碗編年表（多治見市教委1993より一部変更）	89
表11	遺物観察表	93

図 版 目 次

図版1	北小木大谷洞29・30号窯全景ほか
図版2	北小木大谷洞29号窯
図版3	北小木大谷洞30号窯
図版4	北小木大谷洞29・30号窯
図版5	大沢13号窯
図版6	大沢13号窯
図版7	北小木大谷洞28号窯
図版8	北小木神明洞1号炭焼窯
図版9	北小木大谷洞29号窯出土遺物
図版10	北小木大谷洞30号窯出土遺物
図版11	S K 1・S K 2 (KO) 出土遺物
図版12	S K 3・遺構外 (KO) 出土遺物
図版13	大沢13号窯出土遺物
図版14	大沢13号窯灰原・北小木神明洞1号炭焼窯出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

北小木大谷洞28号古窯跡他が発掘調査の対象となった原因是、岐阜県土木部多治見土木事務所による主要地方道多治見犬山線道路改良工事による。岐阜県多治見土木事務所は平成5年7月より工事予定地内の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて、多治見市教育委員会及び岐阜県教育委員会と協議を開始した。これに伴って両教育委員会は平成6年8月、該当区域の遺跡分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡として中世に山茶碗を焼成した北小木大谷洞28号古窯跡が遺存し、灰原は工事予定地外に広がっているものの、窯体の一部が工事予定地内に入ることが確認された。加えて、新たに4基の窯跡が発見されたことから、これらを北小木大谷洞29号古窯跡、北小木大谷洞30号古窯跡、北小木神明洞1号炭焼窯跡、大沢13号古窯跡と称することとした。並列する北小木大谷洞29号・同30号古窯跡の2基については、窯体は道路工事予定地内に入っているが、灰原は一部しかかかっていないことが確認された。北小木神明洞1号炭焼窯跡は、窯体とみられる落ち込みとかき出した灰層が予定地内に確認された。大沢13号古窯跡は、周辺に多数の山茶碗が散布し窯体・灰原のいずれも工事予定地内に遺存することが確認された。併せて、これら窯体周辺に窯の操業に伴う工房等の附帯施設遺存の可能性も指摘された。

これらの結果を踏まえ、岐阜県多治見土木事務所より岐阜県教育委員会を通じて調査の再委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが平成7・8両年度に計5基の発掘調査を実施することとなった。

(小木曾文和)

第2節 発掘調査の経過

平成7年度は7月10日から11月9日にかけて、北小木大谷洞29、30号窯を調査した。調査担当者は小木曾文和、小淵忠司である。平成8年度は5月7日から9月5日まで大沢13号窯、8月21日から10月9日まで北小木大谷洞28号窯、9月3日から10月9日まで北小木神明洞1号炭焼窯を調査した。調査担当者は澤村雄一郎である。以下に調査日誌の抜粋を示す。

調査日誌抄

平成7年度

- 7月10日 北小木大谷洞29号窯(以下29号窯)、30号窯(以下30号窯)跡発掘調査開始。一辺4mのグリッド設定。30号窯表土除去作業開始。
- 18日 30号窯東側壁検出。
- 19日 30号窯煙道部検出。
- 24日 30号窯煙道部・焼成室西側壁を検出。
- 27日 30号窯セクション実測作業開始。29号窯表土除去作業開始。

- 8月7日 30号窯窯体の全体写真撮影。29号窯窯壁一部確認。
- 11日 29号窯焚口除く窯体全体の輪郭確認。
- 9月4日 30号窯分焰柱確認。前庭部・灰原掘削。29号窯半割開始。
- 6日 29号窯窯内掘削。燃焼室・焼成室の床面、分焰柱確認。
- 14日 30号窯床面清掃終了。29号窯西半部床面・壁検出終了。
- 18日 29号窯窯体内埋土縦断セクション実測開始。
- 19日 29号窯窯体内埋土縦断セクション実測終了。29号窯東半部掘削開始。
- 20日 30号窯窯体内埋土縦断セクション実測開始。
- 21日 30号窯窯体内埋土縦断セクション実測終了。30号窯東半部掘削開始。
- 28日 29号窯床面・壁検出終了。
- 10月3日 30号窯床面・壁検出終了。
- 4日 29、30号窯空撮。
- 6日 現場作業員による作業終了。
- 9日 29、30号窯の細部実測、断ち割り開始。
- 30日 考古地磁気測定、サンプリング。
- 11月9日 現場撤収。29、30号窯発掘調査終了。

平成8年度

- 5月7日 大沢13号窯（以下13号窯）発掘調査開始。調査区東半部より表土除去開始。
- 13日 13号窯1辺4mのグリッド設定。
- 20日 13号窯窯壁確認。灰原検出作業開始。
- 24日 窯体及び灰原検出。
- 31日 SK2検出。
- 6月7日 作業場（白色粘土ピット、焼土）検出。
- 20日 前庭部、灰原検出。
- 7月2日 遺構検出状況および全景写真撮影。
- 3日 灰原、SK2、SK3掘削開始。
- 4日 SK1、13号窯、灰原掘削開始。
- 11日 SK3完掘。
- 12日 SK2完掘。
- 15日 13号窯窯体天井部検出。
- 17日 13号窯分焰柱確認。
- 22日 SK4完掘。
- 30日 13号窯窯体完掘。
- 8月7日 灰原掘削終了。
- 8日 北小木大谷洞28号窯(以下28号窯)、北小木神明洞1号炭焼窯(以下1号炭焼窯)現況測量。
28号窯、1号炭焼窯1辺4mのグリッド設定。
- 20日 28号窯、1号炭焼窯現況写真撮影。

- 21日 13号窯空撮。28号窯表土除去作業開始。
- 22日 13号窯遺構写真撮影。13号窯断ち割り開始。
- 26日 28号窯窯体検出。
- 9月3日 1号炭焼窯表土除去開始。13号窯断ち割り終了。写真撮影、実測開始。
- 5日 13号窯調査終了。
- 6日 1号炭焼窯窯体検出開始。
- 11日 28号窯断ち割り開始。
- 10月4日 28号窯全体図実測。1号炭焼窯完掘、空撮。
- 7日 1号炭焼窯断ち割り開始。
- 8日 28号窯、1号炭焼窯断ち割り終了。写真撮影、実測開始。
- 9日 28号窯、1号炭焼窯作業終了。現場撤収。
- 15日 考古地磁気測定、サンプリング。

(澤村雄一郎)

第2章 位置と環境

岐阜県多治見市は、岐阜県の南部、愛知県との県境付近に位置している。市域には古代から現代にいたるまで数多くの窯が築かれている。多治見市は「陶都」と称され、現代においても全国有数の陶磁器産地である。

本発掘調査が行われた大沢13号窯、北小木大谷洞28～30号窯、北小木神明洞1号炭焼窯は多治見市の西部、愛知県との県境付近に位置している。大沢13号窯、北小木大谷洞28～30号窯はいずれも山茶碗を焼成した窯で、北小木神明洞1号炭焼窯は木炭を焼成したと考えられる窯である。いずれも中世に築かれた古窯跡である。

第1節 地理的環境

多治見市から東方に位置する瑞浪市にかけては、標高500m以下の高原状の地形が広がる。そして、南は屏風山断層・笠原断層を境として三河高原につづき、東は阿寺断層を境として阿寺山地につづいている。

多治見市周辺には、中・古生層、花こう岩、新第三系が分布する。中・古生層は、この周辺の基盤となる岩層であり、美濃帯とよばれている。岩質は砂岩、泥岩、チャートなどである。花こう岩は、多治見市の東隣に位置する土岐市周辺に、中・古生層に貫入する形で分布する。この花こう岩は、土岐花こう岩とよばれる黒雲母花こう岩である。新第三系は、中・古生層と花こう岩を不整合で覆い、地表面近くに広く分布している。この新第三系が主に高原状の地形をつくっている。岐阜県東濃地域の第三系は、大きく2つの層群に分けることができる。下部層は瑞浪層群とよばれ、上部層は瀬戸層群とよばれている。多治見市周辺は、主に上部層の瀬戸層群が分布する。

新第三紀鮮新世（520～164万年前）を中心として、現在の伊勢湾周辺に大きな湖（東海湖）が存在した。この東海湖に堆積した地層を東海層群と呼ぶが、その一部が瀬戸層群である。瀬戸層群は、濃尾平野の地下をふくめ、それより東に分布する。東濃地域では、多治見市から中津川市にかけての広い地域に分布しており、下位から陶土層（土岐口陶土層）、土岐砂礫層に区分される。土岐砂礫層は、円礫層からなり、濃飛流紋岩類、花こう斑岩、チャート、ホルンフェルス、砂岩などの円礫を多量に含んでいる。この層は、基盤の凹地または断層運動による陥没盆地に多量の礫を供給する水系が流れこんでできたと考えられている。

陶土層は、主に石英粒を含む粘土（蛙目粘土）・炭質物を含む粘土（木節粘土）・石英砂（珪砂）などからなり、淘汰されていない礫層、火山灰層などをはさむ。また、陶土層は広い範囲に一様に分布するのではなく、一辺が数～十数kmの小さい凹地に分かれて分布する。特に多治見市付近に分布する陶土層には、木節粘土が多く分布する。基盤が中・古生層からなるため、堆積当時起伏が多く小さい盆地に分かれ、しかも植物が繁茂するのに十分な水をえやすい条件があったのだろうと考えられてい



第1図 多治見市の位置

る。

本調査地域が位置する大沢町付近には、チャート、砂岩、泥岩などの中・古生層と土岐砂礫層が分布し、土岐砂礫層が中・古生層を不整合に覆っている。そして、中・古生層が地表に露出しているところは300m以上の頂をもつやや険しい地形となり、土岐砂礫層が分布しているところは200～300mのややなだらかな地形となっている。そのため、地形図（2万5千分の1の地形図など）における等高線の幅の違いによって、地表の岩相の違いをつかむことができる。本調査地域には土岐砂礫層が広がっているが、調査地域南側の露頭では、一部破碎を受けているチャートを土岐砂礫層が不整合に覆っているのがみられる。土岐砂礫層の礫は、ほとんどがチャートの円礫であり、大きさは数cmのものが多い。

(藤岡比呂志)

第2節 歴史的環境

多治見市、土岐市、可児市、瑞浪市をはじめ、東濃地方では古墳時代から近・現代に至るまでの非常に数多くの古窯跡が存在している。これらを総称して東濃古窯跡群と呼ばれている。東濃古窯跡群では、7世紀代に須恵器窯が誕生し、隠居山窯（土岐市）、柿田窯（可児市）、大針第1号窯（多治見市）など10基程度が知られているが、当初は必ずしも活発な窯業生産とは言い難い状況であった。

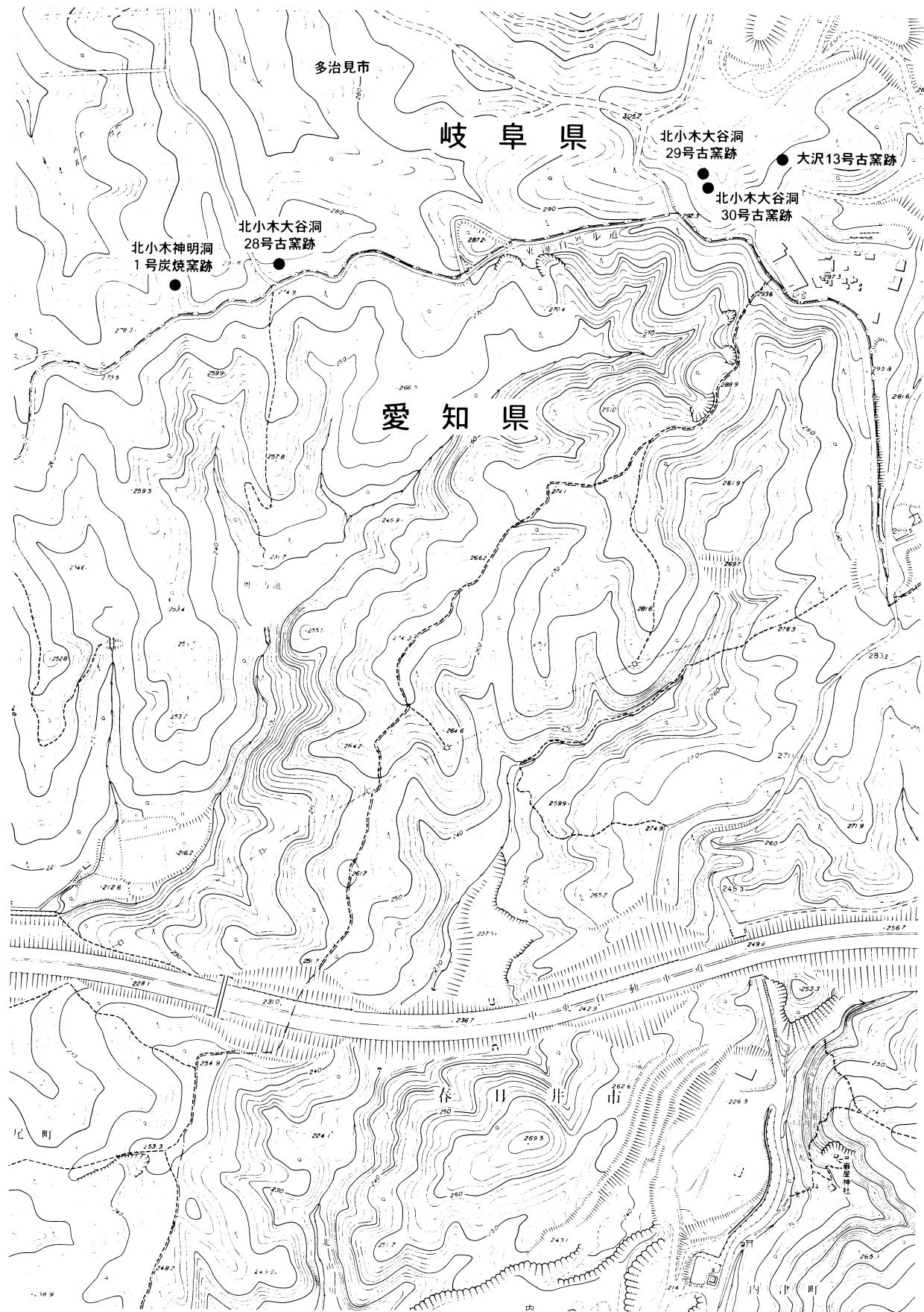
9世紀代に比定される古窯跡は東濃古窯跡群では確認されていない。その後10世紀代にはいると、数多くの窯が築かれ、白瓷（灰釉陶器）生産が本格化する。10世紀以降、現代にいたるまで東濃地方は常に全国有数の窯業産地として位置づけられている。

12世紀になると、白瓷系陶器（山茶碗）窯が築かれはじめ、古窯の数は爆発的に増加する。東濃古窯跡群においても、500基以上の山茶碗窯が周知されている。東濃古窯跡群で焼成された山茶碗は「北部系（均質手）山茶碗」とよばれ、粘土のきめが非常に細かくて、砂粒をあまり含まない。多治見市は東濃古窯跡群の分布の中心であり、多治見市内に所在する多くの古窯が、東濃古窯跡群における白瓷、山茶碗の型式編年上の標識遺跡となっている。

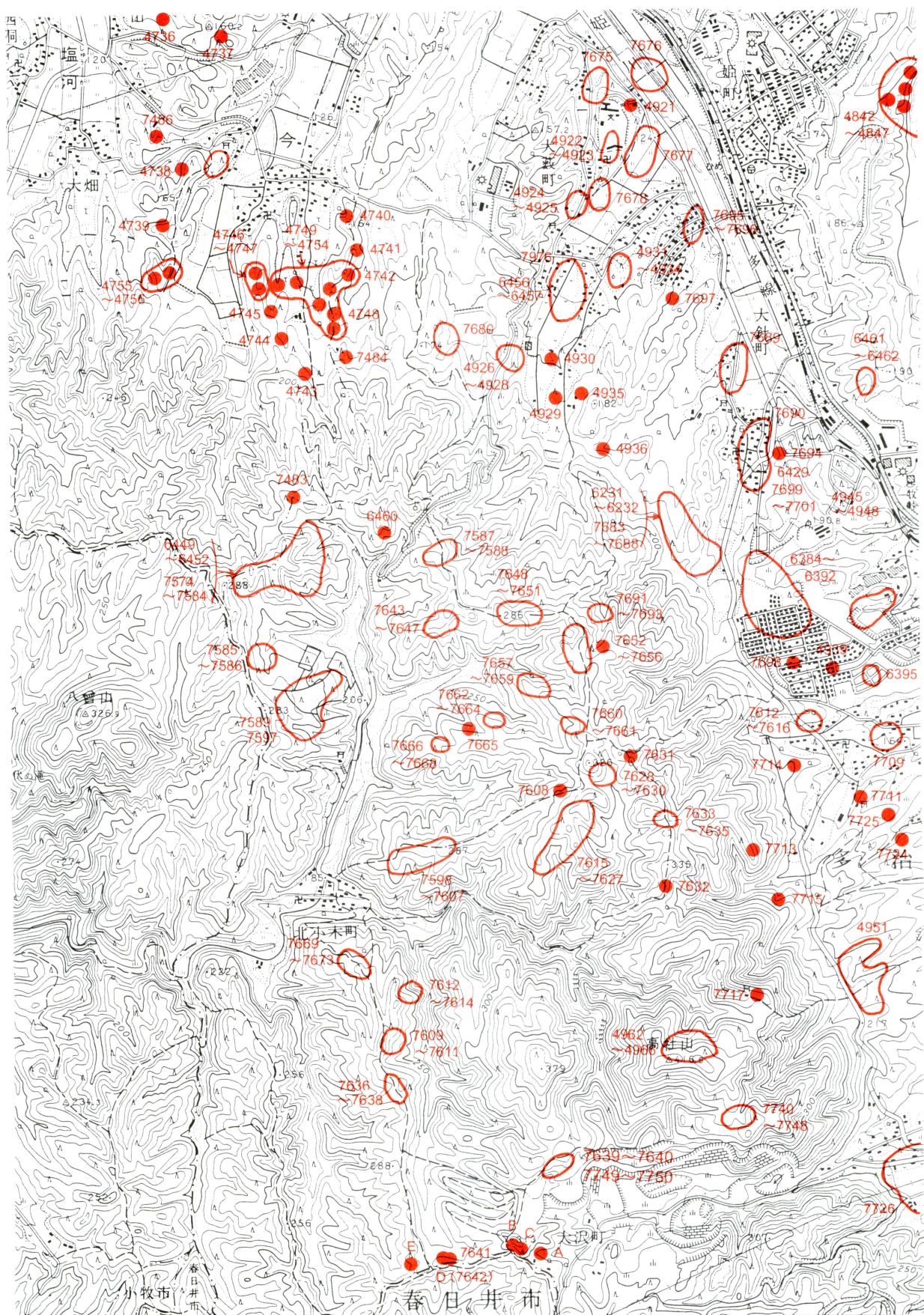
東濃古窯跡群における山茶碗の流通は、谷廻間2号窯式期（12世紀後半）には美濃東部にのみ流通していたと考えられている。その後流通圏が徐々に拡がり、白土原1号窯式期（13世紀中頃）には美濃地方全域に拡がる。また、明和1号窯式期（13世紀中頃～後半）には尾張西部にまで流通圏が拡大し、尾張型の山茶碗を駆逐するほどの流通量を誇ったといわれている。

本報告における北小木大谷洞28～30号古窯跡および大沢13号古窯跡は、この東濃古窯跡群に属する山茶碗窯であり、東濃古窯跡群の最盛期に山茶碗を焼成していたと考えられる古窯跡である。

(澤村雄一郎)



第2図 遺跡の位置 (多治見市都市計画図 (1:2500)を50%縮小掲載)



第3図 周辺の遺跡 (1:25,000)

表1 周辺の遺跡地名表

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時代	遺跡概況
A	古窯跡	大沢13号古窯跡	多治見市大沢町	山林	鎌倉	
B・C	古窯跡	北小木大谷洞29・30号古窯跡	多治見市北小木町	山林	鎌倉～室町	
D (G34KO7642)	古窯跡	北小木大谷洞28号古窯跡	多治見市北小木町	山林	鎌倉	
E	古窯跡	北小木神明洞1号炭焼窯跡	多治見市北小木町	山林	室町	
G34K04736	古窯跡	東山古窯跡	可児市塩河東山	山林	平安	
G34K04737	古窯跡	三段洞古窯跡	可児市今三反田	山林	平安	
G34K04738	古窯跡	大明洞古窯跡	可児市塩河大明洞	山林	平安・鎌倉	
G34K04739	古窯跡	新道古窯跡	可児市塩河大明洞	山林	平安	
G34K04740	古墳	天神山古墳	可児市今唐沢	山林	古墳	円墳
G34K04741	古墳	初の墓古墳	可児市今唐沢	山林	古墳	円墳
G34K04742	古窯跡	ウラナシ古窯跡	可児市今釜ヶ谷	山林	中世	
G34K04743	古墳	一本松古墳	可児市今釜ヶ谷	山林	古墳	円墳
G34K04744	古墳	万寿馬場古墳	可児市今釜ヶ谷	山林	古墳	円墳
G34K04745	古墳	神明山古墳	可児市今唐沢	山林	古墳	円墳
G34K04746～47	古墳	ウラナシ4・5号古墳	可児市浦無	山林	古墳	円墳
G34K04748	古窯跡	ヒツツキ古窯跡	可児市今唐沢	山林	鎌倉・室町	
G34K04749	古窯跡	小唐沢1号古窯跡	可児市今唐沢	山林	平安	
G34KO4754	古窯跡	小唐沢6号古窯跡	可児市今唐沢	山林	鎌倉・室町	
G34K04755～56	古窯跡	塩河土取場1・2号古窯跡	可児市塩河大明洞	山林	平安鎌倉室町	
G34K04842～47	古窯跡	大森新田筐洞1～6号古窯跡	可児市大森筐洞	山林	平安・鎌倉	
G34K07483	古窯跡	本松古窯跡	可児市今釜ヶ谷	山林	古墳	
G34K07484	古墳	釜ヶ谷古墳	可児市今釜ヶ谷	山林	古墳	
G34K07486	古墳	神明洞古墳	可児市今神明洞	山林	古墳	
G34T04921	古墳	諸家1号古墳	多治見市姫町諸家1238-1	学校敷地	古墳	円墳
G34T04922	古墳	諸家2号古墳	多治見市姫町諸家1345-1	学校敷地	古墳	円墳
G34T04923	古墳	諸家3号古墳	多治見市姫町諸家1238	山林	古墳	円墳
G34T04924～25	古窯跡	山下1・2号古窯跡	多治見市大藪町山下	山林	平安	
G34T04926～28	古墳	大山1～3号古墳	多治見市大藪町大山	山林	古墳	円墳
G34T04929	古墳	深山1号古墳	多治見市大藪町深山1937	荒蕪地	古墳	円墳
G34T04930	古墳	深山2号古墳	多治見市大藪町深山1890	荒蕪地	古墳	円墳
G34T04931～34	古墳	円田1～4号古墳	多治見市大藪町円田	宅地・畠	古墳	円墳
G34T04935	古墳	円田5号古墳	多治見市大藪町円田	宅地	古墳	円墳
G34T04936	古墳	馬隱古墳	多治見市大藪町円田	山林	古墳	円墳
G34T04939	古窯跡	北丘3号古窯跡	多治見市北丘町5丁目	宅地	鎌倉	白瓷系陶器
G34T04945～48	古窯跡	北丘9～12号古窯跡	多治見市北丘町7・8丁目	宅地・その他	平安鎌倉江戸	白瓷系陶器
G34T04951	散布地	白土原遺跡	多治見市昭栄町・大原町	山林	縄文	
G34T04962～66	古窯跡	高社山1～5号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T06231・32	古窯跡	大針1・2号古窯跡	多治見市大針町	道路敷	平安・鎌倉	白瓷
G34T06384～91	古窯跡	北丘14～21号古窯跡	多治見市北丘町	宅地・道路敷	平安・鎌倉	白瓷白瓷系陶器
G34T06392	古窯跡	北丘22号古窯跡	多治見市西山町	道路地	平安	白瓷
G34T06395	古窯跡	北丘25号古窯跡	多治見市北丘町5丁目	宅地	平安	
G34T06429	古窯跡	北丘27号古窯跡	多治見市北丘町5丁目	宅地	平安	白瓷
G34T06432	古窯跡	大針3号古窯跡	多治見市大針町	道路敷	平安	白瓷
G34T06449～52	古窯跡	北小木大上1～4号古窯跡	多治見市北小木町大上	その他	鎌倉	白瓷系陶器
G34T06456～57	古窯跡	大藪町迫谷洞1・2号古窯跡	多治見市大藪町迫谷洞	道路敷	平安・鎌倉	白瓷系陶器
G34T06460	古窯跡	北小木大上5号古窯跡	多治見市北小木町大上	道跡ほか	鎌倉	白瓷系陶器
G34T06461～62	古窯跡	大針塩井戸1・2号古窯跡	多治見市大針町塩井戸	原野・宅地	平安・鎌倉	白瓷系陶器
G34T07574～84	古窯跡	北小木大上6～16号古窯跡	多治見市北小木町大上	その他	鎌倉・室町	白瓷系陶器
G34T07585～86	古窯跡	北小木大上17・18号古窯跡	多治見市北小木町大上	その他	鎌倉・室町	白瓷系陶器

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時代	遺跡概況
G34T07587	古窯跡	北小木大上19号古窯跡	多治見市北小木町大上	その他	中世	白瓷系陶器
G34T07588	古窯跡	北小木大上20号古窯跡	多治見市北小木町大上	その他	中世	白瓷系陶器
G34T07589～97	古窯跡	北小木萱原1～9号古窯跡	多治見市北小木町萱原	その他	鎌倉、室町	白瓷系陶器
G34T07598～607	古窯跡	北小木神明洞1～10号古窯跡	多治見市北小木町神明洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07608	古窯跡	北小木神明洞11号古窯跡	多治見市北小木町神明洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07609～14	古窯跡	北小木神明洞12～17号古窯跡	多治見市北小木町神明洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07615～30	古窯跡	北小木大谷洞1～16号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07632	古窯跡	北小木大谷洞17号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07633～35	古窯跡	北小木大谷洞19～21号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07636～38	古窯跡	北小木大谷洞17号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07639～40	古窯跡	北小木大谷洞25号・26号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07641～42	古窯跡	北小木大谷洞27・28号古窯跡	多治見市北小木町大谷洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07643～51	古窯跡	北小木一之洞1～9号古窯跡	多治見市北小木町一之洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07652～56	古窯跡	北小木一之洞10～14号古窯跡	多治見市北小木町一之洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07657～59	古窯跡	北小木一之洞15～17号古窯跡	多治見市北小木町一之洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07660～61	古窯跡	北小木一之洞18～19号古窯跡	多治見市北小木町一之洞	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07662～64	古窯跡	北小木畠欠田1号～3号古窯跡	多治見市北小木町畠欠田	山林	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07665	古窯跡	北小木畠欠田4号古窯跡	多治見市北小木町畠欠田	山林	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07666～68	古窯跡	北小木浜井場1～3号古窯跡	多治見市北小木町浜井場	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07669～73	古窯跡	北小木天堤1～5号古窯跡	多治見市北小木町天堤	山林	中世	白瓷系陶器
G34T07675	散布地	大藪西山遺跡	多治見市大藪西町	畑・宅地	鎌倉～近世	
G34T07676	散布地	大藪八幡前遺跡	多治見市大藪八幡前	田畠	鎌倉～近世	
G34T07677	散布地	南姫小学校東遺跡	多治見市大藪町諸屋	田畠	古墳～中世	
G34T07678	散布地	大藪山下遺跡	多治見市大藪町山下	畑・宅地	鎌倉～近世	
G34T07680	古窯跡	大藪迫谷洞3号遺跡	多治見市大藪町迫谷洞	道路敷	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07683～88	古窯跡	大針6～11号古窯跡	多治見市大針町	道路敷	平安	白瓷白瓷系陶器
G34T07689	古窯跡	大針屋作遺跡	多治見市大針町屋作	畠地他	繩文～近世	
G34T07690	古窯跡	大針起遺跡	多治見市大針町起	畑・宅地	中世～近世	
G34T07691～93	古窯跡	大針屋作1～3号古窯跡	多治見市大針町屋作	山林	鎌倉	
G34T07694	古窯跡	大針起1号古窯跡	多治見市大針町起	山林	平安	白瓷
G34T07695	古窯跡	大針台1号古窯跡	多治見市大針町台	宅地	奈良	
G34T07696	古窯跡	大針台2号古窯跡	多治見市大針町台	宅地	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07697	古窯跡	大針台3号古窯跡	多治見市大針町台	学校敷地	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07698	古墳	北丘1号古墳	多治見市北丘町8-7	宅地	古墳	
G34T07699～701	古墳	北丘2～4号古墳	多治見市北丘町7丁目	宅地	古墳	
G34T07709	散布地	根本中屋敷遺跡	多治見市根本町10丁目	畑・宅地	古墳～中世	
G34T07711	古窯跡	根本諷訪神社1号古墳跡	多治見市根本町	境内地	平安	白瓷系陶器
G34T07712	古窯跡	根本窯坂古窯跡	多治見市根本町11丁目	山林	近世	連房式登り窯
G34T07713	城館跡	根本砦跡	多治見市西山町2丁目	山林	中世	若尾元昌砦跡
G34T07714	屋敷跡	根本御殿屋敷跡	多治見市根本町、西山町	山林	中世	若尾元昌屋敷跡
G34T07715	屋敷跡	根本いんりよ洞屋敷跡	多治見市西山町1丁目	山林	中世	
G34T07716	屋敷跡	根本代官屋敷跡	多治見市根本町12丁目	原野・畑	近世	
G34T07717	その他	高社遺跡	多治見市西山町1丁目	山林	平安	祭祀遺跡
G34T07718～20	古窯跡	白土原1～3号古窯跡	多治見市昭栄町96-18	その他	平安	白瓷系陶器
G34T07725	古窯跡	白土原8号古窯跡	多治見市昭栄町	その他	平安	白瓷系陶器
G34T07726	散布地	大原3丁目遺跡	多治見市大原3丁目5丁目	田畠	鎌倉～近世	
G34T07718～20	古窯跡	白土原1～3号古窯跡	多治見市昭栄町96-18	その他	平安	白瓷系陶器
G34T07740～48	古窯跡	大沢1～9号古窯跡	多治見市大沢町、北小木町大谷洞	山林	鎌倉	白瓷系陶器
G34T07749～50	古窯跡	大沢10～11号古窯跡	多治見市大沢町2丁目	山林	鎌倉	白瓷系陶器

第3章 北小木大谷洞29・30号窯

第1節 遺構

平成7年度調査によって検出された遺構は、2基の山茶碗を焼成した窯跡（北小木大谷洞29号窯・30号窯）と3基の山茶碗焼成に伴う廃棄土坑（SK1～3）、1基の焼土坑（SK4）、それに灰原の一部である。

調査区には4m単位のグリッドを設定し、各グリッドの名称は北西隅のポイント名をあてた。これを基本として掘り下げ作業や遺物の取り上げ作業を行った。窯体については主軸を見定めた時点で、各々新たに軸線を設け、掘り下げや遺物の取り上げ、それに実測作業を行った。

以下、調査結果を各遺構ごとに記す。また、最後に窯体を断ち割り、窯の構築方法等について検討した。

1. 北小木大谷洞29号窯

北小木大谷洞29号窯は調査区の西半部、標高304.5m～307.7mの南西向き斜面に構築された窯窓である。主軸はN-61°-Eであり、等高線に対してほぼ直交する。残存する全長は、焚口開口部から現存する煙道部先端までで計測して8.23mを測る。床面最大幅は、分焰柱中心から後方へ1.46mの位置で2.12mを測る。断ち割り調査によって最低1回の改修が確認された。

燃焼室 燃焼室は、焚口開口部から分炎柱中心までで計測して、長さ1.98mを測る。幅は焚口末端付近の最も狭まるところで0.90m、後方に進むにつれて広がり、分焰柱中心では1.76mを測る。床面は、一旦わずかに下がったのちに、緩やかに立ち上がる。床面傾斜角度は、平均約12°を測る。ほぼ全面に砂質土が貼られ、被熱硬化し青灰色を呈していた。側壁は、やや斜め上方に直線的に立ち上がる。分焰柱寄りの部分では、焼成室から続く青灰色のスサを含まない被熱硬化粘土貼壁が認められるが、焚口寄りの部分では、被熱硬化し黄褐色を呈する地山が露出していた。天井は残存していない。

分焰柱は、残存高0.25mを測る。基底部の平面形は楕円形を呈し、主軸方向で0.66m、主軸直交方向で0.40mを測る。分焰柱と両側壁との間の床には厚さ10cm程の粘土を貼って段を造っている。

燃焼室では床・側壁ともに改修の痕跡は確認されなかった。

焼成室 焼成室は、分焰柱中心から煙道部との境とみられる床幅の開き方の変換点までで計測して、長さ4.60mを測る。幅は引き続き広がり続け、窯体のほぼ中央、分焰柱中心の後方1.46mで最大幅2.12mに達し、ここからは狭まって煙道部との境では0.66mとなる。床面傾斜は、目立った角度変換点を持たずに緩やかに増し続け、分焰柱後方では16°だが、煙道部手前では22°に達する。側壁は、床との境より10cm～30cm程度上の位置まで緩やかに開き、その上方は緩やかに狭まって、横断面形は曲線状をなす。

最終操業床面には粒子の細かい粘土を貼ったものとみられ、床面の調整痕や焼台設置の痕跡が良好に残っていた。東半部では、指撫でによるとみられる平行線状の撫で痕と、ヘラ状工具によるとみられる削り痕とが混在する。ヘラ状工具は幅3cm程度のもので、これを斜めに傾けて斜面下方へ引いて

削っている。西半部では、指撫でによるとみられる平行線状の撫で痕のみがみられる。4条が一単位を成し、また、それらの起点での形が親指を除く手の四指に一致する例が認められるので、4本の指をそろえて斜面下方へ向けて撫でていることがわかる。これら床面の完存する部分では、床表面は青灰色を呈するのを基本とするが、被熱の度合いがやや弱く赤褐色を呈する部分が規則的に並ぶのを認めた。それらは各々直径8cm前後の円形をなしており、焼台設置部分の床面が還元焰焼成とならずに酸化焰焼成となったものであろう。なお、ほぼ原位置を保っているとみられる焼台はそれらとは別に7個残っていた。土の塊を上面が水平になるように床に押さえつけて貼り、碗の底部が納まるよう中央を窪めている。また、床面には布目痕が3か所で認められた。布目密度は、いずれも1cmあたりに糸9~10本×11~12本程度である。窯構築に携わった工人の衣服による圧痕と考えられる。

断ち割り作業を実施したところ、貼床の厚さは最大で8cm程度で、床下には最大20cmの厚さの礫混じり砂質土を充填していることを確認した。この充填土は山茶碗類の小破片を含んでいる。確証はないものの、意識的に小破片のみを混入しているような印象を受けた。これは窯内の湿気抑えの効率化を狙ったものであると考えることが可能かもしれない。

なお、貼床と充填土との間に、極めて部分的にではあるが、炭層と青灰色被熱層の痕跡が認められた。これは最終操業より前に行われた操業時の床面の痕跡であると考えられるので、29号窯では複数回の操業が行われたことが確実といえる。

側壁は青灰色の被熱硬化粘土貼壁を基本とする。粘土にはスサは混入されていない。改修の痕跡は認められなかつた。

焼成室でも天井は残存していないが、崩落天井は側壁同様のスサを含まぬ粘土塊であり、その上を地山土が覆うとは認めがたい状況であった。このことから、29号窯は半地下式構造を探っていたか、あるいは深度の浅い地下式構造を探っていたかのいずれかであると判断される。

煙道部との境付近において、その前面に比べて被熱の度合がやや弱く黄褐色を呈する、高さ5cm程の貼付け粘土を検出した。この部分の前後で床と側壁の焼け方に顕著な相違が認められるので、これはダンパーの役割を果たした施設の痕跡と考えられる。この部分には、直径5cm程の円形の窪みが7箇所みられるが、既往の調査例から類推して、これらはダンパーの芯材を固定した穴であると考えられよう。

煙道部 煙道部は、燃焼室との境から残存長1.65mを測るもの、先端部分が現存していない。幅は、一旦、わずかに広がり、焼成室との境から0.32m後方で幅0.67mを測るが、その後方では再び狭まる。床面傾斜は、一旦、焼成室に比べて緩くなり、15°程度となる。その後方は再び角度を増すが、床面が完存しないため、計測は困難である。側壁は斜め上方に直線的に立ち上がる。

床面と壁面は地山掘り抜きのままで粘土等は貼っておらず、被熱して赤褐色を呈する。煙道部では壁面や床面が還元焰焼成となっていないことから、ダンパーより後方では焼成時にも開放状態であったことがわかり、したがって天井は架けられていなかったものと判断される。

前庭部 前庭部は焚口の手前に直径4.8mを測る不整な円形を呈して拡がる。前庭部には灰層の堆積はみられず、後の流入土が厚さ20cm程度堆積するにすぎなかつた。そのため、遺物・炭・焼土等はほとんど出土しなかつた。

2. 北小木大谷洞30号窯

北小木大谷洞30号窯は調査区の東半部、標高302.7m～307.6mの南西向き斜面に構築された窯窯である。主軸はN-65°-Eであり、等高線に対してほぼ直交する。全長は、焚口開口部から煙道部先端まで計測して11.24mを測る。床面最大幅は、分焰柱中心から後方へ1.45mの位置で2.48mを測る。断ち割り調査によって最低2回の改修が確認された。なお、前庭部については、大部分が調査区外となるため、調査を実施できたのは焚口との接続部分のみである。

燃焼室 燃焼室は、焚口開口部から分焰柱中心まで計測して、長さ2.69mを測る。幅は、焚口末端が最も狭く、1.08mを測り、後方に進むにつれて広がり、分焰柱中心では2.00mとなる。床面傾斜角度は、焚口付近ではほぼ0°だが、分焰柱付近では14°に達する。床面は、ほぼ全面、砂質土が貼られ、被熱硬化し青灰色を呈していた。側壁は、やや斜め上方に直線的に立ち上がる。分焰柱寄りの部分では、焼成室から続く青灰色のスサを含まない被熱硬化粘土貼壁が認められるが、焚口寄りの部分では、被熱硬化し黄褐色を呈する地山が露出していた。天井は残存していない。

分焰柱は、比較的残りがよく、残存高0.85mを測る。基底部の平面形は不整な円形を呈し、主軸方向で0.58m、主軸直交方向で0.52mを測る。断ち割り調査の結果、分焰柱中心には芯材の痕跡とみられる空洞が認められた。分焰柱の外壁にはスサを含む粘土を使用しており、柱内の充填土には焼台とスサを混入させている。また、東半部では改修の痕跡が認められる。

床・側壁の断ち割り調査の結果、燃焼室では床面は最終床を含めて2面が確認された。側壁については改修の痕跡は認められなかった。

焼成室 焼成室は、分焰柱中心から煙道部との境とみられる床幅の開き方の変換点まで計測して、長さ4.85mを測る。幅はさらに広がり続け、窯体のほぼ中央、分焰柱中心の後方1.45mで最大幅2.48mに達し、ここからは狭まって煙道部との境では0.88mとなる。床面傾斜は、目立った角度変換点を持たず緩やかに増し続け、分焰柱後方では24°だが、煙道部手前では27°に達する。側壁は、床との境より10cm～30cm程度上の位置まで緩やかに開き、その上方は緩やかに狭まって、横断面形は曲線状をなす。

断ち割り作業を実施したところ、貼床の厚さは最大で3cm程度で、床下には最大35cmの厚さの礫混じり砂質土を充填していることを確認した。29号窯の場合とは異なり、充填土には山茶碗破片は混入していない。また、掲載した断面図では表現しえなかつたが、焼成室の燃焼室寄りの壁際の部分では、焼成室の最終床である赤褐色砂質土の下に燃焼室の最終床から続く青灰色砂質土が潜り込んでいることが判明した。このことから30号窯では合計3面の床が確認されたことになり、最低2回の改修が行われたことがわかる。

側壁は青灰色の被熱硬化粘土貼壁を基本とする。表面には指撫で痕が部分的に認められる。粘土にはスサは混入されていない。改修の痕跡は明確には認められなかった。

焼成室でも天井は残存していないが、崩落天井は側壁同様のスサを含まぬ粘土塊であり、その上を地山土が覆うとは認めがたい状況であった。このことから、30号窯も半地下式構造を探っていたか、あるいは深度の浅い地下式構造を探っていたかのいずれかであると考えている。

煙道部との境付近において、その前面に比べて被熱の度合がやや弱く黄褐色を呈する、高さ5cm程の貼付け粘土を検出した。この部分の前後で床と側壁の焼け方に顕著な相違が認められるので、29号窯のものに比べれば残りが悪いものの、これはダンパーの役割を果たした施設の痕跡と考えられる。

煙道部 煙道部は、燃焼室との境から先端まで長さ3.70mを測る。幅は後方に進むにつれて、ほぼ狭まる一方である。床面傾斜は、一旦、焼成室に比べてやや緩くなり、25°程度となる。その後方は再び角度を増して、先端部では36°に達する。側壁は斜め上方に直線的に立ち上がるが、東側壁の方が開き方が大きい。

床面と壁面は地山掘り抜きのままで粘土等は貼っておらず、被熱して赤褐色を呈する。煙道部では壁面や床面が還元焰焼成となっていないことから、ダンパーより後方では焼成時にも開放状態であったことがわかり、したがって天井は架けられていなかったものと判断される。

前庭部 大部分が調査区域外となるため、形状等については不明である。最終操業時の灰層の上に、29号窯からの灰層が堆積していた。

3. 灰原・土坑

灰原については、今回の調査区域内で検出された部分は全体のごく一部にすぎず、大部分はさらに斜面下方に展開するものと思われる。しかし、灰原内で廃棄土坑群SK1～3が検出されたため、山茶碗と焼台とあわせてコンテナ200箱分を超える量の遺物が出土した。検出した灰原のうち面積から見ても多くの部分を廃棄土坑群が占めているので、ここでは灰原と土坑群とをまとめて報告する。

SK1 30号窯焚口の西隣に位置する。平面形は、長軸を等高線直交方向に持つ橢円形を呈する。長軸2.20m、短軸1.92m、深さは検出面から0.4mを測る。

SK2 SK1の西隣に位置し、SK3の大部分を覆っている。平面形は、長軸を等高線直交方向に持つ橢円形に近い不整な円形を呈する。長軸5.00m、短軸4.40m、深さは検出面から1.2mを測り、山茶碗焼成に伴う廃棄土坑としては極めて大型である。南端部分は、30号窯構築時の掘り抜き排土とみられる層を掘り込んでいる。

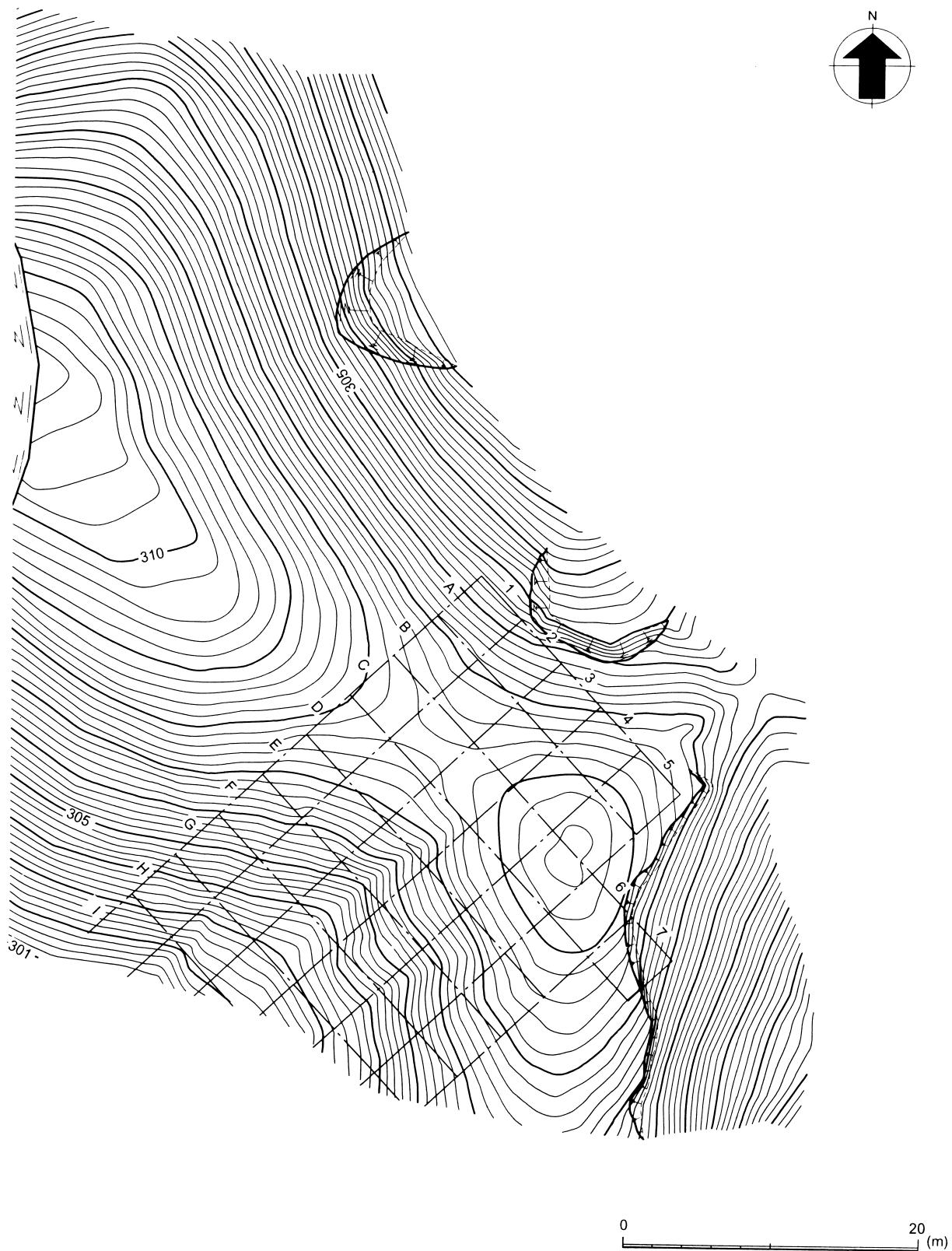
SK3 SK1の南西隣に位置する。SK1の南西端を切って掘り込まれている。平面形は、一辺2.00mを測る不整な隅丸方形を呈する。SK3の大部分はSK2に覆われているが、SK3とSK2の埋土堆積状況の検討から、その深さは0.8m程度であると判断される。

SK4 29号窯の北方の平坦面に位置する。平面形は、長軸2.00m、短軸1.00mを測る長い橢円形を呈する。深さは最大で0.15m程度を測るにすぎない。壁面の大部分は被熱して赤褐色を呈し、底部には青灰色を呈する部分もみられた。埋土からは遺物がほとんど出土せず、その性格は不明である。

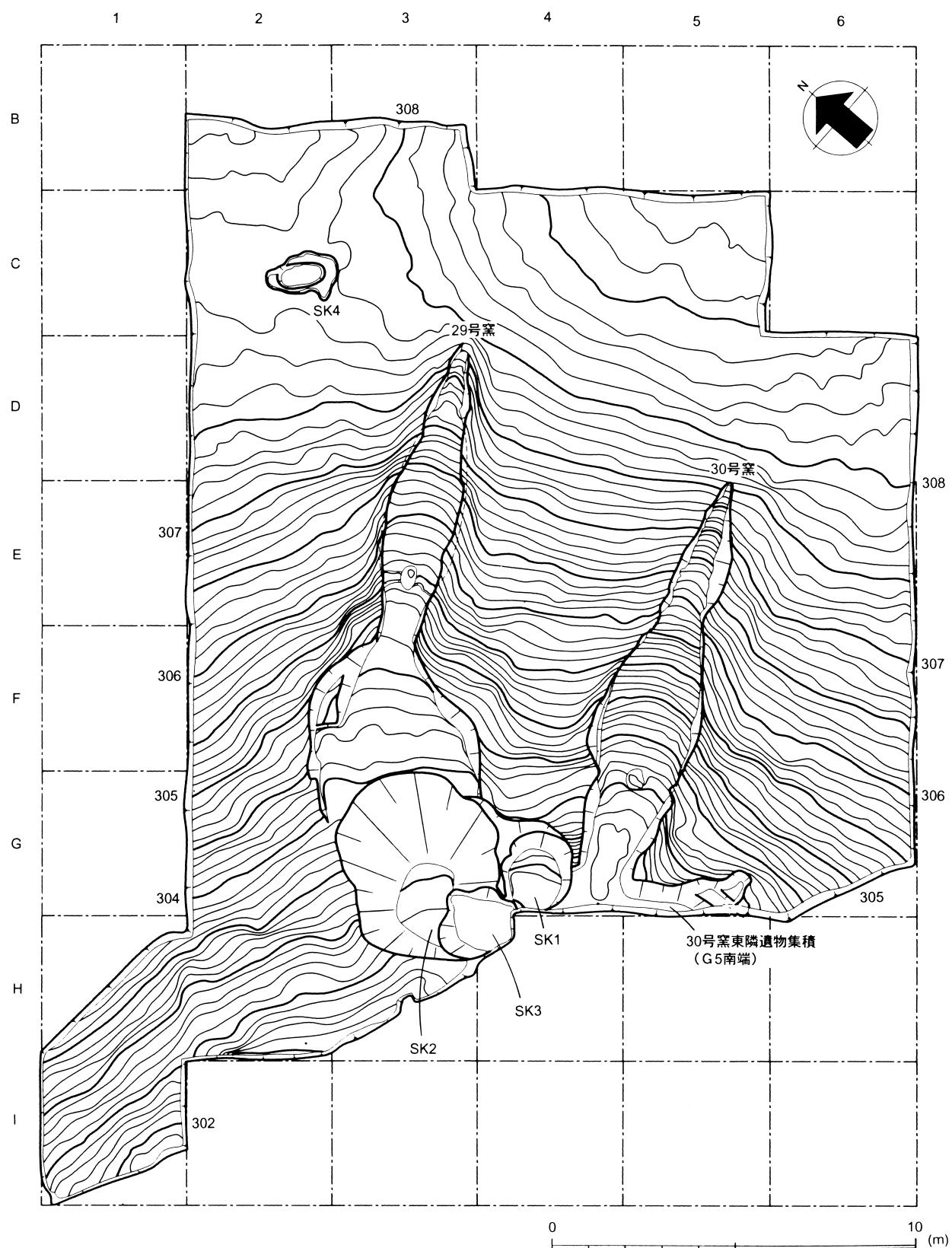
(小淵忠司)

第2節 遺 物

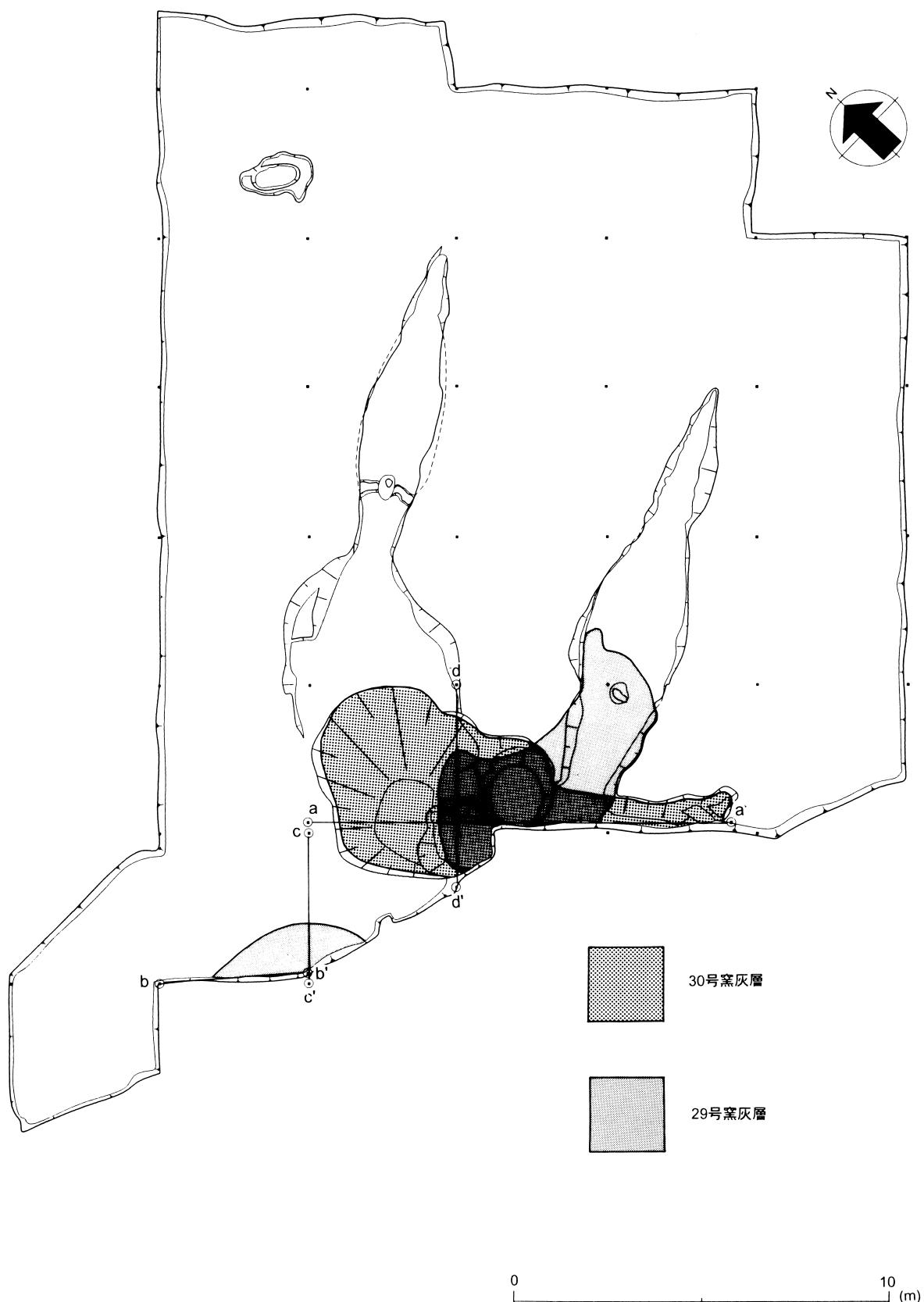
29、30号窯とともに白瓷系陶器（山茶碗）を焼成している。土坑（SK1～3）からは、いずれかの窯で焼成されたと思われる白瓷系陶器が出土している。これらはいずれも砂粒をほとんど含まない緻密な胎土をもつ「北部系山茶碗」である。全体によく焼き締まっており、色調は多くは灰白色であるが、焼成温度の低いものは黄灰白色を呈するものもある。器種構成は碗、皿が主体をなすが、それ以外の器種も、若干ではあるが確認されている。碗、皿、蓋は形態などから、それぞれI～IV類に分類できる。本調査においては他の窯でも同様の分類基準を用いているため、I～IV類の詳細については第8章（まとめ）で述べることとする。



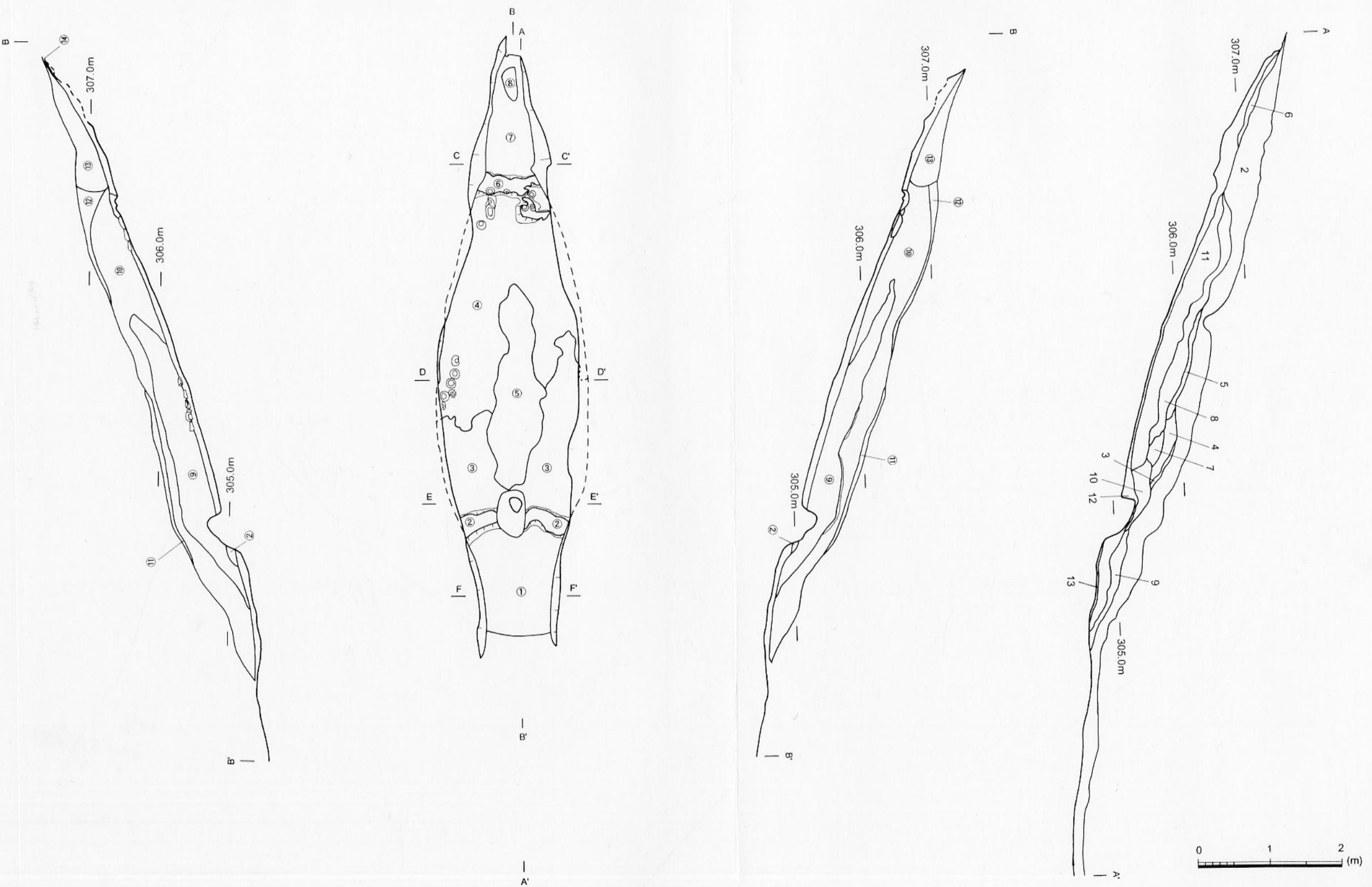
第4図 北小木大谷洞29・30号窯調査前地形図 (S=1:400)



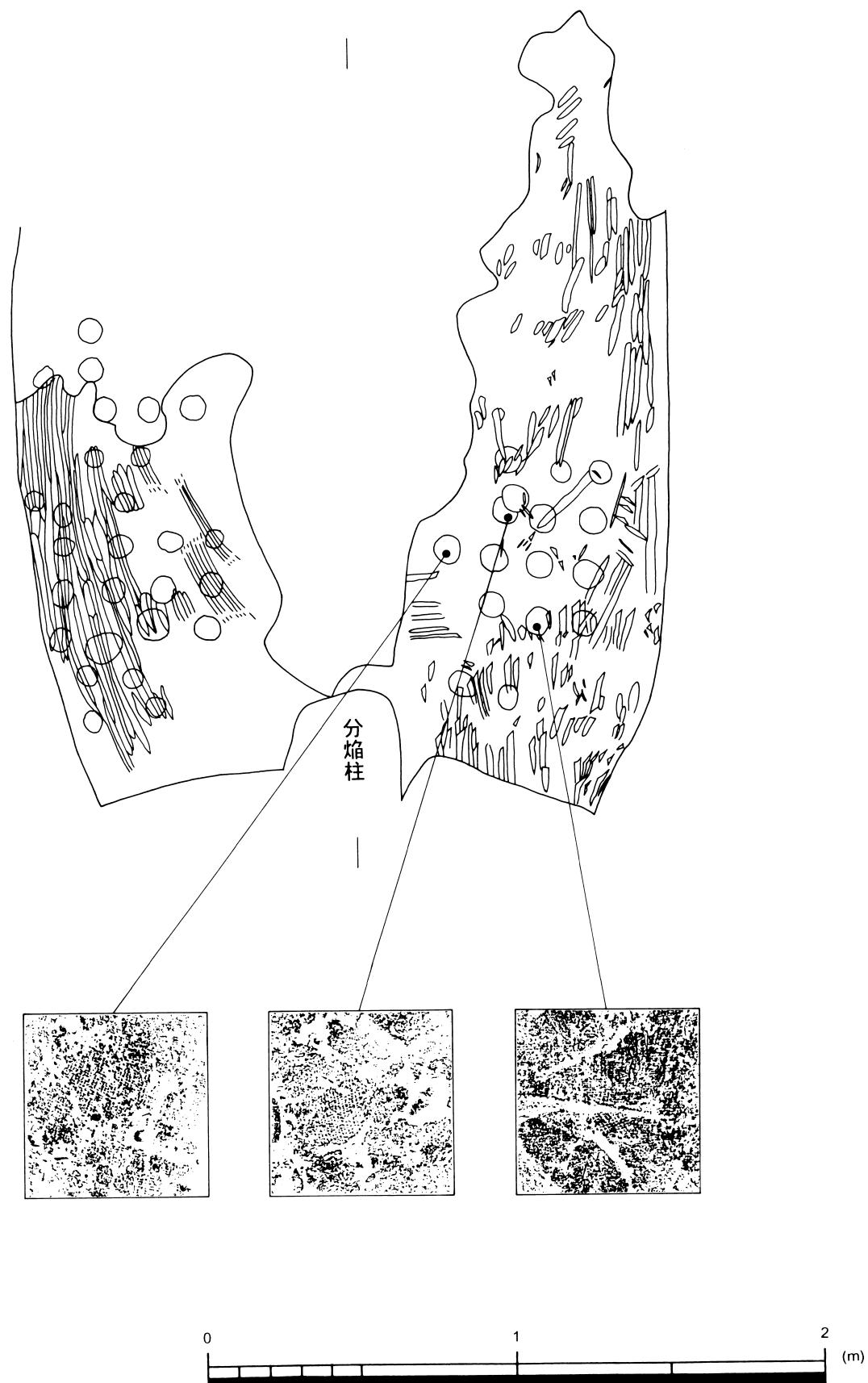
第5図 北小木大谷洞29・30号窯全体図 (S=1:160)



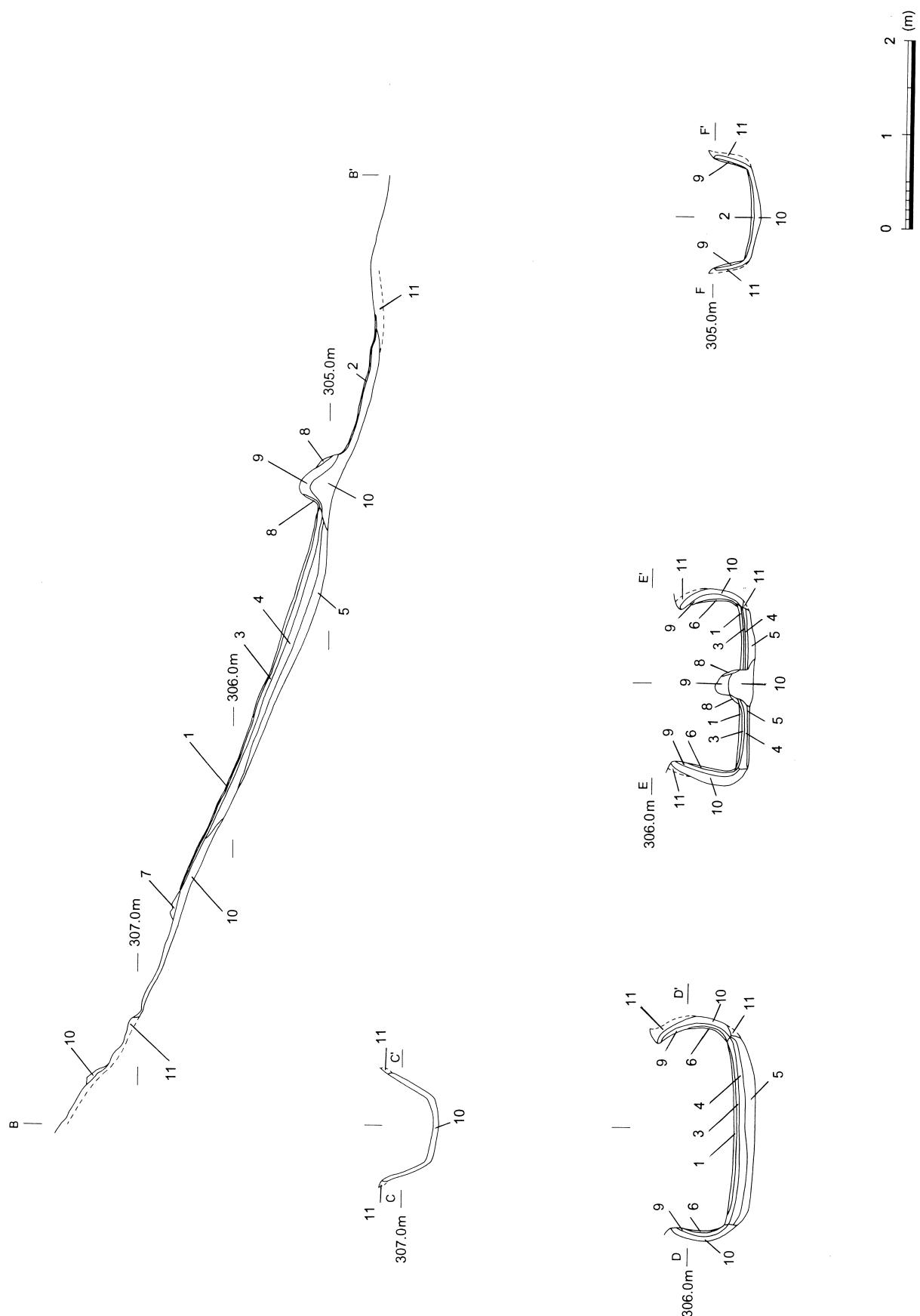
第6図 北小木大谷洞29・30号窯灰層平面図 ($S=1:160$)



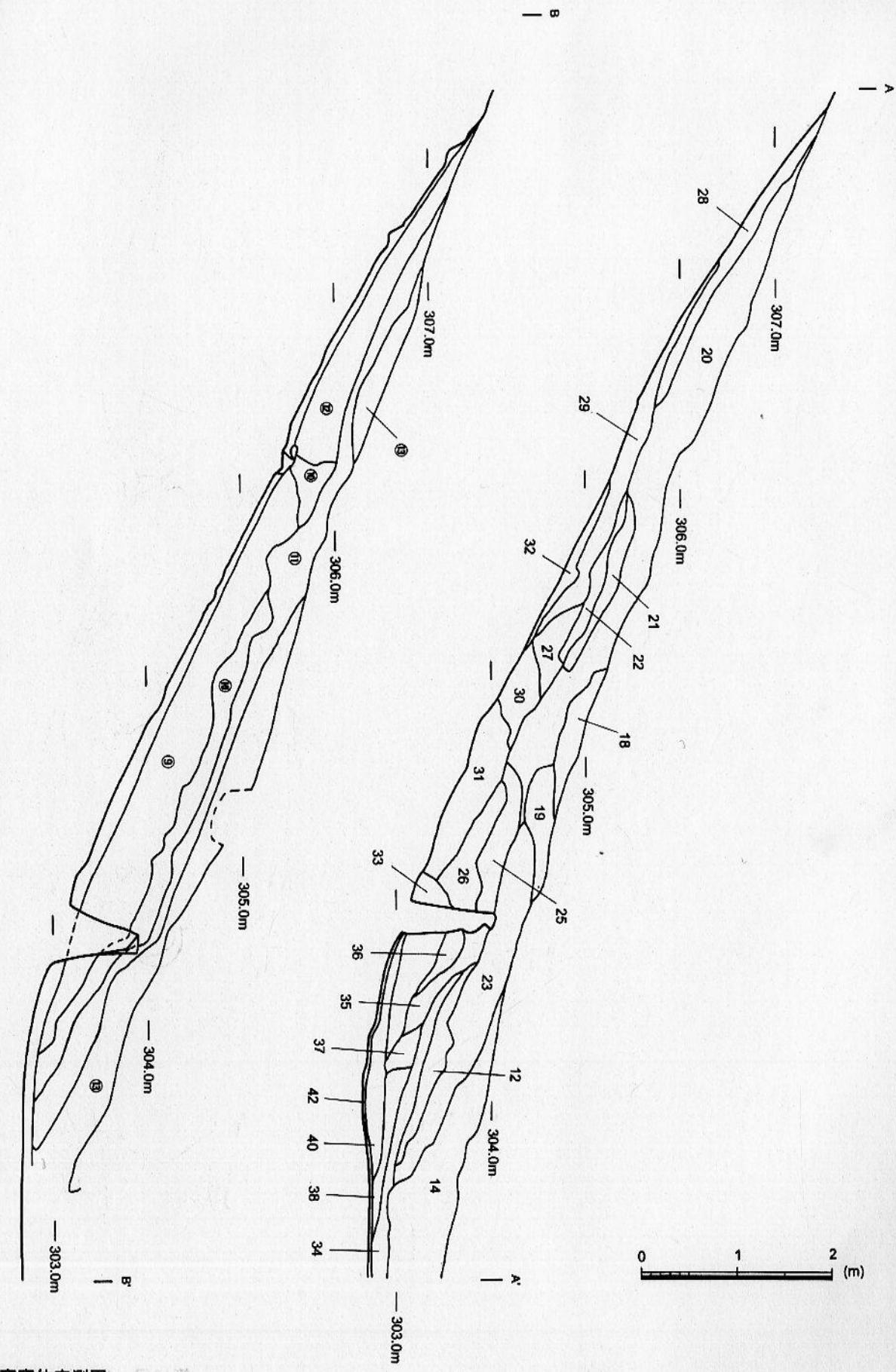
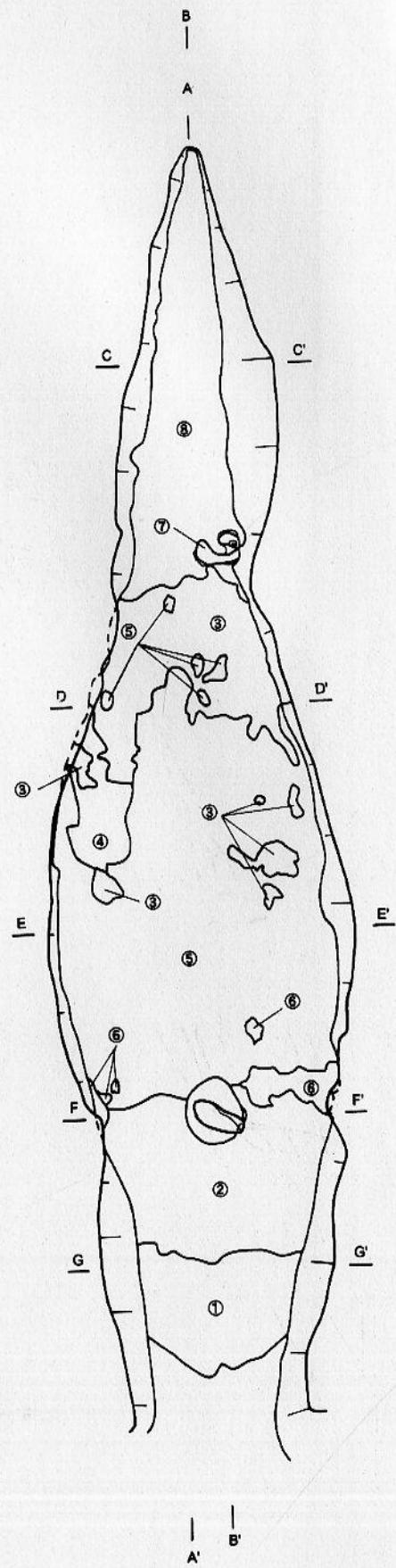
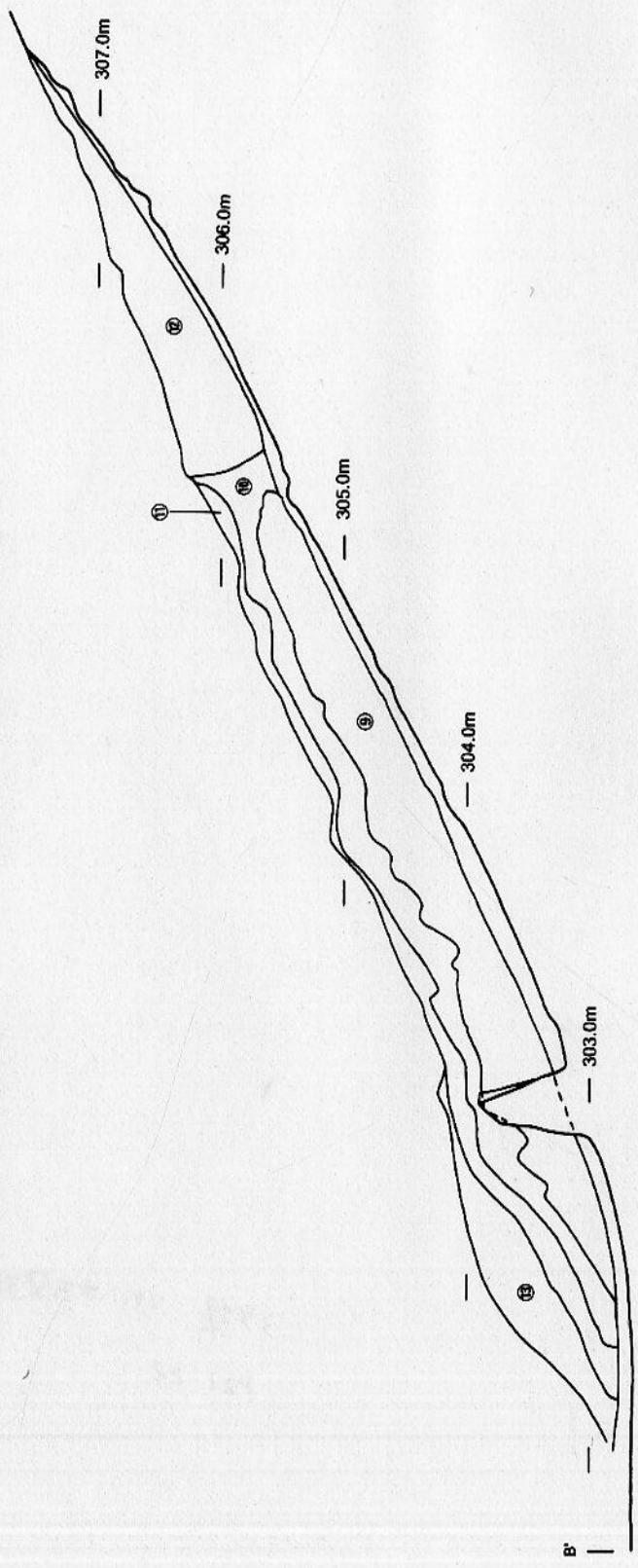
第7図 北小木大谷洞29号窓窓体実測図



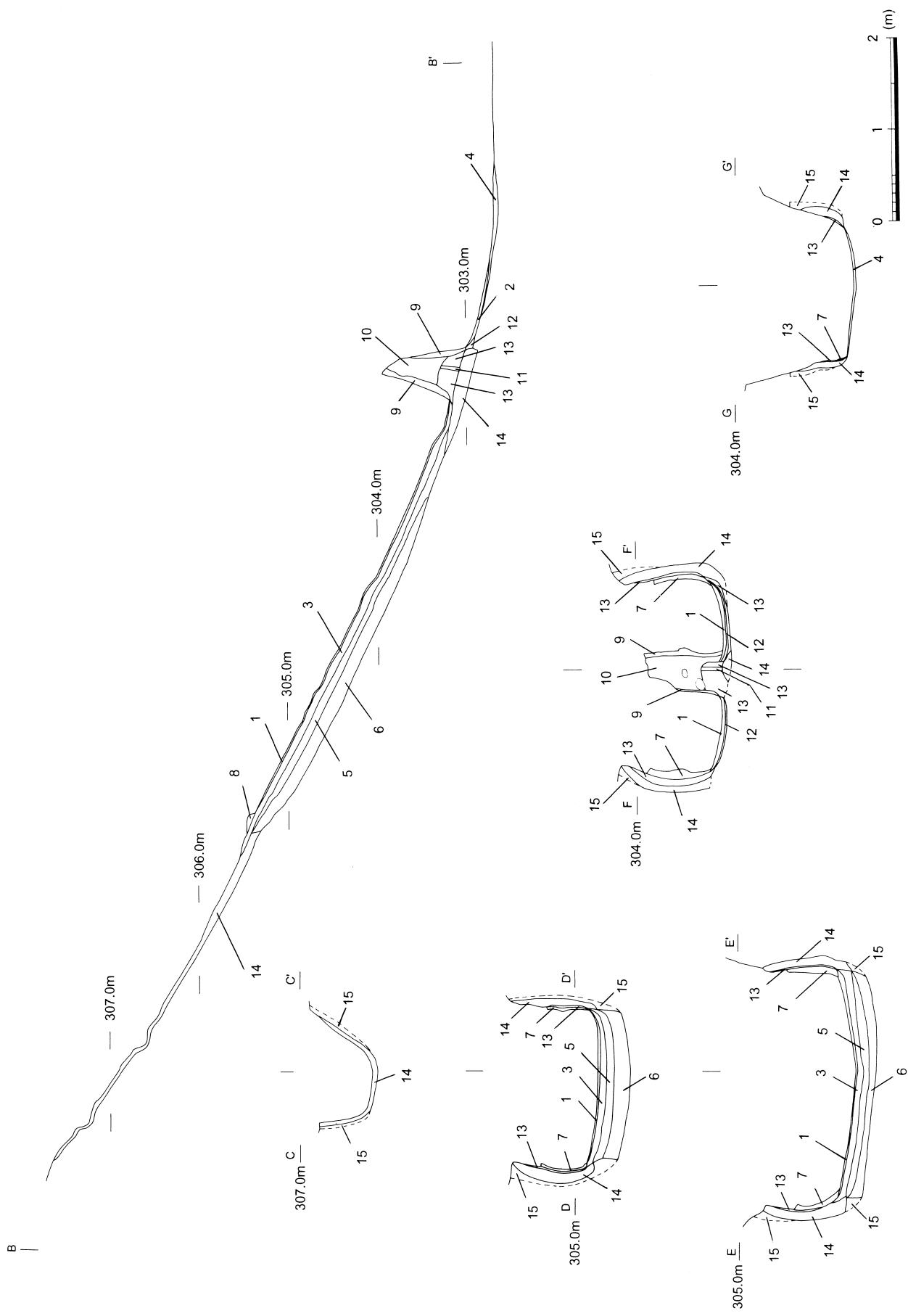
第8図 北小木大谷洞29号窯床面調整詳細図（拓本は縮尺1/2）



第9図 北小木大谷洞29号窯断ち割り断面図



第10図 北小木大谷洞30号窓窓体実測図



第11図 北小木大谷洞30号窯断ち割り断面図

1. 北小木大谷洞29号窯出土遺物（第13図）

29号窯からは、碗、皿、オロシ碗、窯道具として蓋、焼台などが出土している。主体をなすのはⅢ類である。

碗 類

碗Ⅲ類（1～8・12） 1～8：口径126～141mm、器高49～55mm、高台径45～52mm。高台径は45mm前後(6～8)と50mm前後(1～5)のものがあり、高台径に対する口径の比率（以下口台比とする）は2.5：1～2.9：1である。器高は55mm程度(8,2)と50mm程度(それ以外)に分かれる。29号窯出土遺物の主体をなす碗である。12：口径135mm、器高42mm、高台径43mm、口台比3.1：1。を測る。法量からⅢ類として分類したが、器形等はⅣ類に近い様相を呈している。Ⅲ類とⅣ類の中間的なタイプの碗である。

碗Ⅲ類（小型）（9・10） 9：口径122mm、器高49mm、高台径46mm、口台比2.8：1。10：口径122mm、器高51mm、高台径44mm、口台比2.7：1。1～8と比較して口径が122mmと小さいが、口径以外の高台径、器高等などは1～8と変わらない。

碗Ⅳ類（11） 11：口径126mm、器高51mm、高台径35mm、口台比3.4：1。高台径が35mmと突出した小径である。

碗Ⅰ類（24） 口径129mm、器高50mm、高台径51mm。口台比2.5：1。窯内最下層からの出土であるが、混入品である可能性が高い。

オロシ無高台碗（16・17） 底部内面から胴部内面にかけてオロシ目（ヘラ描き沈線）が施された碗である。16は放射状の荒くて太いオロシ目、17は斜格子状の細かくて細いオロシ目が施されている。外面全体に降灰がみられ、窯道具の蓋として焼成されたものと思われる。

皿 類

皿Ⅲ類（18～22） 口径81～84mm、器高11～14mm、底径45～48mm。底径に対する口径の比率（以下口底比とする）1.8：1。29号窯内出土皿の主体をなす。

皿Ⅰ類（23） 口径81mm、器高18mm、高底径42mm。口底比1.9：1。窯内Ⅳ層の出土であるが、碗（24）同様入品である可能性が高い。

窯道具

蓋Ⅲ類（13～15） 口径118～122mm、器高31～36mm、天井部径49～50mm、口径と天井部径の比率（以下口天比）は2.4～2.9：1を測る。

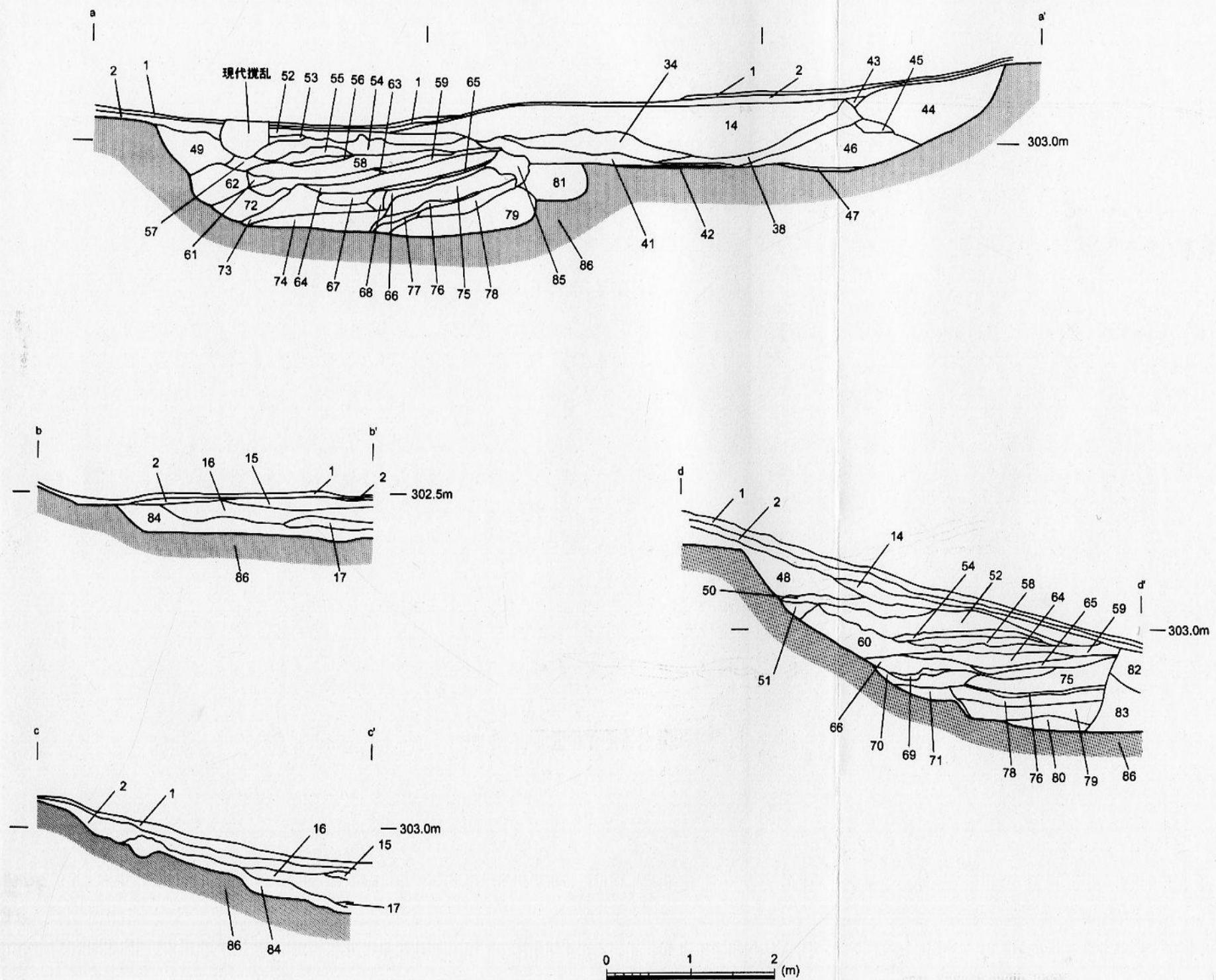
焼台（25） 焼成時、碗を窯内に設置するための台。窯内で碗が水平に設置できるよう底面が斜めになっている。上部には碗が押しつけられた痕跡が認められる。胎土は、砂礫を多く含み、非常に荒い。馬爪形の焼台である。

2. 北小木大谷洞30号窯出土遺物（第14・15図）

30号窯からは、碗、皿、オロシ碗、窯道具として蓋、焼台などが出土している。主体をなすのはⅡ類である。

碗 類

碗Ⅱ類（26～30） 口径132～145mm、器高54～59mm、高台径54～59mm。口台比2.4～2.5：1。30号窯内出土碗の主体をなす。



第12図 北小木大谷洞29・30号窯土坑・灰原断面図

表 2 北小木大谷洞29号窯 窯床・窯壁観察表

No.	色調	状況	区 分
①	青灰色	被熱硬化砂質土。一部は赤褐色。貼床。	燃焼室床
②	青灰色	被熱硬化粘土。スサは含まない。	分焰往基底部段
③	青灰色	被熱硬化粘土。床表面が完存し、焼台痕や床面調整痕が残る。貼床。	焼成室床
④	赤褐色	被熱硬化粘土。床表面がやや削られている。貼床。	焼成室床
⑤	赤褐色	被熱硬化粘土。床表面が大部分削られている。貼床。	焼成室床
⑥	黄色	被熱硬化土。	ダンパー
⑦	赤褐色	被熱地山。	煙道部床
⑧	明褐色	床面が剥落した地山露出部。	
⑨	青灰色	被熱硬化粘土。スサは含まない。調整痕は認められない。貼壁。	燃焼室～焼成室壁
⑩	黄褐色	被熱硬化地山。貼壁が剥落した地山露出部。	
⑪	赤褐色	被熱地山。10の断面。	
⑫	赤褐色	被熱硬化地山。10より強く熱を受ける。	煙道部と焼成室の境部の壁
⑬	赤褐色	被熱硬化地山。	煙道部壁
⑭	明褐色	壁面が剥落した地山露出部。	

表 3 北小木大谷洞30号窯 窯床・窯壁観察表

No.	色調	状況	区 分
①	青灰色	被熱硬化砂質土。炭を多量に含む。貼床。	燃焼室床
②	青灰色	被熱硬化砂質土。貼床。	燃焼室床
③	青灰色	被熱硬化砂質土。床表面が完存する。貼床。	焼成室床
④	青灰色	被熱硬化砂質土。床表面がやや削られ、赤褐色を呈する部分もある。貼床。	焼成室床
⑤	赤褐色	被熱硬化砂質土。床表面は大部分削られている。青灰色を呈する部分もある。貼床。	焼成室床
⑥	青灰色	融解しガラス状硬化。	ダンパー
⑦	黄褐色	被熱地山。	煙道部床
⑧	赤褐色	被熱地山。	燃焼室～焼成室壁
⑨	青灰色	被熱硬化粘土。スサは含まない。指撫でによる調整痕が認められる。貼壁。	
⑩	黄褐色	被熱硬化地山。貼壁が剥落した地山露出部、あるいは被熱硬化地山壁。	
⑪	赤褐色	被熱地山。10・12の断面、あるいは10・12の表面が削られた部分。	煙道部壁
⑫	赤褐色	被熱硬化地山。	
⑬	明褐色	壁面が剥落した地山露出部。	

表4 北小木大谷洞29号窯 断ち割り土層観察表

No.	層名	状況	区分
1	赤褐色被熱硬化粘土層	青灰色を呈する箇所もみられる。	焼成室床
2	青灰色～黒色被熱硬化砂質土層	1ほどではないが被熱硬化。礫を含む。	燃焼室床
3	黄褐色被熱硬化砂質土層	しまり弱い。被熱。礫を多く含む。山茶碗破片を含む。	焼成室床
4	礫混じり赤褐色土層	しまり弱い。4より礫を多く含む。山茶碗破片・炭・白色粘土を含む。	床下充填土
5	礫混じり褐色土層	しまり弱い。4より礫を多く含む。山茶碗破片・炭・白色粘土を含む。	床下充填土
6	青灰色被熱硬化粘土層	スサは含まない。	貼壁
7	黄褐色被熱硬化粘土層	被熱硬化するがややしまりが弱い。	ダンパー
8	青灰色被熱硬化粘土層	スサは含まない。	分焰柱
9	礫混じり黄褐色被熱土層		被熱地山
10	礫混じり赤褐色被熱土層		被熱地山
11	礫混じり明褐色土層		地山

表5 北小木大谷洞30号窯 断ち割り土層観察表

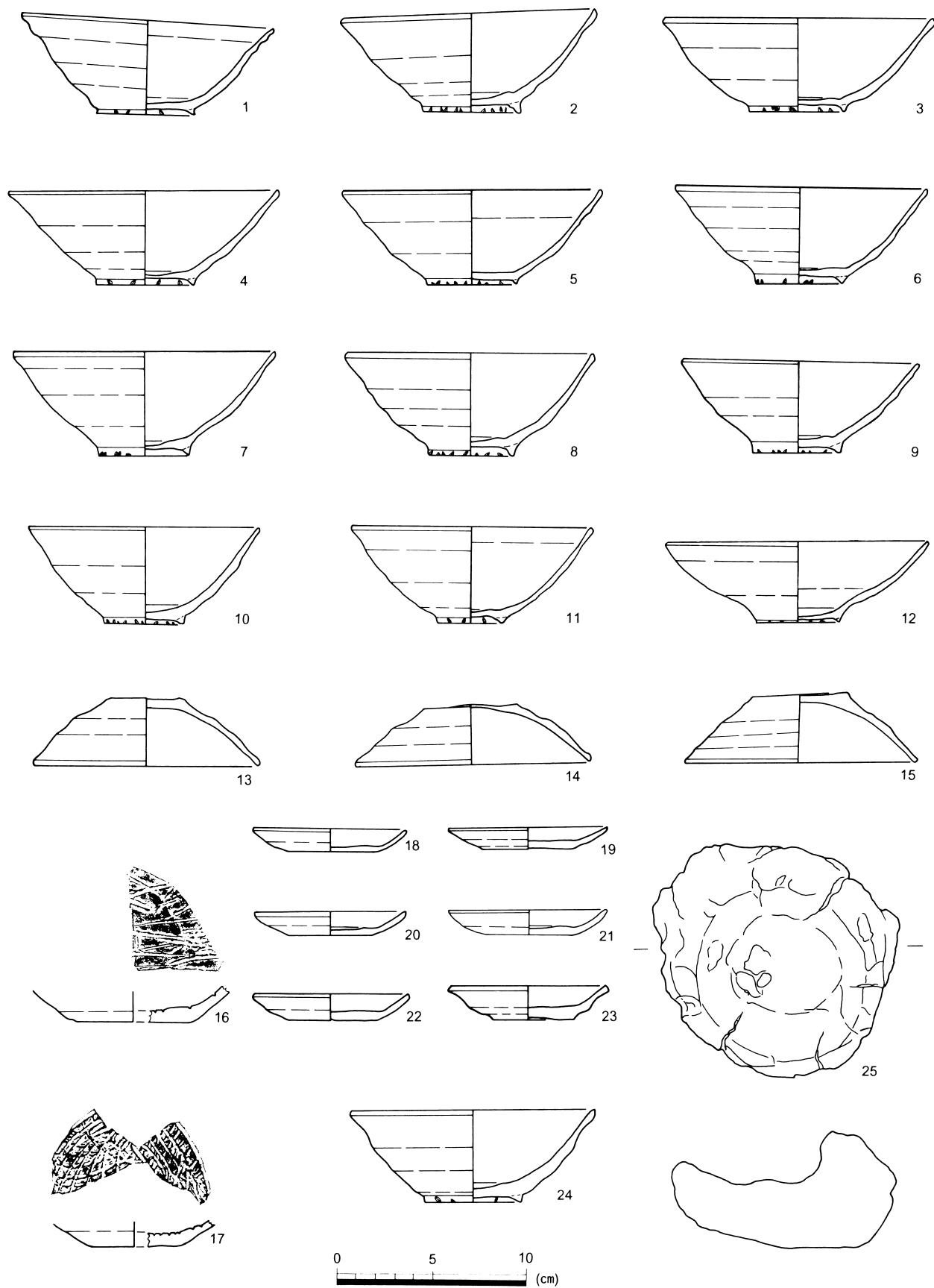
No.	層名	状況	区分
1	赤褐色被熱硬化砂質土層	青灰色を呈する箇所もみられる。	焼成室床
2	青灰色被熱砂質土層	1に比べてしまり弱い。遺物を含む。	燃焼室床
3	黄褐色被熱硬化砂質土層	1ほどではないが被熱硬化。礫を含む。	焼成室床
4	炭混じり青灰色被熱砂質土層	ややしまり強い。	燃焼室床
5	礫混じり赤褐色被熱土層	しまり弱い。礫を多く含む。	床下充填土
6	礫混じり褐色土層	しまり弱い。礫を多く含む。5と同質だがほとんど被熱していない。	床下充填土
7	青灰色被熱硬化粘土層	スサは含まない。	貼壁
8	黄褐色被熱硬化土層	被熱硬化するがややしまりが弱い。	ダンパー
9	青灰色被熱硬化粘土層	スサを含む。内側は赤褐色。	分焰柱
10	焼台・礫混じり黄褐色土層	極めてしまり弱い。山茶碗破片を含む。スサを含む。	分焰柱
11	空洞		芯材痕跡
12	礫混じり青灰色被熱土層		被熱地山
13	礫混じり黄褐色被熱土層		被熱地山
14	礫混じり赤褐色被熱土層		被熱地山
15	礫混じり明褐色土層		地山

表 6 北小木大谷洞29・30号窯跡 窯内埋土・灰原土層観察表

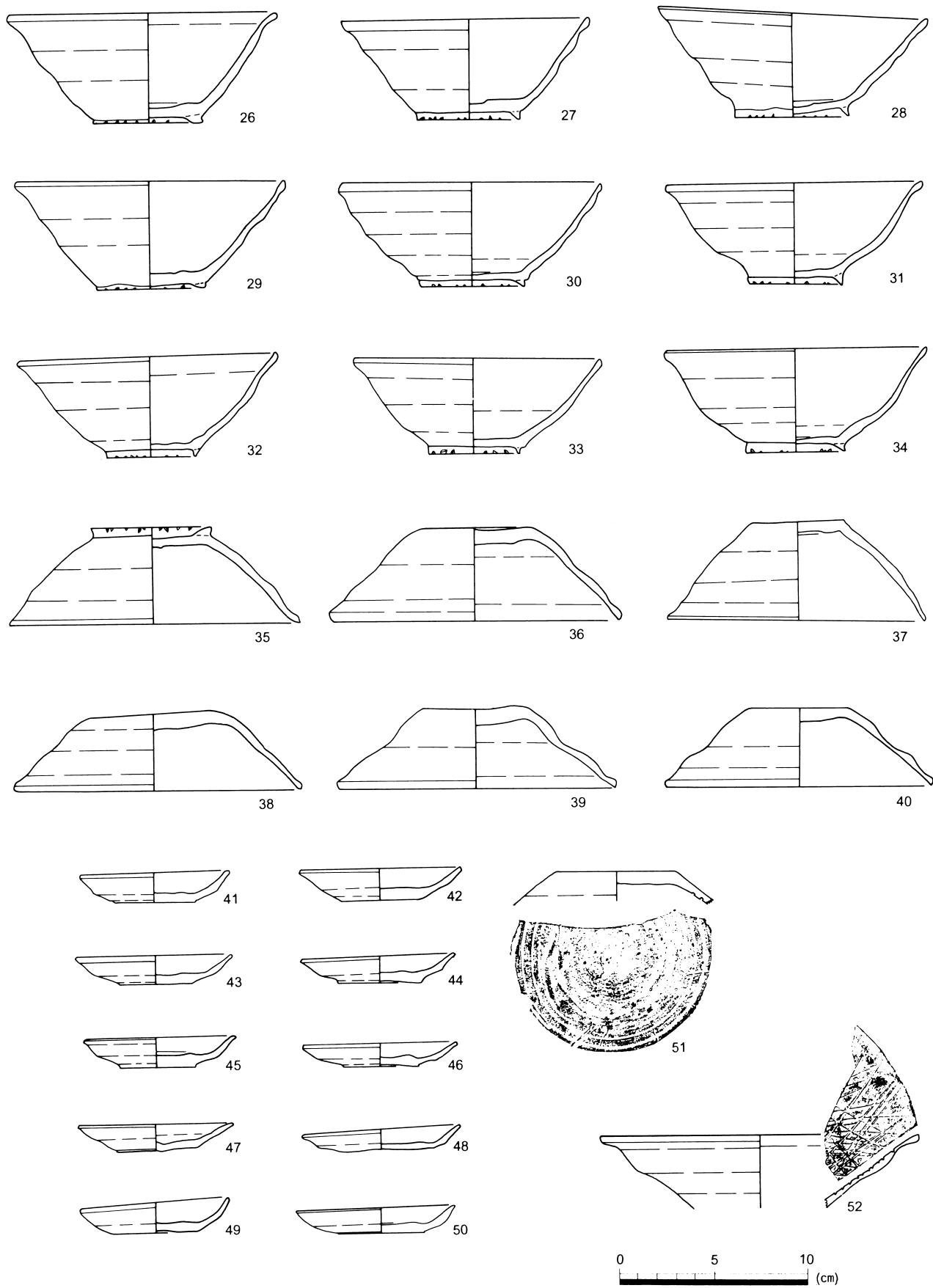
No.	層名	状況	区分
1	礫混じり黒褐色土層	山茶碗破片・焼台破片・窯壁破片を含む。調査区全域に広がる。腐植土層	表土層
2	礫混じり褐色土層	山茶碗破片・焼台破片・窯壁破片を含む。調査区のほぼ全域に広がる。	流入土層
3	褐色砂質土層	山茶碗破片を少量含む。	29号窯内埋土層
4	礫・赤褐色土混じり褐色土層	窯天井破片を含む。遺物は含まない。	"
5	褐色砂質土層	山茶碗破片を少量含む。	"
6	礫・赤褐色土混じり褐色土層	窯天井破片を含む。遺物は含まない。	"
7	崩落天井破片		"
8	礫・赤褐色土混じり褐色土層	窯天井破片を含む。遺物は含まない。	"
9	礫・赤褐色土混じり褐色土層	窯天井破片を含む。遺物は含まない。	"
10	赤褐色土粒・青灰色土粒混じり褐色土層	細片化した窯壁破片・天井破片の堆積層。山茶碗・焼台、およびそれらの破片を多量に含む。	"
11	崩落天井破片堆積層	礫を含む。天井破片は青灰色面を下に向いている。	"
12	炭・青灰色土粒混じり赤褐色土層	細片化した窯壁破片・天井破片の堆積層。山茶碗・焼台およびそれらの破片を多量に含む。	"
13	炭堆積層		"
14	礫混じり赤褐色土層	やや被熱。山茶碗破片を含む。	29号窯灰層
15	赤褐色土混じり褐色土層	山茶碗破片・窯壁破片を含む。	"
16	礫混じり赤褐色被熱土層	山茶碗破片・窯壁破片を含む。	"
17	炭混じり褐色土層		"
18	礫混じり褐色土層	山茶碗破片を少量含む。炭・赤褐色土粒を少量含む。	30号窯内埋土層
19	礫混じり赤褐色土層	やや被熱。山茶碗破片を少量化する。14層に似る。	"
20	礫混じり褐色土層	山茶碗破片を含む。炭・赤褐色土粒を少量化する。18層より混入物の量が多い。	"
21	明褐色土層	混入物ほとんどなし。	"
22	礫混じり赤褐色被熱土層	崩落天井の上半部。	"
23	礫混じり明褐色土層	遺物をほとんど含まない。	"
24	礫混じり褐色土層	遺物をほとんど含まない。	"
25	褐色土層	礫・赤褐色土粒・炭を少量含む。遺物を含まない。	"
26	崩落天井破片	青灰色面を下に向いている。焼成室の分筋柱付近の天井が崩落したもの。	"
27	青灰色天井破片堆積層	赤褐色被熱土も少量含む。	"
28	礫混じり赤褐色被熱土層	崩落した煙道部窯壁の細片化堆積層。	"
29	赤褐色土粒混じり褐色土層	礫を少量含む。山茶碗破片・焼台破片を含む。	"
30	崩落天井破片堆積層	青灰色の天井破片と赤褐色被熱土塊の堆積層。27より先に崩落した天井破片の堆積層。	"
31	赤褐色被熱土粒堆積層	細片化した窯壁破片・天井破片の堆積層。山茶碗・焼台、およびそれらの破片を多量に含む。	"
32	赤褐色土粒混じり褐色砂質土層	礫を少量含む。山茶碗破片・焼台破片を含む。	"
33	礫混じり赤褐色被熱土層	崩落した天井・窯壁の赤褐色部分の細片化堆積層。22に似る。	"
34	礫・炭混じり褐色土層	山茶碗破片を多量に含む。赤褐色土粒を少量含む。しまり弱い。	"

No.	層 名	況	状	況	区 分
35	赤褐色土粒・礫・炭混じり褐色土層	赤褐色土の混入多い。山茶碗破片を少量含む。しまり弱い。	礫と炭を極めて少量含む。遺物をほとんど含まない。	30号窯内埋土層	"
36	赤褐色土粒混じり褐色土層	"	"	"	"
37	礫・赤褐色土粒・炭混じり褐色土層	山茶碗破片を含む。	"	"	"
39	礫混じり赤褐色被熱土塊堆積層	天井破片の堆積層。山茶碗破片を含む。青灰色窯壁破片を含む。	"	"	"
40	崩落天井破片堆積層	青灰色の天井破片と赤褐色被熱土塊の堆積層。焼台と山茶碗、およびそれらの破片を多量に含む。	"	"	"
41	炭・赤褐色土粒混じり黒褐色土層	山茶碗破片を多量に含む。	"	"	"
42	炭堆積層	30号窯最終操業時灰層。	"	"	"
43	褐色粘質土層	しまり強い。	30号窯東隣遺物堆積	"	"
44	山茶碗堆積層	土はほとんど入らない。焼台破片も少量しか含まない。	"	"	"
45	黒色灰層	"	"	"	"
46	炭混じり赤褐色被熱土層	強く被熱。山茶碗を極めて多量に含む。窯壁破片を含む。礫を少量含む。	"	"	"
47	炭堆積層	"	"	"	"
48	褐色砂質土	山茶碗破片・焼台破片を含む。少量の礫・炭を含む。	S K 2 埋土層	"	"
49	礫混じり明褐色土層	遺物を含まない。地山土と同質だがしまり弱い。	"	"	"
50	礫・赤褐色土粒混じり褐色土層	山茶碗破片・焼台破片を多量に含む。炭を少量含む。	"	"	"
51	礫混じり褐色砂質土層	赤褐色土粒・炭を少量含む。	"	"	"
52	礫・炭・赤褐色土混じり褐色土層	山茶碗破片・焼台破片・窯壁破片を多量に含む。	"	"	"
53	炭混じり黒褐色灰層	山茶碗破片・焼台破片を含む。	"	"	"
54	赤褐色土粒・炭混じり褐色土層	山茶碗破片・焼台破片・窯壁破片を多量に含む。	"	"	"
55	赤褐色土粒混じり明褐色土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。	"	"	"
56	炭堆積層	"	"	"	"
57	黒褐色土・礫混じり明褐色土層	遺物を含まない。しまり弱い。	"	"	"
58	赤褐色被熱土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。	"	"	"
59	炭混じり褐色土層	炭の量多い。遺物を含まない。	"	"	"
60	礫・炭混じり黄灰色土層	山茶碗破片・焼台破片を多量に含む。	"	"	"
61	赤褐色土混じり明褐色土層	"	"	"	"
62	礫混じり明褐色土層	遺物を含まない。しまり弱い。49より礫を多く含む。	"	"	"
63	黃白色粘質土層	炭・礫・赤褐色土を少量含む。	"	"	"
64	礫混じり赤褐色被熱土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。炭を少量含む。	"	"	"
65	炭堆積層	"	"	"	"
66	礫混じり灰白色粘質土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。炭を少量含む。	"	"	"
67	赤褐色土混じり灰白色土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。炭・礫を少量含む。68より礫の混入が少ない。	"	"	"
68	礫・赤褐色土混じり灰白色土層	山茶碗破片・焼台破片を含む。炭を少量含む。	"	"	"
69	炭堆積層	"	"	"	"
70	礫混じり灰白色土層	山茶碗破片・焼台破片を多量に含む。炭を少量含む。	"	"	"

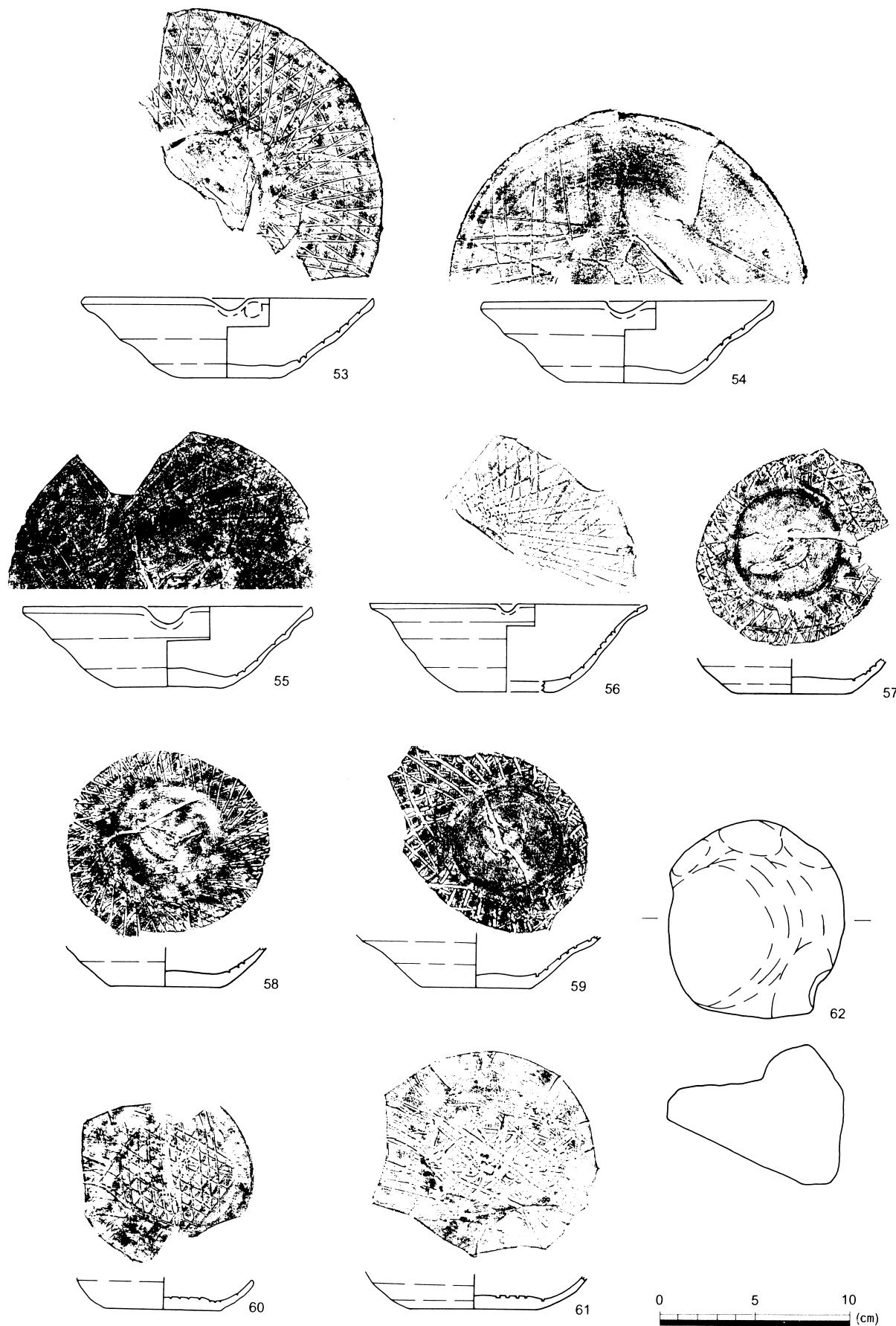
No.	層名	状況	区分
71	礫混じり明褐色土層	地山と同質だが山茶碗破片を含む。	SK 2 墓土層
72	礫混じり褐色土	遺物を含まない。しまり弱い。	"
73	礫混じり黄白色粘質土層	山茶碗破片・焼台破片・少量の炭を含む。	"
74	灰白色粘質土層	66より礫・遺物の混入が少ない。	"
75	窯壁破片・焼台堆積層	赤褐色土・炭・山茶碗破片・礫を含む。	SK 3 墓土層
76	炭堆積層		"
77	黃白色粘質土層	73に似るが、礫の混入がより少ない。	"
78	赤褐色被熱土層		"
79	灰色土混じり窯壁破片・焼台堆積層	赤褐色土・炭・山茶碗破片・礫を含む。	"
80	礫混じり明褐色土層	地山と同質だが山茶碗破片を含む。	"
81	炭混じり山茶碗・焼台堆積層		SK 1 墓土層
82	礫混じり明褐色土層	遺物を含まない。地山と同質だが、しまり弱い。	30号窯掘抜排土層
83	礫混じり褐色土層	遺物を含まない。地山と同質だが、しまり弱い。	"
84	礫混じり褐色土層	炭と遺物を極めて少量含む。地山と同質だが、しまり弱い。	"
85	礫混じり明褐色土層	地山と同質。SK 1 と SK 3 の間の壁。	地山
86	礫混じり明褐色土層	遺物を含まない。当調査区全域で地山みなされる層。土岐砂礫層	"



第13図 北小木大谷洞29号窯内出土遺物



第14図 北小木大谷洞30号窯内出土遺物（1）



第15図 北小木大谷洞30号窯内出土遺物（2）

碗Ⅲ類 (31~34) 口径132~139mm、器高52~56mm、高台径48~52mm。口台比2.7~2.8:1。碗Ⅲ類は30号窯の上部流入土からの出土であるため、30号窯で焼成されたものではなく、29号窯で焼成されたものである可能性が高い。

オロシ片口無高台碗 (53~56) 口径146~153mm、器高42~47mm、底径44~62mm。口天比2.5~3.5:1。胴部内面に斜格子状の細いオロシ目が施された碗である。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。型式的には蓋Ⅱ類に属する。

オロシ碗 (52) 胴部内面に斜格子状の細いオロシ目が施された碗である。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。型式的には蓋Ⅱ類に属する。

オロシ無高台碗 (57~61) 底径57~61mm。57~59は胴部内面に斜格子状のオロシ目が施されている。57・58は細いオロシ目、59は太いオロシ目が施されている。60・61は底部内面から胴部内面にかけて斜格子状のオロシ目が施されている。60は細く規則的な斜格子が、61は太くランダムな斜格子が刻まれる。57~61はいずれも外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。

皿類

皿Ⅱ類 (41~50) 口径79~85mm、器高11~17mm、底径39~45mm。口底比1.8~2.1:1。30号窯出土の皿はいずれもⅡ類に属する。

窯道具

蓋Ⅱ類 (36・38~40) 口径141~153mm、器高41~50mm、天井部径53~66mm、口天比2.3~2.7:1を測る。30号窯出土蓋の主体をなす。

蓋(碗Ⅲ類転用) (35) 口径138mm、器高52mm、天井部径50mm、口天比2.8:1。外面全体に降灰を受けている。内面に粉殻痕が認められないため、蓋として分類した。碗を蓋として転用したものと思われる。碗としてはⅢ類に属する。

蓋(無高台碗Ⅲ類転用) (37) 口径156mm、器高52mm、天井部径65mm、口天比2.4:1。外面全体に降灰している。粉殻痕は内・外面とも認められない。高台は付けられていない。碗Ⅲ類に属する。無高台碗を蓋に転用したものと思われる。

蓋(類型不明) (51) 天井部径64mm。底部のみ残存しているため類型は不明。内面に鋸歯形の鋸の端部の軌跡と思われる沈線が輪状に巡る。

焼台 (62) 馬爪形の焼台である。胎土は、砂礫を多く含み、非常に荒い。上部には碗が押しつけられた痕跡が認められる。

3. SK1出土遺物 (第16図)

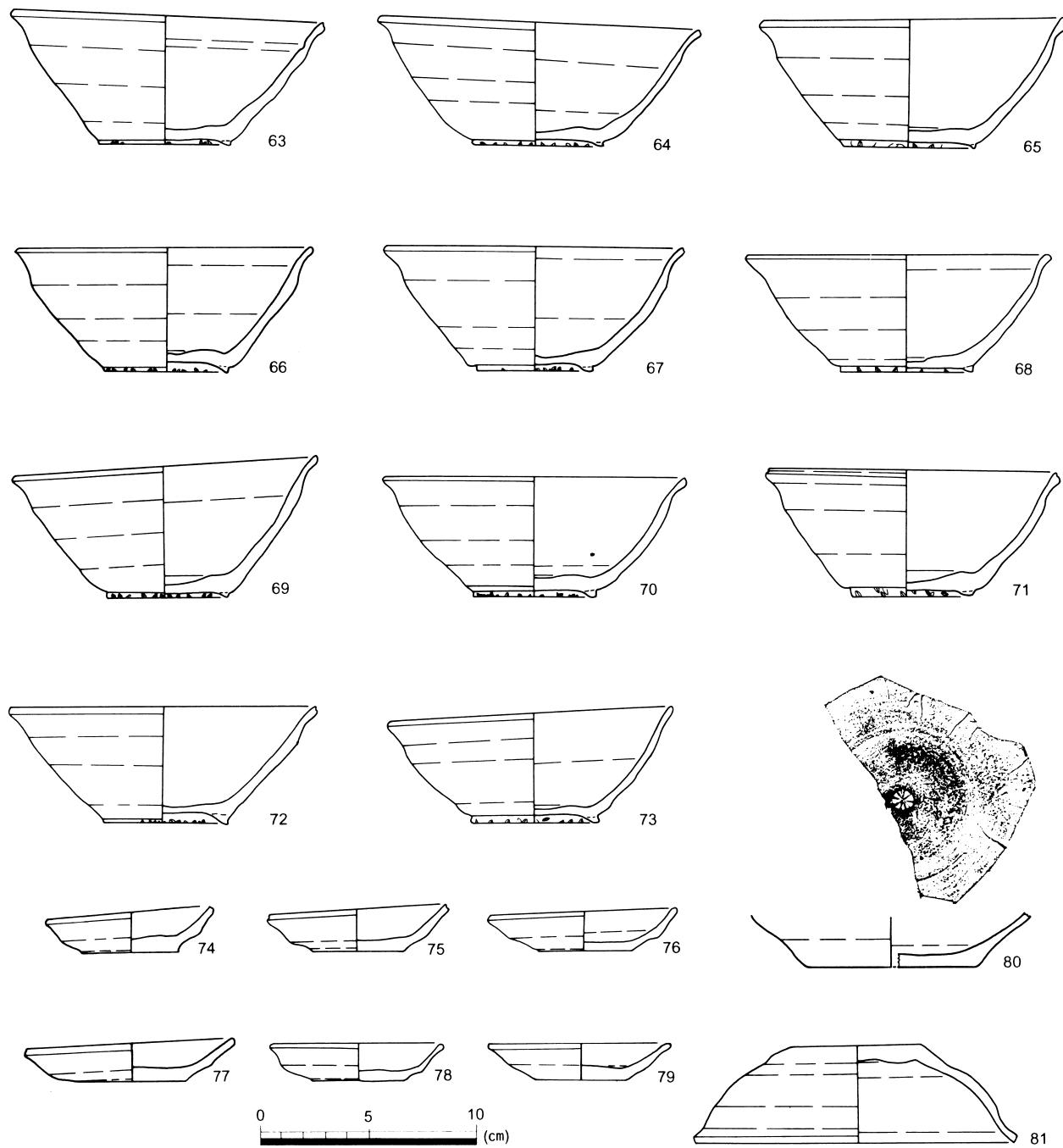
SK1からは、碗、皿、印花碗、窯道具として蓋などが出土している。すべての遺物がⅠ類に属する。

碗類

碗Ⅰ類 (63~72) 口径132~147mm、器高52~61mm、高台径54~60mm。口台比2.3~2.6:1。

碗Ⅰ類(小型) (73) 73:口径132mm、器高50mm、高台径60mm。口台比2.2:1。

印花碗 (80) 高台径79mm。底部内面中央に、径11mmの楔形9個を円形に配した「日足文」を施している。



第16図 SK 1 (KO) 出土遺物

皿類

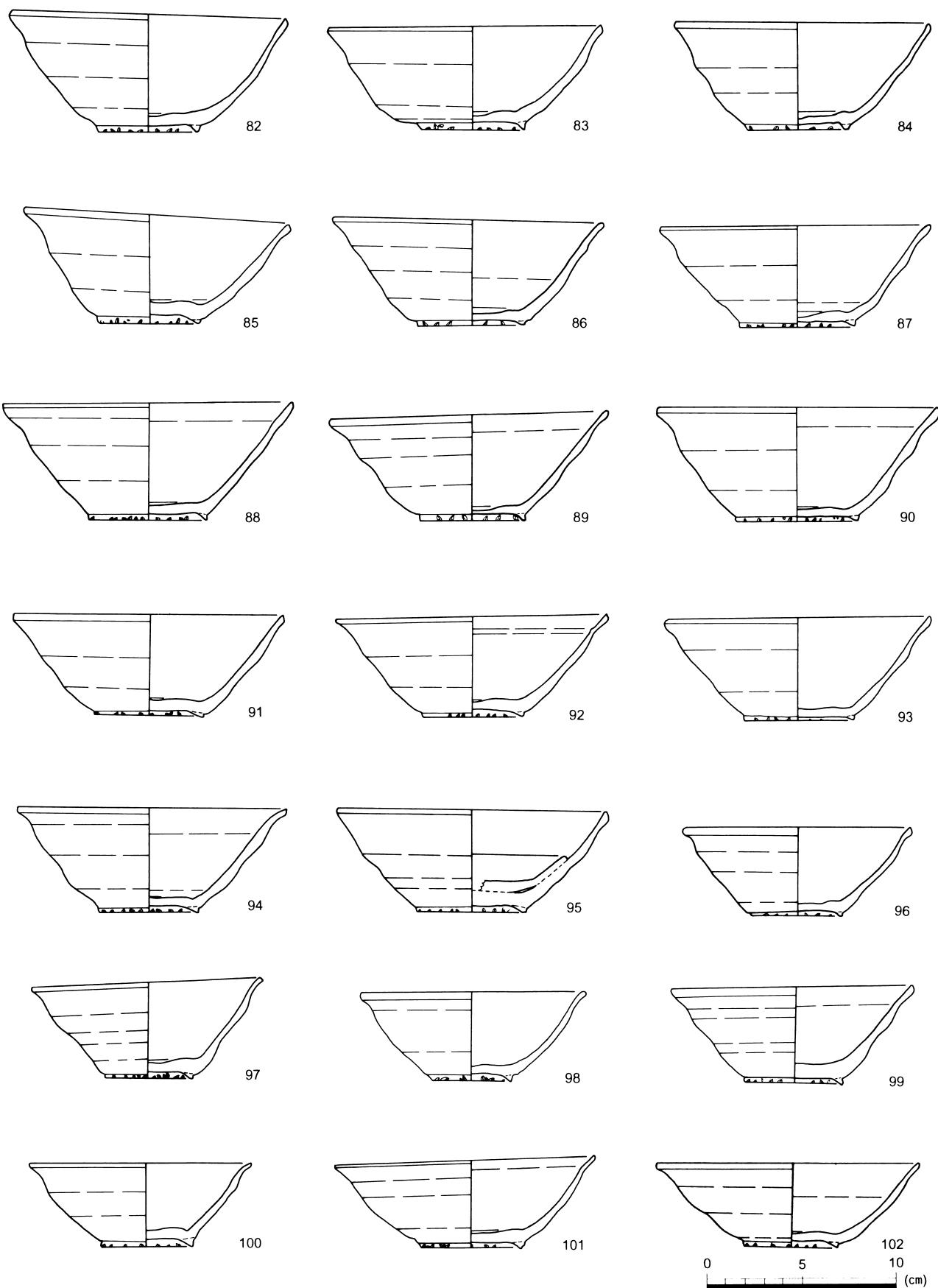
皿 I 類 (74~79) 口径76~94mm、器高17~22mm、底径42~49mm。口底比1.8~2.0 : 1。

窯道具

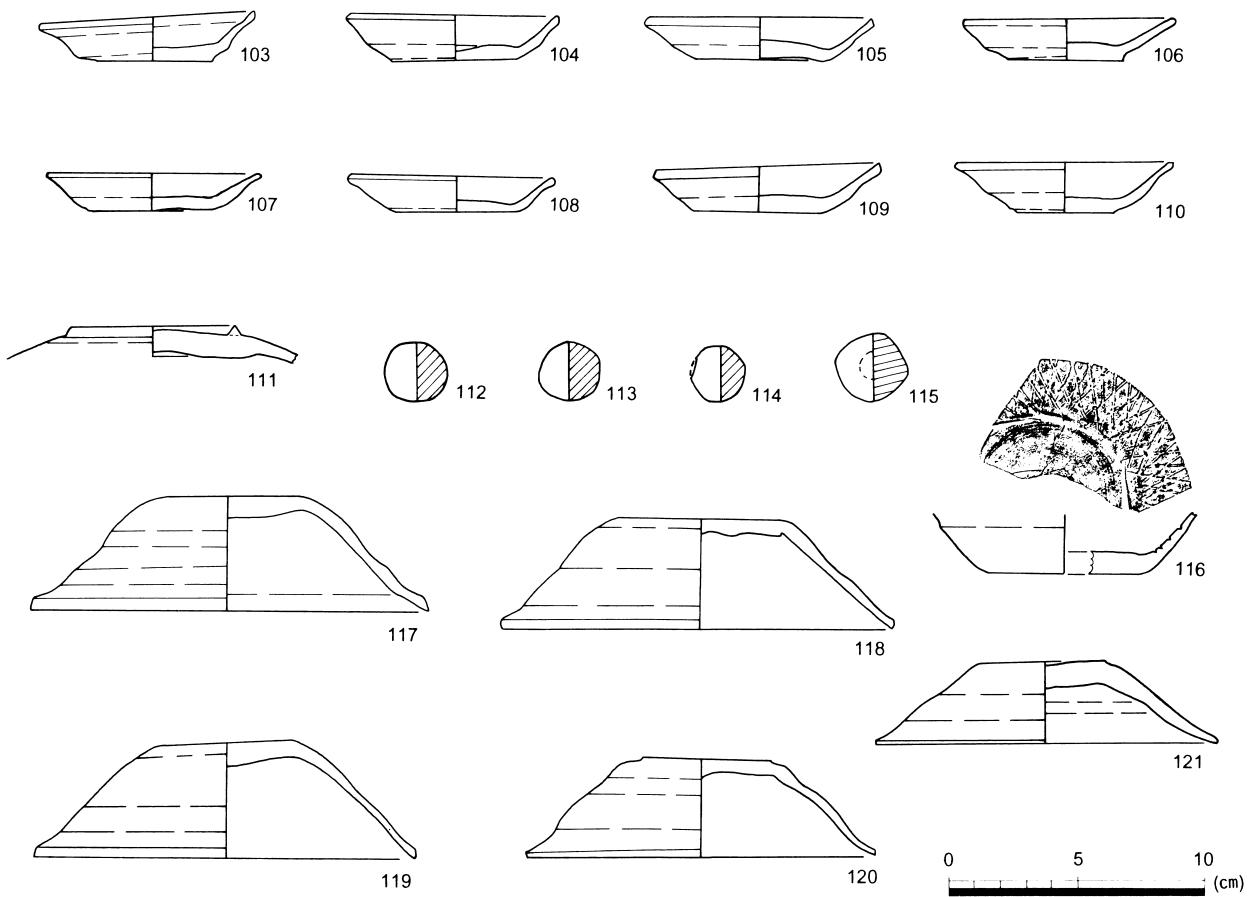
蓋 I 類 (81) 口径147mm、器高45mm、天井部径58mm、口天比2.5 : 1。外面全体に降灰している。

4. SK 2 出土遺物 (第17・18図)

SK 2からは、碗、皿、オロシ碗、陶丸、蓋、窯道具として蓋、焼台などが出土している。II類が主体となるが、I・III類の遺物も含まれる。



第17図 SK2 (KO) 出土遺物 (1)



第18図 SK 2 (KO) 出土遺物 (2)

碗 類

碗Ⅱ類 (83~95) 口径135~155mm、器高53~62mm、高台径52~63mm。口台比2.3~2.7:1。SK 2出土遺物の主体をなす。なお、95は内部に皿が釉着しており、重ね焼きの最上段で内部に皿を重ねて包含し、焼成していたことがわかる。上層と下層の出土比率はほぼ半々である。

碗Ⅱ類 (小型) (96~100) 口径119~128mm、器高46~52mm、高台径42~52mm。口台比2.4~2.8:1を測る。Ⅱ類の小型品である。上層と下層の出土比率はほぼ半々である。

碗Ⅲ類 (101・102) 101:口径138mm、器高47mm、高台径53mm。口台比2.6:1。102:口径139mm、器高47mm、高台径50mm。口台比2.8:1。101は上層、102は下層の出土である。

碗Ⅰ類 (82) 口径147mm、器高63mm、高台径54mm。口台比2.7:1。下層から出土している。

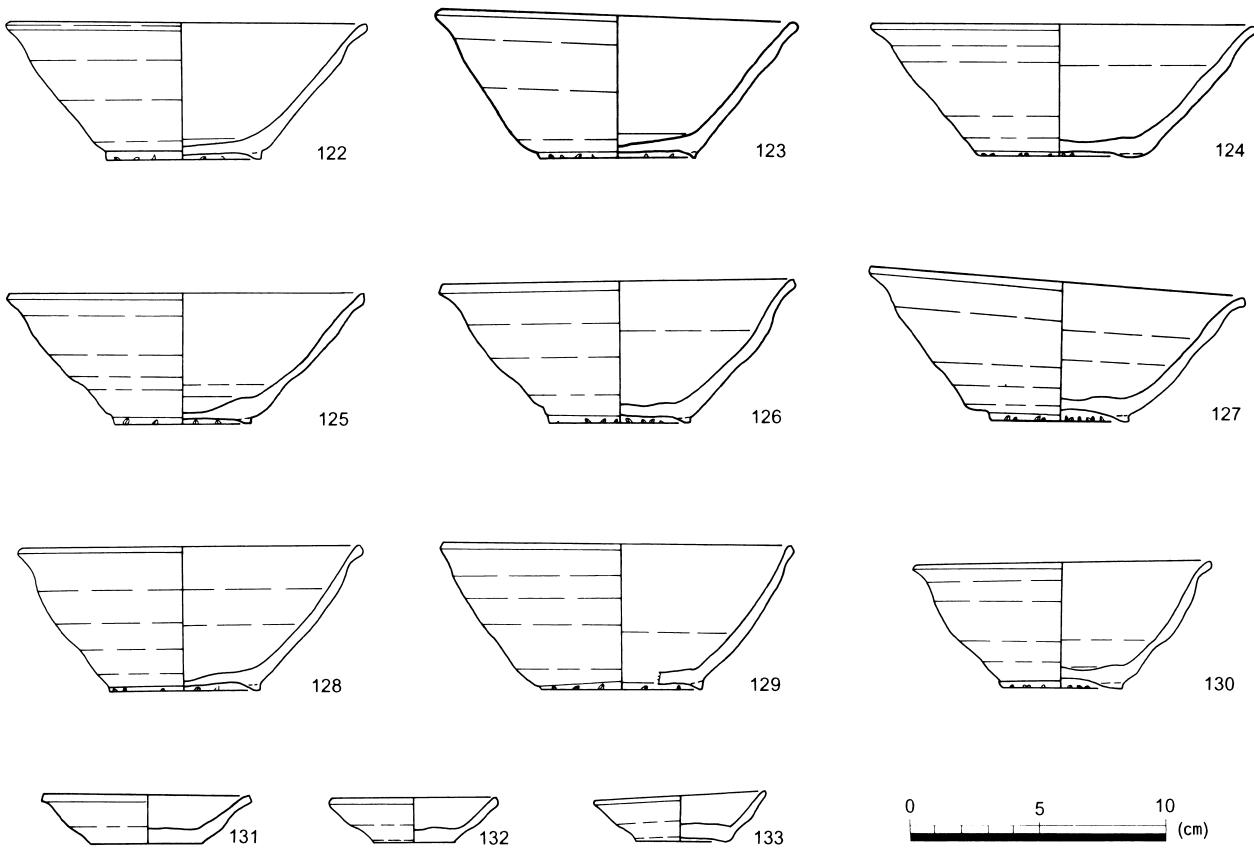
オロシ碗 (116) 底径62mm。胴部内面に斜格子状の細いオロシ目が施された碗である。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。下層からの出土である。

皿 類

皿Ⅱ類 (103~106) 口径81~86mm、器高16~19mm、底径44~50mm。口底比1.6~1.9:1。いずれも上層からの出土である。

皿Ⅲ類 (107・108) 107:口径83mm、器高15mm、底径48mm。口底比1.7:1。108:口径80mm、器高14mm、高台径48mm。口台比1.7:1。いずれも上層からの出土である。

皿Ⅰ類 (109・110) 109:口径87mm、器高18mm、底径52mm。口底比1.7:1。110:口径83mm、器高20mm、高台径37mm。口台比2.2:1。109は上層、110は下層の出土である。



第19図 SK 3 (KO) 出土遺物

その他の器種

蓋 (111) 上部高台状のつまみは径65mm。外面全体に降灰している。大型の製品にともなう蓋と思われるが、組み合わせとなる器種は特定できない。

陶丸 (112～115) 径23～28mm。球形を呈する。指痕が残っている。

窯道具

蓋 II 類 (117～119) 口径151～156mm、器高43～55mm、天井部径54～65mm、口天比は2.4～2.8 : 1を測る。いずれも上層からの出土である。

蓋 I 類 (120・121) 120：口径136mm、器高38mm、天井部径50mm、口天比2.7 : 1。121：口径134mm、器高31mm、天井部径50mm、口天比2.7 : 1。120は下層、121は上層からの出土である。

5. SK 3 出土遺物 (第19図)

SK 3からは、碗、皿が出土している。SK 3では皿の小型品も出土している。すべての遺物がI類に属する。

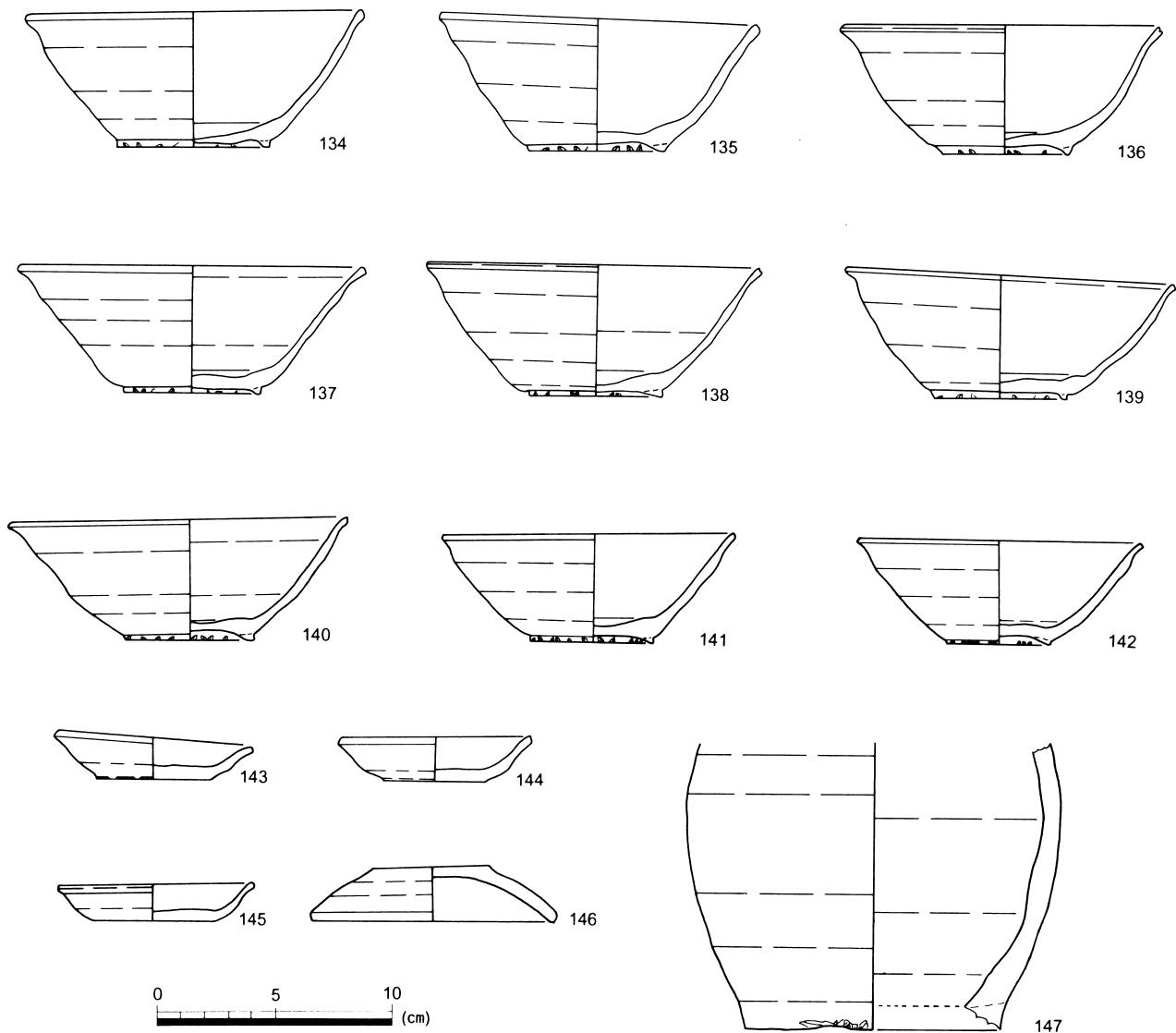
碗類

碗 I 類 (122～129) 口径134～148mm、器高52～57mm、高台径52～62mm。口台比2.2～2.7 : 1。

碗 I 類 (小型) (130) 口径113mm、器高49mm、高台径47mm。口台比2.4 : 1。I類の小型碗である。

皿類

皿 I 類 (131) 口径83mm、器高19mm、底径44mm。口底比1.9 : 1。



第20図 G5 南端 (KO) 出土遺物

皿 I類（小型）（132・133） 132：口径63mm、器高18mm、底径31mm。口底比2.0:1。108：口径65mm、器高18mm、高台径35mm。口台比1.7:1。

6. 30号窯東隣遺物堆積（G5 南端）出土遺物

30号窯東隣遺物堆積（G5 南端）からは、碗、皿、瓶、窯道具として蓋が出土している。これらはI～II類に属する。なお、遺構名は「G5 南端」と表記している。

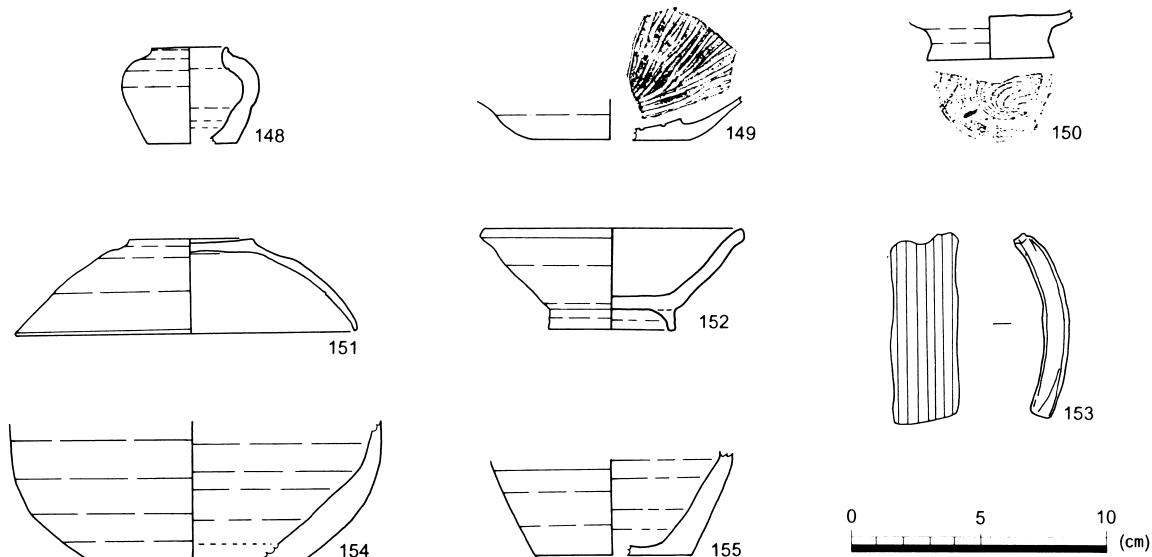
碗類

碗 II類（134～140） 口径134～147mm、器高51～57mm、高台径53～61mm。口台比2.3～2.6:1。

碗 II類（小型）（141・142） 141：口径126mm、器高45mm、高台径52mm。口台比2.4:1。142：口径120mm、器高43mm、高台径43mm。口台比2.8:1。

皿類

皿 I類（143・144） 143：口径83mm、器高18mm、底径48mm。口底比1.7:1。144：口径80mm、器高



第21図 遺構外（K.O）出土遺物

19mm、高台径44mm。口台比1.8 : 1。

皿Ⅱ類 (145) 口径83mm、器高15mm、底径51mm。口底比1.6 : 1。

その他の器種

瓶子 (147) 底径115mm。瓶子の下半部と思われる。胴部下端には粉殻痕が残る。

窯道具

蓋（類型不明） (146) 口径103mm、器高23mm、天井部径49mm、口天比2.1 : 1。外面全体に降灰を受けている。小型の蓋である。器壁の厚さが厚いことから、I類に並行する時期に位置づけられると推定されるが、蓋I類とは異なる形態を呈している。小型であることから、小型碗にかぶせられた蓋であるかもしれない。

7. 北小木大谷洞29・30号窯遺構外出土遺物

29・30号窯の出土品中、ここでは遺構外の出土品のうち特殊な器形の遺物を中心にとりあげる。

碗類

オロシ碗 (149) 底径62mm。底部から胴部内面に放射状の太いオロシ目が施された碗である。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。E 4グリッドより出土している。

皿類

台付皿 (150) 高台径50mm。外見的には高台に見える中実の台をともなう皿である。台部および胴部は一気に挽き上げられている。台基部は外反し、糸切り痕が残る。

その他の器種

小壺 (148) 口径28mm、器高18mm、底径48mm。小型の小壺である。胴部下半にはナデ調整が施されている。

壺 (152) 口径100mm、器高40mm、高台径50mm。高台部に粉殻痕をともなわない、精製の壺である。

無高台鉢 (154) 底径86mm。鉢状の器形を呈している。

把手 (153) 残存長70mm、幅26mm、厚さ11mm。湾曲しており、外面には並行沈線が施されている。瓶類につけられた把手と思われる。

窯道具

蓋Ⅲ類 口径133mm、器高32mm、天井部径50mm、口天比2.7:1。外面全体に降灰を受けている。

(澤村雄一郎)

第3節 小 結

1. 遺構

灰原・土坑内埋土・窯内埋土について、推定されるおおむねの堆積順を逆に遡って、統一した土層番号を付している。現代の攪乱層は除外して古い方からいえば、30号窯掘り抜き排土層→SK1埋土層→SK3埋土層→SK2埋土層・30号窯東隣遺物堆積層→30号窯内埋土層→29号窯灰層→29号窯内埋土層→後世の流入土層→表土層、以上の順で堆積したと推定される。灰層の堆積順から判断して、29号窯と30号窯とでは30号窯の方が操業時期が古いことは明らかである。また、SK1～3はいずれも30号窯の操業に伴って掘られた廃棄土坑であって、その順は、古い方から、SK1→SK3→SK2であることが確認できる。なお、30号窯跡焚口の東隣においても山茶碗が多量に堆積しており、今回は完掘はできなかったものの、それらと同様に30号窯の操業に伴って掘られた廃棄土坑と考えられる。29号窯の操業に伴う灰層は、30号窯跡の南半部からSK1とSK3にかけての部分を覆うように堆積するものと、29号窯焚口の南方約10m、調査区の南端に認められるものの2群が認められた。しかし、30号窯の操業に伴うものに比べれば、この2群の灰層からの出土遺物は少量である。

(小淵忠司)

2. 遺物

白瓷系陶器の類型については、第8章で詳述するが、本報告中の類型を美濃窯における山茶碗編年にあてはめると、I類=白土原1号窯期、II類=明和1号窯期、III類=大畠大洞4号窯期(古)、IV類=大畠大洞4号窯期(新)に比定することができる。

遺物の型式から、各遺構の年代的な位置づけを考えると、29号窯(最終操業期)=大畠大洞4号窯期(新)、30号窯(最終操業期)=明和1号窯期、SK1=白土原1号窯期、SK2=白土原1号窯期～大畠大洞4号窯期(古)、SK3=白土原1号窯期、30号窯東隣遺物堆積(G5南端)=白土原1号窯期～明和1号窯期に比定される。

のことから、窯の前後関係は30号窯が29号窯に先行すると考えられる。また、土坑はSK1・SK3が先行し、SK2が遅れるといえる。また30号窯東隣遺物堆積は、SK1・3と同時期から30号窯の最終操業期までの年代が与えられる。これは、遺構埋土の検討による前後関係(SK1→SK3→SK2)と矛盾しない。

遺構の検討から、SK1～3は30号窯にともなう廃棄土坑と考えられる。ここで、SK1および3からは、30号窯の最終操業期(明和1号窯期)に先行する白土原1号窯期の遺物が確認されている。このことから30号窯の操業開始期は、少なくとも白土原1号窯期までさかのぼると考えられる。

(澤村雄一郎)

第4章 大沢13号窯

第1節 遺構

本窯の調査範囲は、窯体および灰原の全域にわたった。発掘調査によって、窯体、前庭部、山茶碗が廃棄された土坑2基（SK3・4）、遺物のほとんど出土しない土坑2基（SK1・2）、窯体および土坑の掘抜排土、遺物の大量に廃棄された灰原、作業場の可能性もある焼土および白色粘土ピットなどが確認された。攪乱等はほとんどみられず、残存状態は良好であった。

大沢13号窯

立地・基本層序

本窯は、南東に開く谷（頂部標高306.6m）の最奥部、南東向きの斜面上に立地する。斜面の傾斜角度は約22°を測る。窯体は標高301.4～305.6mに位置し、丘陵頂部付近に構築されている。

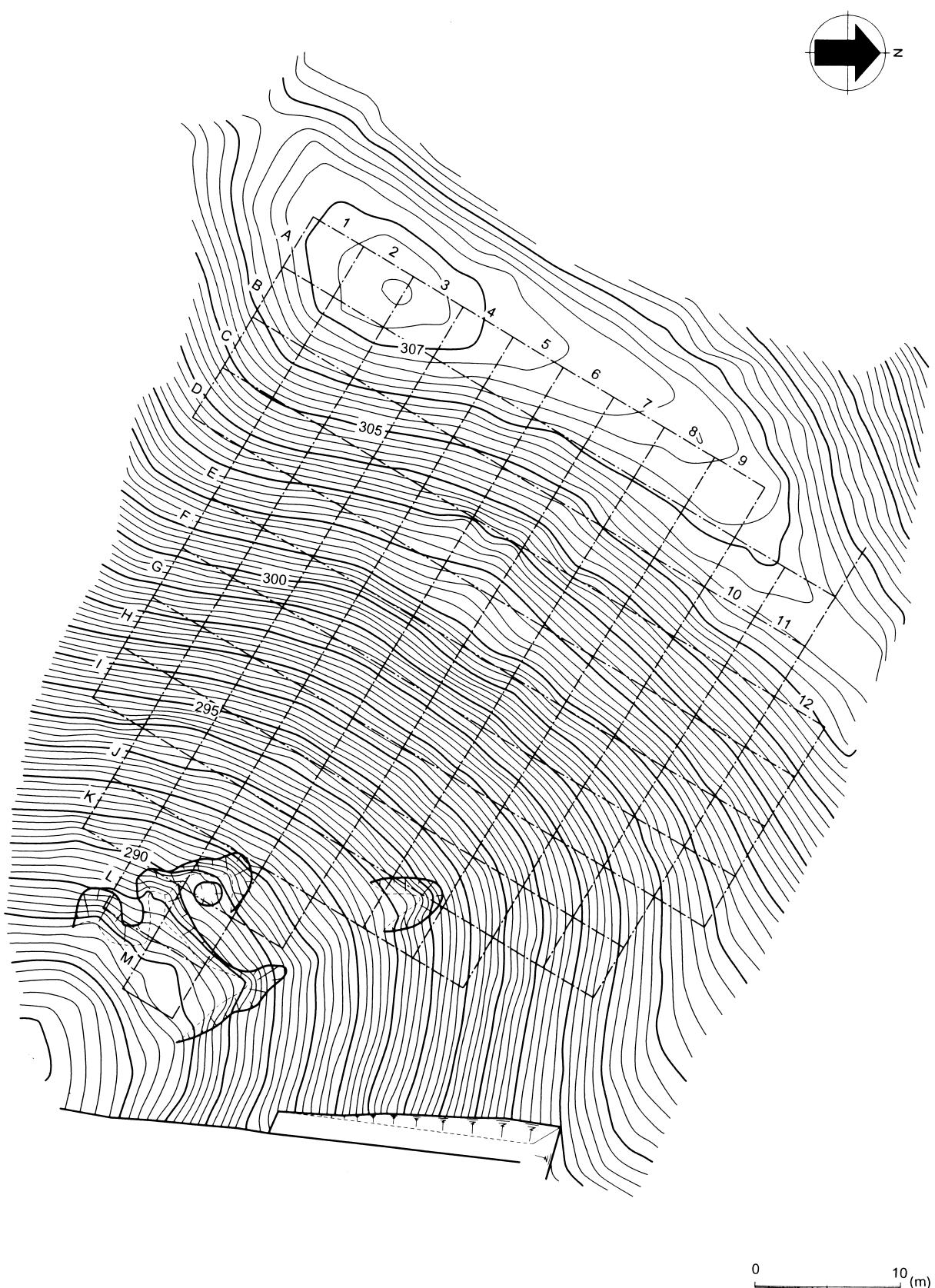
本窯における基本層序は、落ち葉などからなる腐葉土を表土とする。その下に地山と土質がよく似ているものの、礫があまり含まれていない明褐色土が堆積する。この明褐色土は丘陵頂部よりの流出土と考えられる。この層位の堆積は窯の前庭部より上部に限られる。この下に礫混じりの茶褐色土（地山）が堆積する。なお、前庭部より下部では茶褐色土層の堆積は認められず、灰原においては腐葉土のすぐ下に灰層が堆積している。これらの下層に礫を多く含む明褐色土が地山として堆積している。そして灰原の下半部では地山は完全な礫層（土岐砂礫層）となっている。

窯体

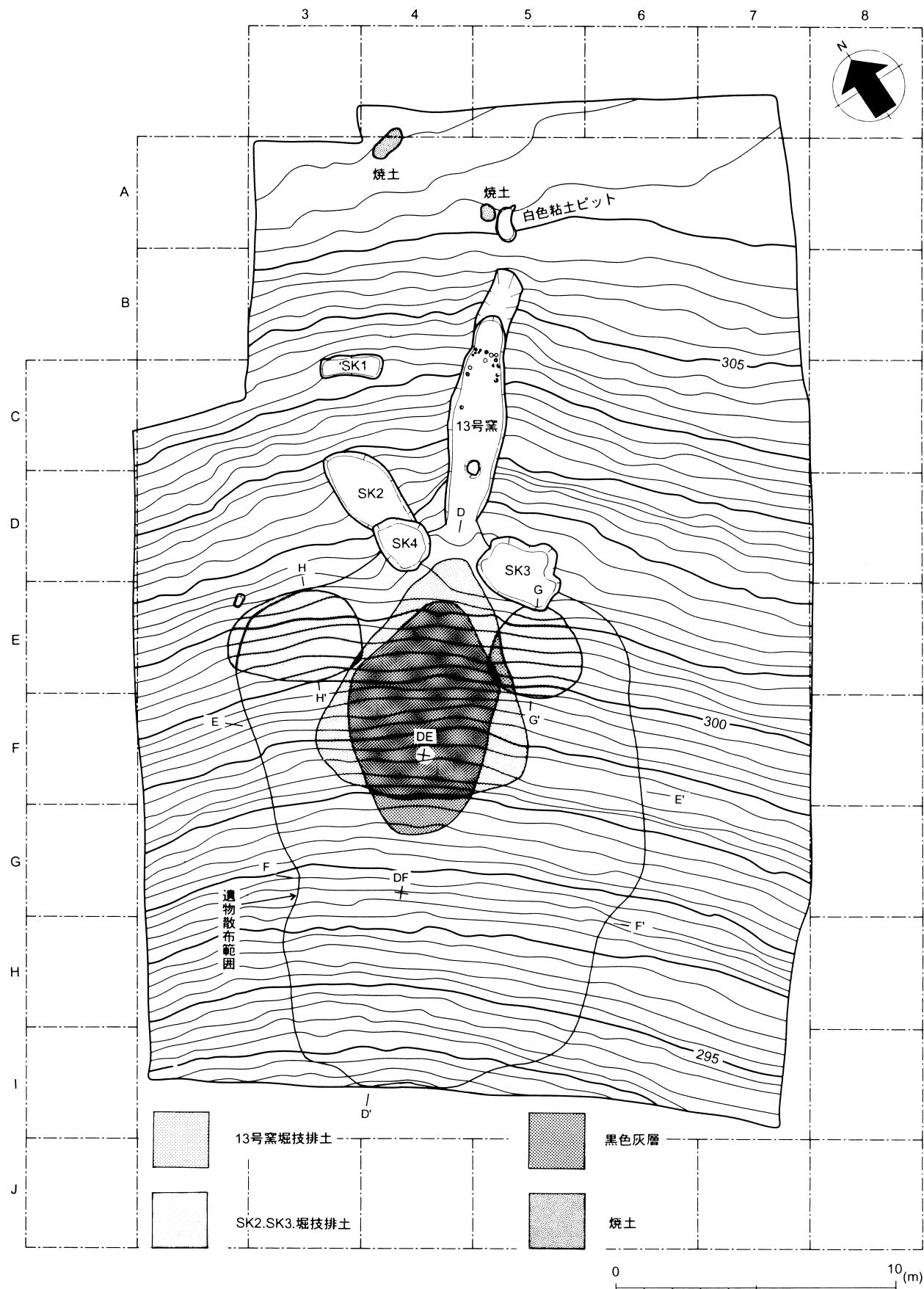
規模 窯体の規模は、全長9.10m、床面最大幅2.02mを測る。焼成室における床面の傾斜角は22°である。主軸の方位はN-42°-Wである。

窯体埋土の層序 窯体埋土の状況は、窯体を横断する3本のセクションにより確認することができる（第24図）。燃焼室においては、天井が2回にわたって崩落したと考えられる。まず左側の天井部（4）が崩落し、右側の天井部はアーチが残存した状態で左側外部より茶褐色土（3）が流入、その後右側の天井部（2）も崩落しその上部に外部からの流入土（茶褐色土）（1）が堆積している。焼成室および煙道部においては、天井部（2）が一度に崩落し、その上部に流入土（1）が堆積している。

焚口・燃焼室 燃焼室は、黒色炭の堆積範囲より焚口から分焰柱の手前までとした。長さは1.64m、幅は焚口で1.08m、分焰柱手前で1.3mである。床面はほぼ平坦であるが、分焰柱の手前30cm付近から上方へ約22°の傾斜角で上昇し、そのままの傾斜角で焼成室へと続く。床面の平面プランは、焚口から分焰柱までほぼ直線的であるが、分焰柱付近から焼成室へと緩やかに開く。床面は、焼成室、煙道部と一体で、窯体全面を覆う形で、約3cm程度の厚さで貼られていた。床面の被熱範囲は、焚口部分までが確認された。床面が改修された痕跡はとくに確認されなかった。また、焼成室の床面全面に薄く黒色の炭が堆積していた。この黒色炭の堆積範囲は前庭部にまでわたっている。天井部はすべて崩落しているが壁面は残存している。壁面の残存高は約0.7mである。燃焼室右壁には貼り付けられた窯壁が残存している。特に分焰柱付近では還元焰焼成により、壁面は青灰色を呈している。これに対し左



第22図 大沢13号窯調査前地形図 (S=1:400)

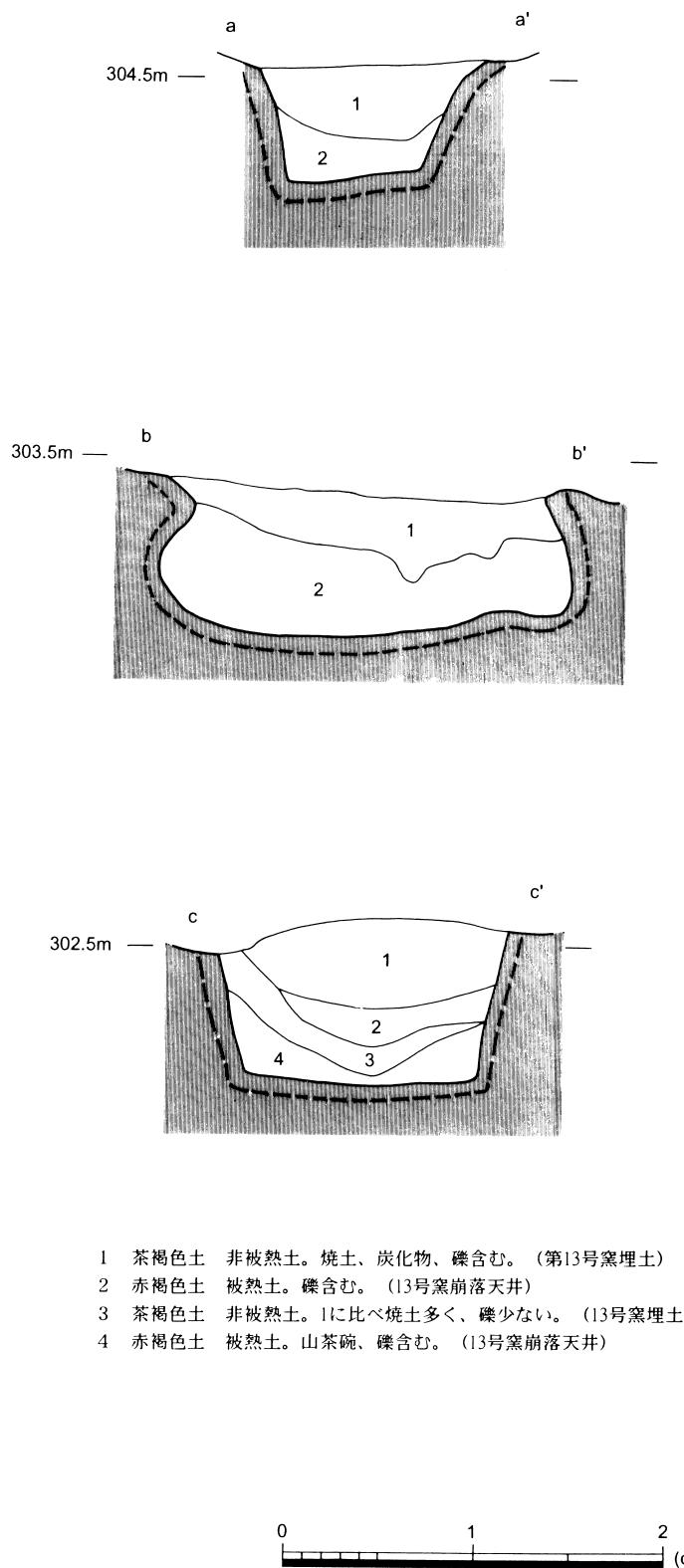


第23図 大沢13号窯全体図 (S=1:200)

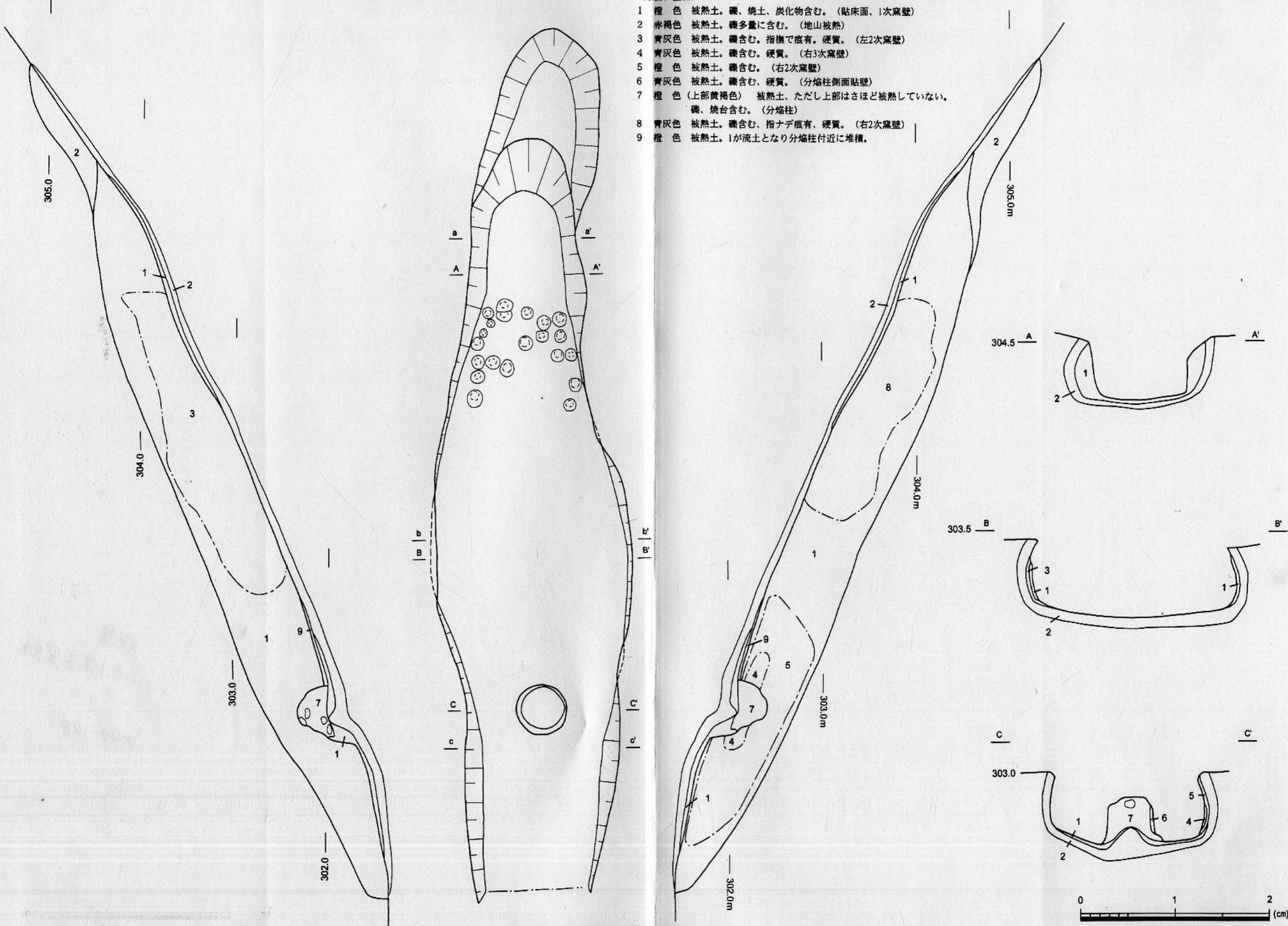
壁の窯壁は剥落し、地山被熱土が露頭している。

分焰柱 分焰柱は、焚口から1.9mの地点、床面のほぼ中央部に造られている。左右の分焰孔の床面幅はほぼ等しい。基底部の径約50cm、残存高約50cmである。形状はほぼ正円形を呈する。窯体の床面プランはこの分焰柱の焼成室側付近をくびれ部として開きはじめる。分焰柱は、基底部は非常によく焼き締まっているが、上部の焼台が練り込まれている部分は基底部と比較してさほど熱を受けておらず、中心部はほとんど被熱していないといつてもよい程である。このことから分焰柱の上部は改修により、造り直された可能性がある。分焰柱側面には粘土が貼り付けられており、この部分は被熱により青灰色を呈する。

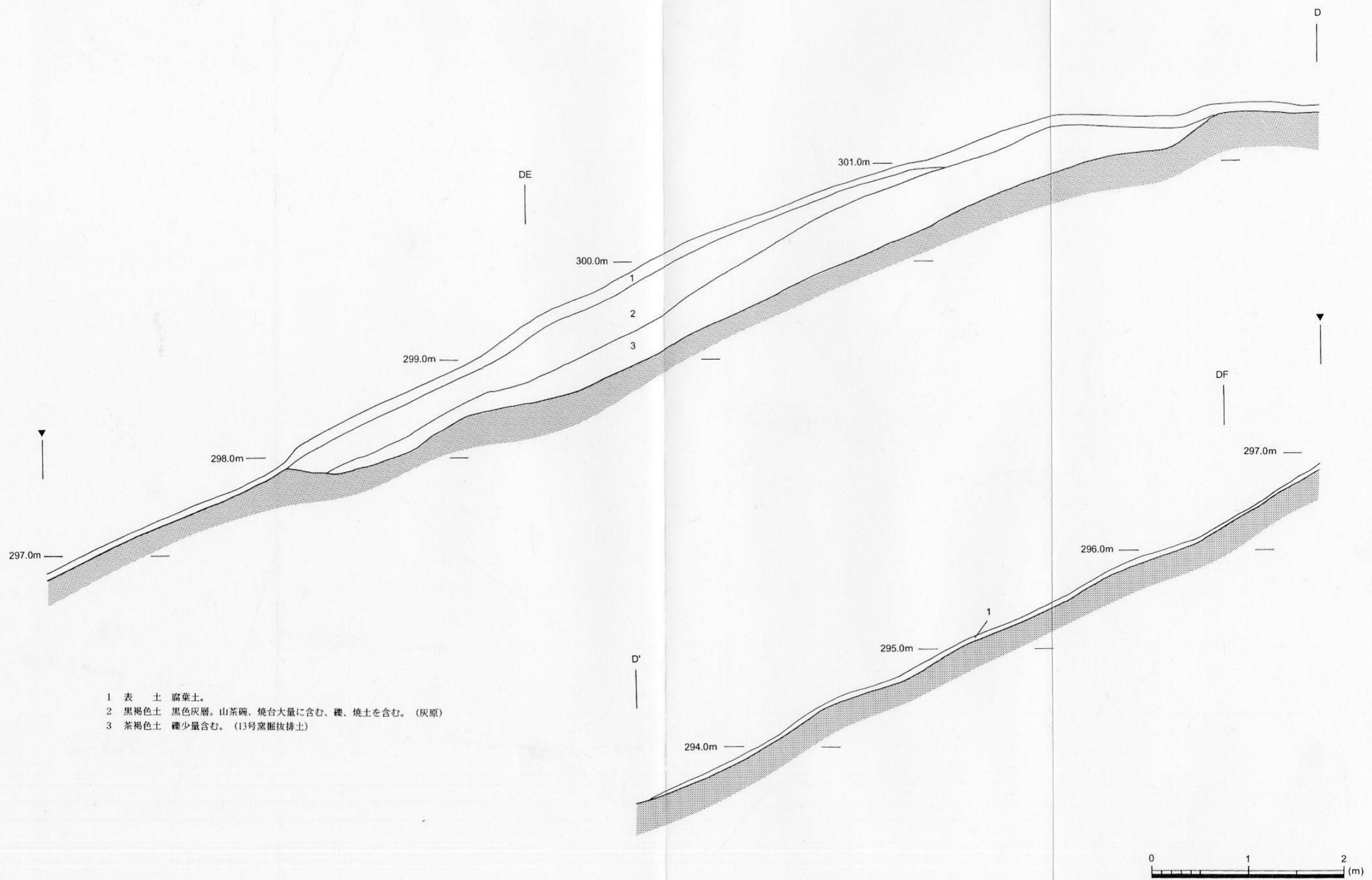
焼成室 焼成室は、分焰柱の後方から煙道部との境まで長さ約3.95m、分焰柱後方の幅1.55mを測る。分焰柱の後方約1.35mで最大幅2.10m、煙道部との境で幅0.83mを測る。床面の傾斜角は、分焰柱後方から約2.85mの地点までは燃焼室同様22°である。しかしこのポイントから煙道部との境までは傾斜が急になり傾斜角31°が測られた。床面の平面プランは、分焰柱前方部をくびれ部として、そこから徐々に開いていき、分焰柱の後方約1.35mで最大幅をとり、このポイントから煙道部との境まで緩やかに狭まっていく。床面は、窯内の傾斜角が変化するポイントから煙道部との境の範囲で厚さ約4cmの貼床が確認できるが、焼成室の下部では確認できなかつた。しかし、流出した床面と思われる被熱土が分焰柱付近に堆積していることから、当初は全面的に床面が貼られていたと考えられる。なお、床面の改修は認められなかつた。焼成



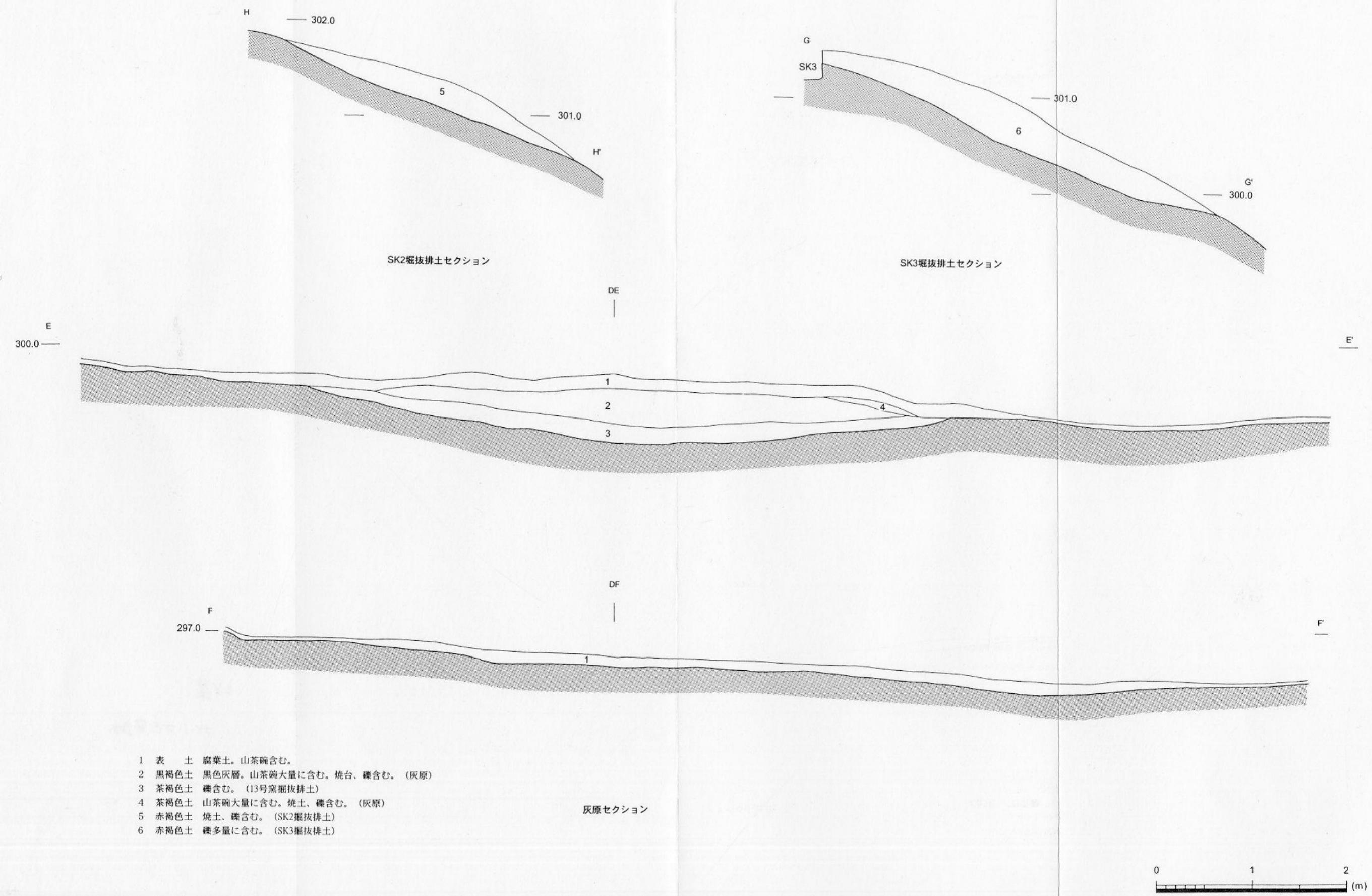
第24図 大沢13号窯埋土セクション



第25図 大沢13号窯窯体実測図



第26図 大沢13号窯灰原・掘抜排土セクション（1）



第27図 大沢13号窯灰原・掘抜土セクション(2)

室においても、天井部は崩落しているが壁面は残存している。壁面の残存高は約0.8mである。壁面は両壁ともそれぞれ2面が確認できた。1次窯壁の上に貼られた2次窯壁は青灰色を呈し非常によく焼き締まっている。なお、スサの混入は認められない。また、2次窯壁には粘土を貼り付けた際の指ナデ痕が明瞭に残存している。壁面のオーバーハングはさほど顕著ではない。焼成室内より、山茶碗および焼台が出土しているが、原位置を保っているものはなかった。

煙道部 煙道部は長さ1.2m、焼成室との境で幅0.85mを測る。床面の傾斜角は焼成室と比較して緩やかになり、焼成室との境から1.0mの地点までは約18°である。煙道部の床面は、このポイントを下端として上端へと上昇する。平面プランは焼成室との境からややすぼまり、砲弾形を呈する。床面は、焼成室から引き続き厚さ約4cmの貼床が確認できた。壁面は床面と一体で貼られているが、煙道部では特に厚く貼られている。壁面の残存高は約50cmである。床面および壁面は被熱により赤化している。崩落天井の残存状況から、天井部は煙道部の下端付近まで架けられていたと考えられる。煙道部の上部は、おそらく煙り出しと考えられ、やや掘り窪められている。煙り出し部分の地山面は被熱により赤化している。

前庭部・掘抜排土

前庭部は全長3.5m、最大幅3.5mを測る。窯体正面の地山を掘削する事により、焚口より1.5mの地点までは平坦面が削り出され、さらに手前は窯体の掘抜排土により盛土されている。形状は扇形に造り出されているが、前庭部の左右にSK2およびSK4の掘抜排土が堆積しているため、左右が前方にせり出し、焚口の正面部分が奥まった形状となっている。前庭部中央部には、燃焼室から続いて灰原まで薄く黒色炭が堆積している。また、前庭部・焚口の両側3基、焼成室左側に1基の土坑がつくられている。

13号窯の掘抜排土は、前庭部の一部をなす形で、焚口の手前1.5mの地点から南側に確認された。規模は9.8×6.5m、層厚は最大約60cmを測る。

灰原

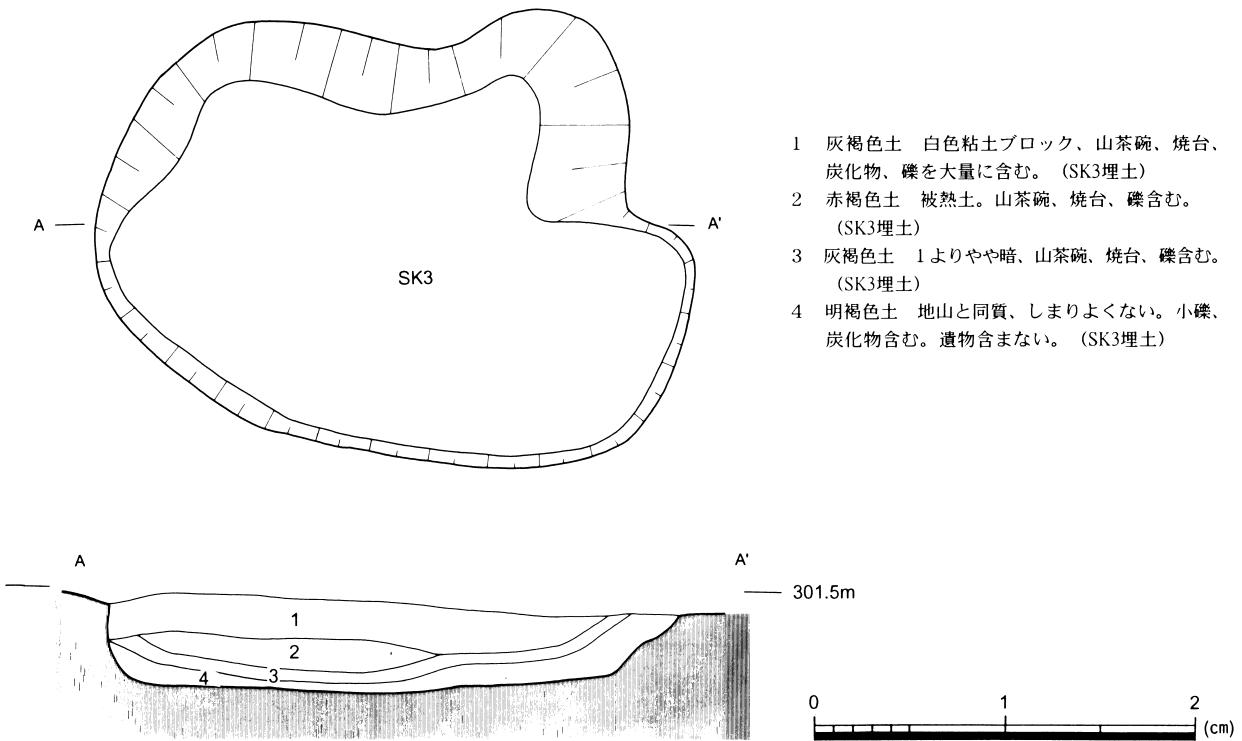
本窯においては、灰原は黒色灰層および黒色灰層上部に堆積する茶褐色土とする。表土（腐葉土）中に山茶碗が含まれる範囲は山茶碗散布範囲とする。灰原はほとんど攪乱を受けておらず、遺存状態はきわめて良好であった。灰原は、前庭部南側の斜面、窯体の掘抜排土上に堆積していた。灰原は山茶碗、焼台、焼土などを大量に含む黒色灰層およびその上層の茶褐色土とからなっている。

黒色灰層は灰原の大部分を占め、その範囲は8.5×5.0m、最大層厚は約40cmを測る。左右の堆積は13号窯掘抜排土上に限られるが、上下方向は掘抜排土より下方にまで堆積が認められる。黒色灰層の細かい分層は不可能で、一層のみの堆積であると確認された。茶褐色土の堆積は非常に狭い範囲で、層厚は約5cmを測る。灰原は、ほぼ黒色灰層の単層で構成されているといつてもよいかもしれない。黒色灰層の上には、表土（腐葉土）のみの堆積が確認され、表土以外の灰原覆土は確認されなかった。なお表土中に山茶碗が含まれる山茶碗散布範囲は20.0×14.0mである。

土坑（SK1～4）

土坑は、4基（SK1～4）が確認された。このうち焚口の両端で確認されたSK3および4は埋土中に大量の山茶碗を包含し、焼成に失敗した山茶碗を廃棄した廃棄土杭と考えられる

SK1 SK1は、焼成室の西側で確認された。平面プランは隅丸方形を呈する。法量は2.0m×0.8

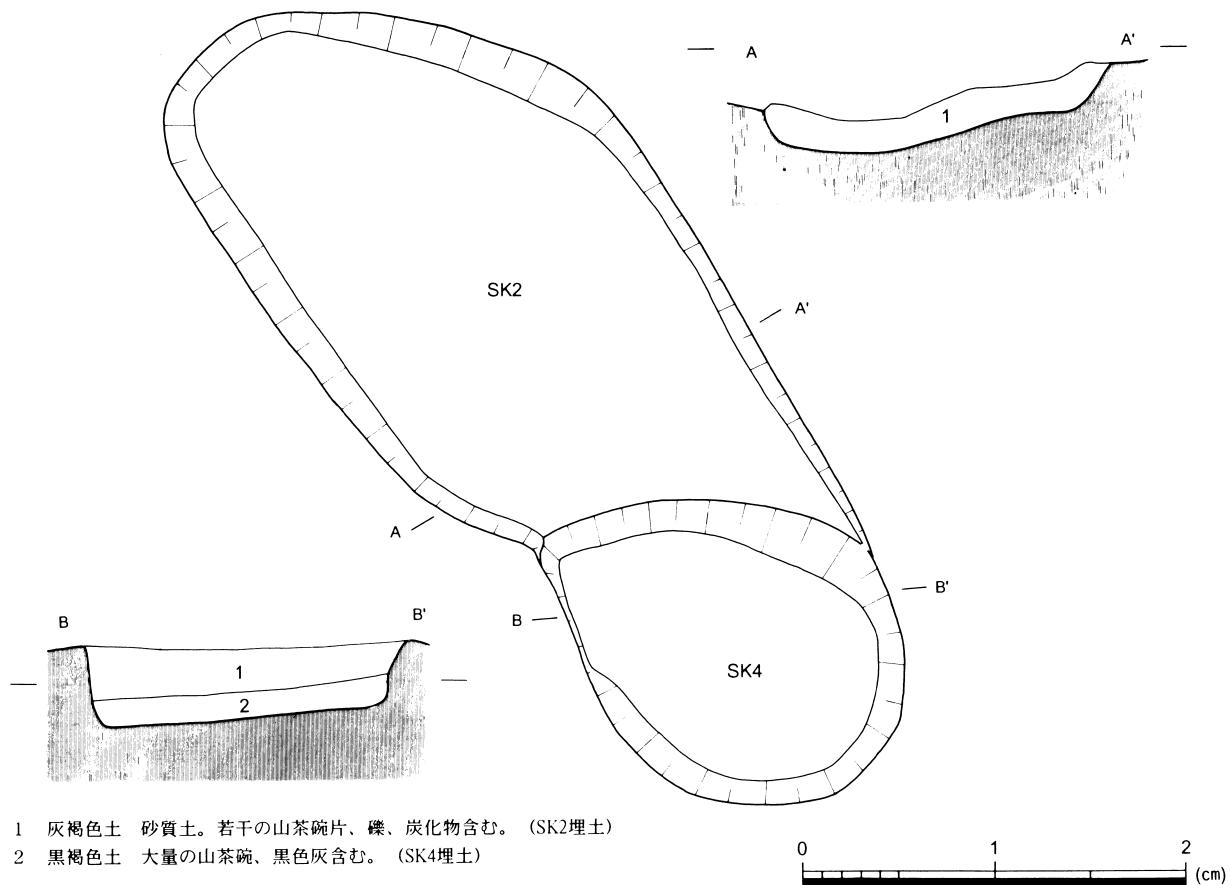


第28図 SK3 (O S) 実測図

m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色土層である。遺物は全く出土しなかった。遺構の性格は不明である。

SK2 SK2は窯体西側で確認された。SK4と切り合い関係にあるが、SK4を切る形で掘り込まれている。平面プランは不整形な長細い楕円形を呈する。法量は4.4m×2.1m、深さ0.5mを測る。埋土は灰色砂質土である。遺物は埋土上部より山茶碗片が出土したのみである。また、SK2の掘抜排土と考えられる盛土がSK2の下方で確認されている。セクションの観察によると、掘抜排土中に焼土が含まれていたが、遺物は含まれていない。このことからSK4に山茶碗が廃棄される前にSK2が掘削されたと考えられる。したがって、SK2とSK4との時期差はさほどないと思われる。遺構の性格は不明である。しかし、土坑が細長の平面プランを呈することや形状や13号窯焚口付近から掘削されていることから、掘削途中で廃棄された窯である可能性もある。

SK3 SK3は前庭部の東側で確認された。平面プランは不整形である。法量は3.1×2.1m、深さ0.5mを測る。埋土は下層には遺物を含まない明褐色土が堆積し、その上層に山茶碗などを包含する層が3層にわたって堆積する。山茶碗を廃棄した廃棄土坑である。上層は山茶碗を含む灰褐色土層が焼土層をはさみこむ形で互層となっている。この焼土層は、窯壁、天井といった窯体の一部を廃棄したいわゆる「ガラ」によって成り立っている。これは本窯が改修を受けていることを示している。また、SK3の掘抜排土と考えられる盛土がSK3の下方で確認されている。セクションの観察によると、SK3の掘り方に掘抜排土がかかっていることがわかる。このことからSK3は上から下に掘削されたのではなく、斜面を水平方向に掘削し、搔き出した掘抜排土で手前に障壁をつくり土坑状に整形していることがわかる。また、SK3の掘抜排土は13号窯掘抜排土の直上に堆積し、13号窯掘抜排土との間に間層がない。このことからSK3と13号窯体との時期差はさほどないと思われる。



第29図 SK2・SK4 (OS) 実測図

SK4 SK4は前庭部の西側で確認された。平面プランは不整形な橢円形を呈する。SK2に切られている。法量は $2.1 \times 1.6\text{m}$ 、深さ 0.1m を測る。埋土は黒色灰を含む山茶碗からなっており、山茶碗を廃棄した廃棄土坑である。前述の通り、山茶碗の廃棄はSK2掘削後と思われる。

作業場

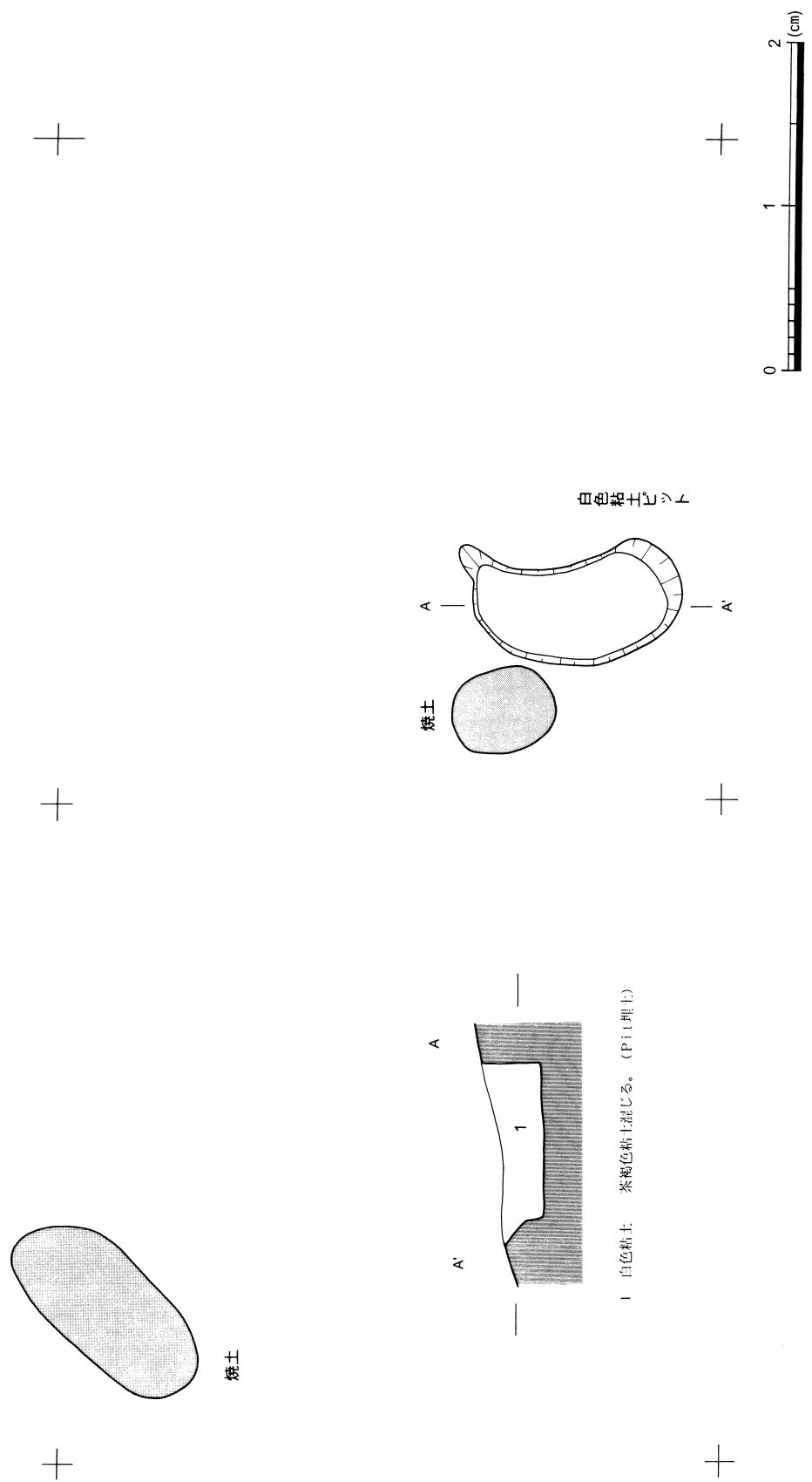
本遺構が、厳密な意味で「作業場」といえるか疑問が残るが、ここでは一応作業場としておく。丘陵頂部の平坦面より、白色粘土ピット、地山土が赤く被熱した焼土が2ヶ所確認された。

13号窯の煙道部は丘陵頂部の平坦面の端部、まさに斜面のはじまる屈曲点に位置している。その煙道部のすぐ上、平坦部南端に白色粘土を埋土とするピットが確認された。このピットは不整形な橢円形の形状を呈し、 $1.3 \times 6.0\text{m}$ 、深さ約 30cm を測る。埋土は主に白色粘土であるが、マーブル状に茶褐色の粘土が混じる。このピットの性格はよくわからない。輶轤ピットにしては形状が不整形に思われ、また粘土置き場にしては規模が小さすぎる。このピットのすぐ西側および北西約 5m の地点で、地山土が被熱して、赤化した範囲が2ヶ所確認された。この被熱範囲は地焼炉と考えられる。この平坦面からは、柱穴等は確認されなかった。

(澤村雄一郎)

第2節 遺物

大沢13号窯は、白瓷系陶器（山茶碗）を焼成している。土坑（SK3・4）からは、13号窯で焼成



第30図 大沢13号窯作業場実測図

されたと思われる白瓷系陶器が出土している。これらはいずれも砂粒をほとんど含まない緻密な胎土をもつ「北部系山茶碗」である。全体によく焼き締まっており、色調は多くは灰白色であるが、焼成温度の低いものは黄灰白色を呈するものもある。器種構成は碗、皿が主体をなすが、それ以外の器種も、若干ではあるが確認されている。碗、皿、蓋は形態などから、I～III類に分類できる。他の窯でも同様の分類基準を用いているため、詳細については第8章（まとめ）で述べることとする。

1. 大沢13号窯出土遺物（第31図）

13号窯からは、碗、皿が出土している。類型はII類に限られる。

碗類

碗II類（156～172） 口径135～145mm、器高53～69mm、高台径50～60mm。口台比2.3～2.9：1である。13号窯出土碗はすべてII類に属する。

碗II類（小型）（174～177） 口径115～119mm、器高49～52mm、高台径48～52mm。口台比23～24：1。II類の小型碗である。

無高台碗（II類）（173） 口径136mm、器高51mm、高台径60mm、口台比2.3：1。無高台であるが形態的にはII類に属する。粉殻痕は認められない。

皿類

皿II類（178～183） 口径78～86mm、器高12～20mm、底径46～60mm。口底比1.4～1.8：1。13号窯出土皿はすべてII類に属する。

2. 大沢13号窯灰原出土遺物（第32・33図）

13号窯灰原からは、碗、皿、オロシ碗、穿孔碗、蓋、陶丸、小壺、六器、窯道具として焼台が出土している。主体をなすのはII類であるが、I類に属するものも確認された。

碗類

碗II類（184～186、188～205、207～209、215） 215以外：口径125～144mm、器高52～66mm、高台径51～65mm。口台比2～2.8：1。13号窯灰原出土碗の主体をなす。215：口径141mm、器高54mm、高台径47mm。口台比3.0：1。法量、器形がIII類に非常に近い面もあるが、口縁が外反している。II類とIII類の中間的な形態を呈する。200は碗に蓋が合嵌した状態で釉着しているもの。

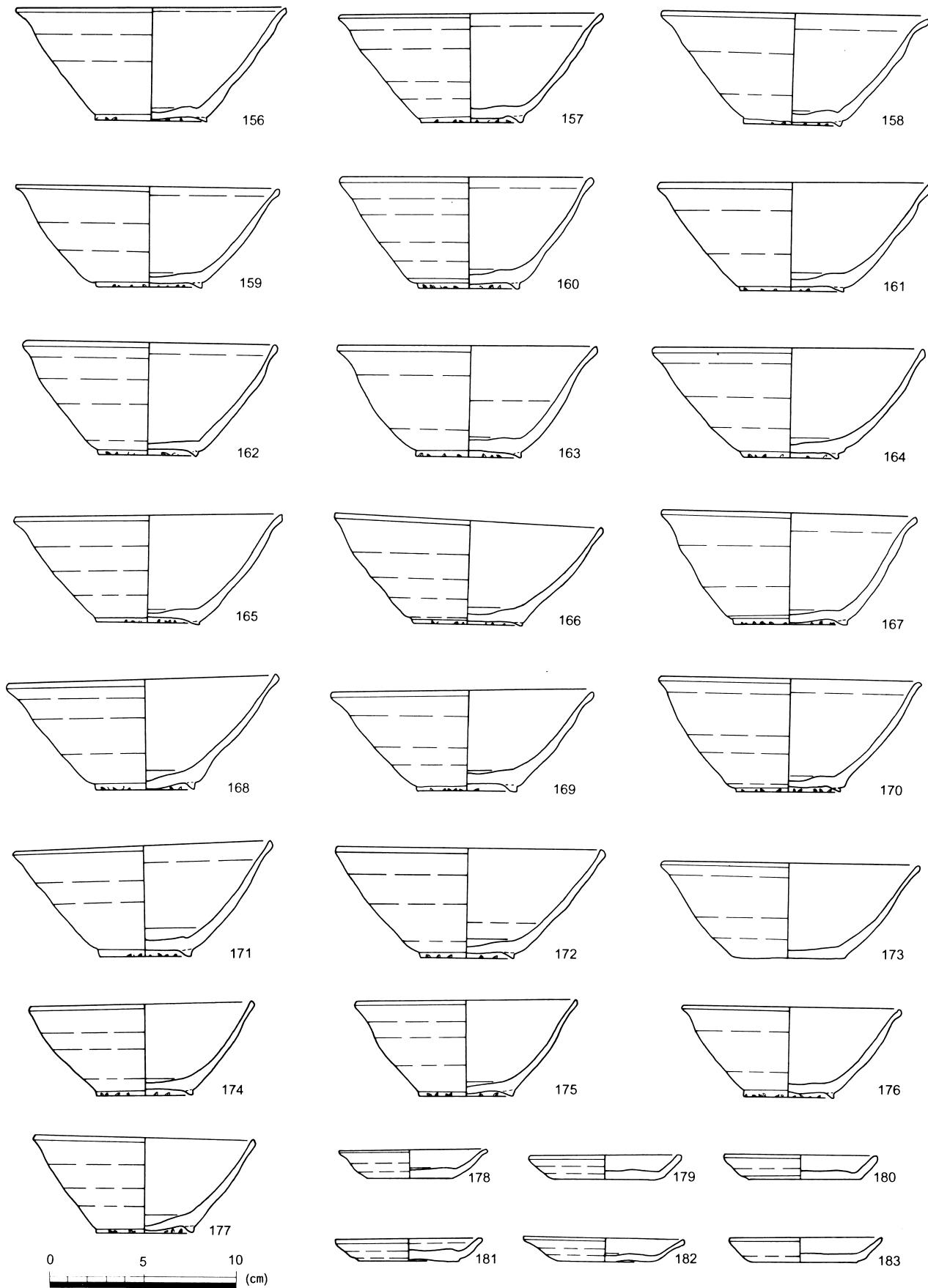
碗II類（小型）（210～214） 口径106～116mm、器高46～52mm、高台径43～48mm。口台比2.4～2.7：1。

碗I類（187・206） 187：口径137mm、器高63mm、高台径56mm。口台比2.4：1。206：口径144mm、器高55mm、高台径66mm。口台比2.2：1。

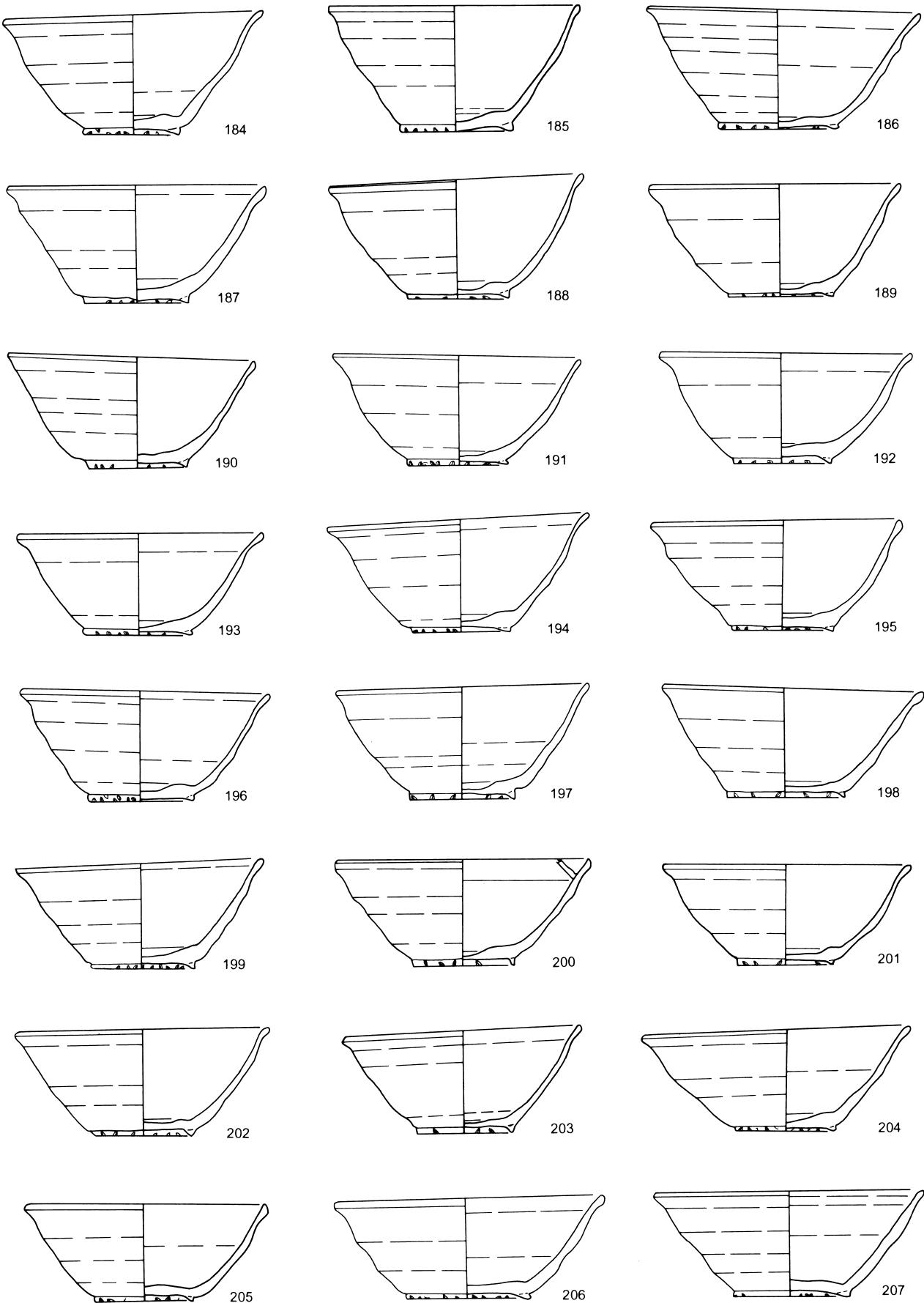
無高台碗（218） 口径137mm、器高63mm、高台径55mm。口台比2.5：1。法量、器形はII類に対比される。

穿孔碗（216） 口径143mm、器高55mm、高台径52mm。口台比2.8：1。胴部下半にヘラ切りによる穿孔が施されている。法量、器形はII類とIII類の中間的な形態を示す。

穿孔無高台碗（217） 口径138mm、器高58mm、高台径58mm。口台比2.4：1。胴部下半にヘラ切りによる穿孔が施されている。法量、器形はII類に対比される。

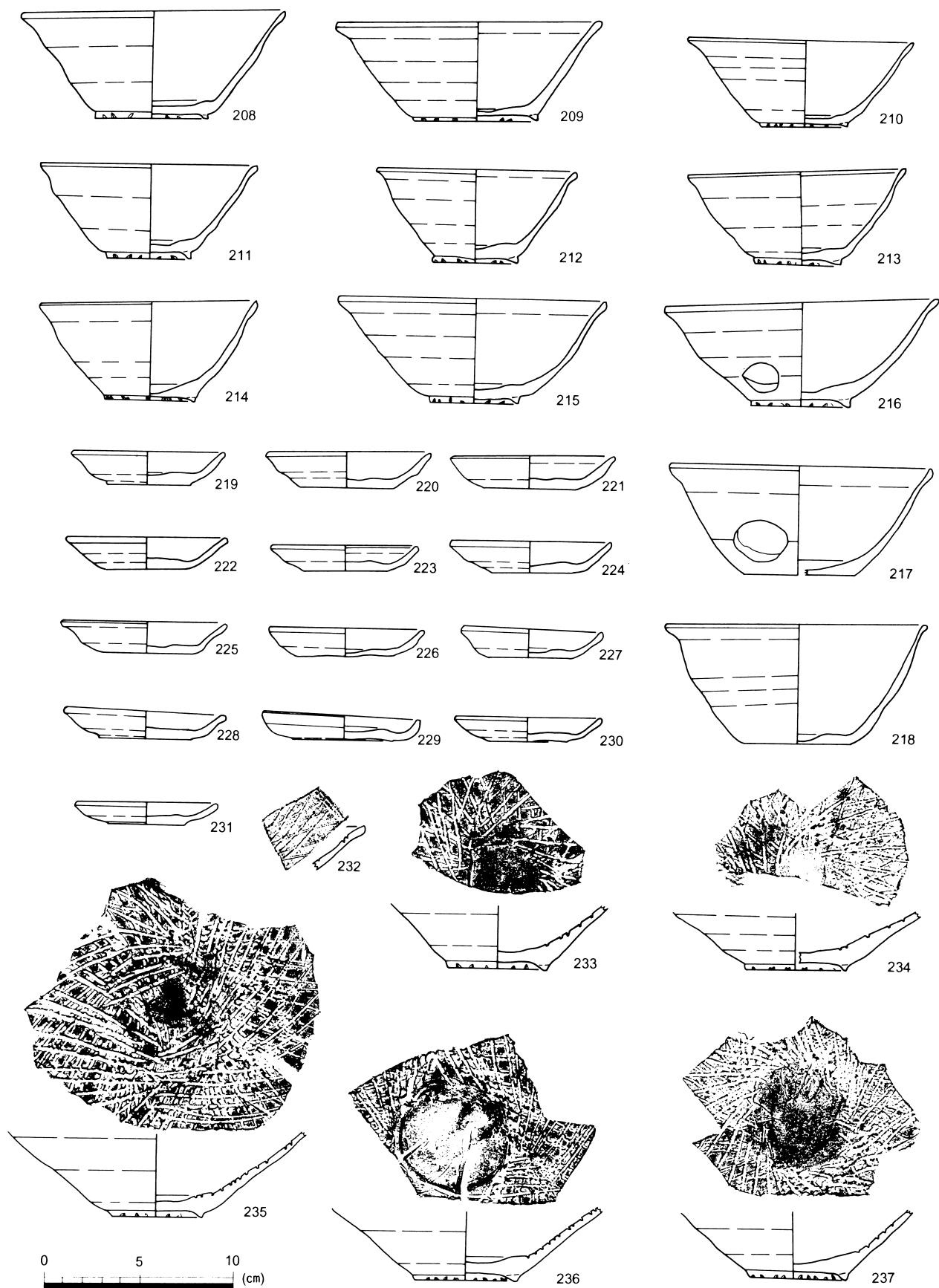


第31図 大沢13号窯内出土遺物

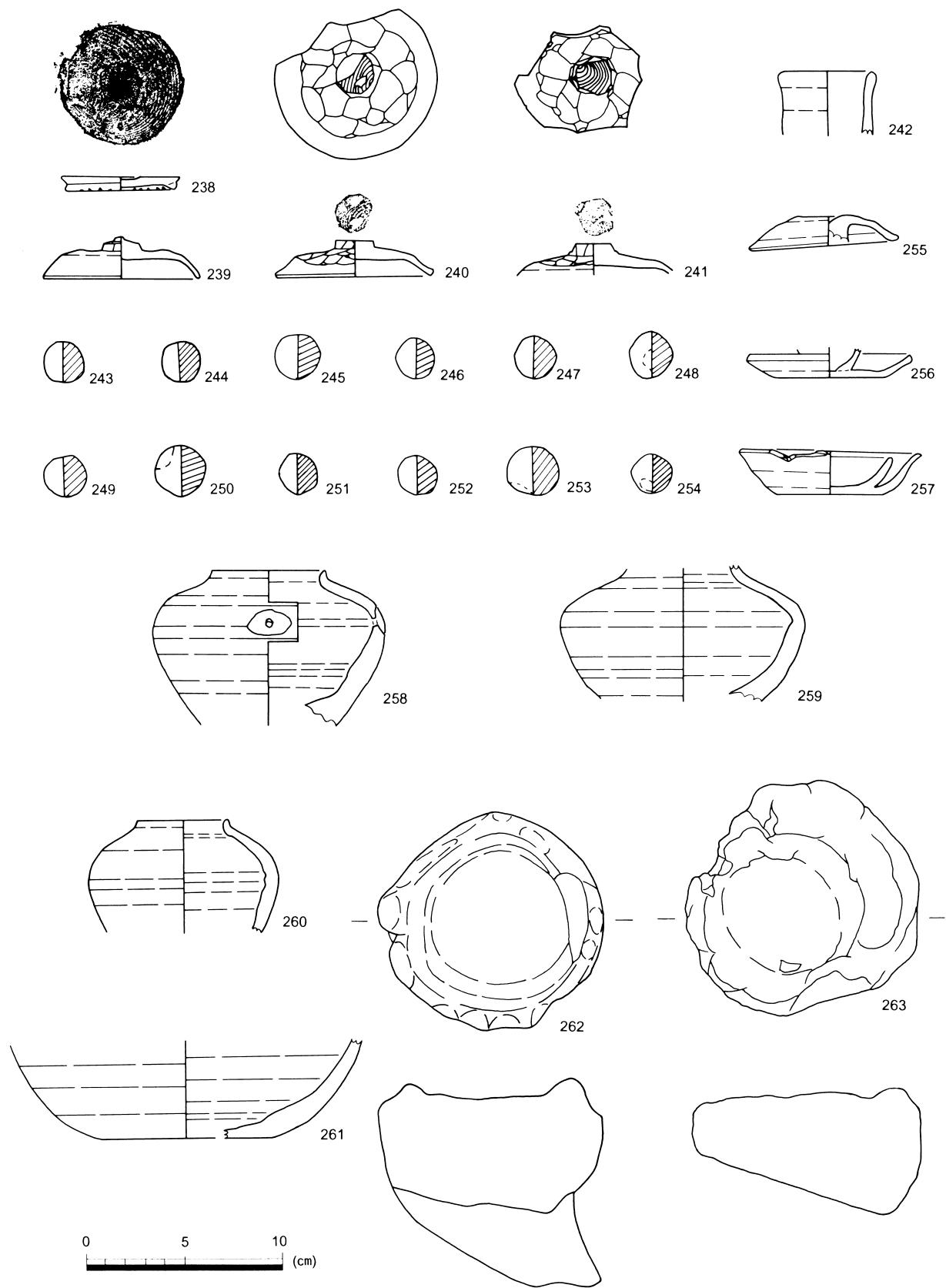


第32図 大沢13号窯灰原出土遺物（1）

0 5 10 (cm)



第33図 大沢13号窯灰原出土遺物（2）



第34図 大沢13号窯灰原出土遺物（3）

オロシ碗 (232～237) 高台径48～54mm。底部内面から胴部内面にかけて斜格子状のオロシ目が施されている。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。29・30号窯のオロシ碗と比較して、こちらは高台がつけられており、やや異なる形態を呈する。

皿類

皿I類 (219～222) 口径82～85mm、器高18～19mm、底径42～49mm。口底比1.7～2.0:1。

皿II類 (223～231) 口径71～86mm、器高11～18mm、底径40～53mm。口底比1.5～1.9:1。

その他の器種

蓋 (239～241) 239:口径80mm、器高22mm。240:口径78mm、器高19mm。いずれもツマミはあらくヘラ切りによって切り出されている。239は胴部上半は回転ヘラ削りにより成形されている。240・241は胴部上半がヘラで削られ、ツマミ上面には糸切り痕が残る。

小壺の蓋 (255) 口径76mm、器高15mm。小壺に合嵌する蓋と思われる。円柱状のかえし部が欠落している。

六器 (256・257) 皿の底部内面中央に小型の碗を貼り付けている。なお、257は口縁端部が片口のように見えるが、これは糸切りの際などに偶然ついたものである可能性も高い。

注口を有する小壺 (258) 輻轆水挽きで成形され、内外に輻轆痕による凹凸がみられる。口縁部が垂直方向に5mm程引き上げられている。口縁部にはナデ調整が施され、薄く先細りに仕上げられる。胴部の最大径をとるあたりに約45°の角度で上向きに注口が穿孔されている。われ口の状況から、注口部が盛り上げられていたことが推測される。

小壺 (259・260) 輻轆水挽きで成形され、内外に輻轆痕による凹凸がみられる。260は口縁部が垂直方向に5mm程引き上げられている。口縁部にはナデ調整が施され、薄く先細りに仕上げられる。

陶丸 (243～254) 径20～26mm。球形を呈する。指痕が残っている。

器種不明 (238) 器高7mm、高台径56mm。碗の高台部のみが糸切りにより切られている。糸切り痕を切る形で指撫でが施されている。外面全面に降灰している。

器種不明 (242) 口径48mm。外面全体に非常に厚く降灰している。碗がひずんだものかもしれない。

無高台鉢 (261) 鉢の底部と思われるが、色調が暗褐色である。山茶碗ではなく、むしろ須恵器に近い感じである。胴部下半に回転ヘラ削りが施されている。

窯道具

焼台 (262、263) 馬爪形の焼台である。胎土は、砂礫を多く含み、非常に荒い。上部には碗が押しつけられた痕跡が認められる。262は、傾斜の急な部分に据えるためか、2段に粘土塊を積んでいる。

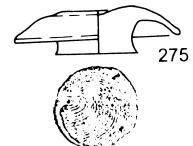
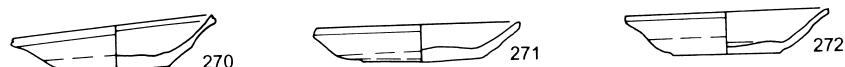
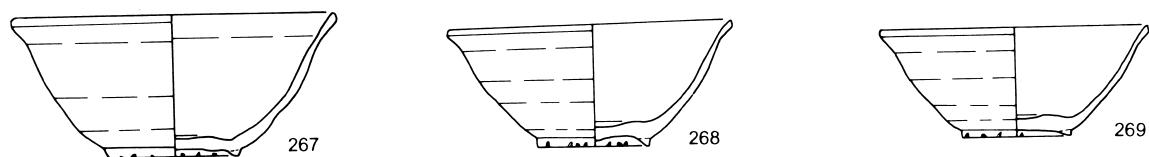
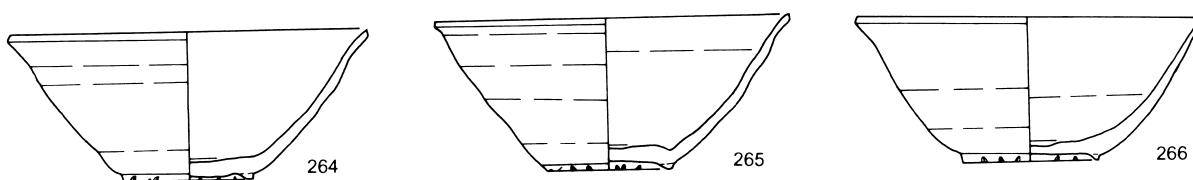
3. SK2出土遺物（第35図）

SK2からは、碗、皿、蓋、陶丸が出土している。すべての遺物がII類に属する。

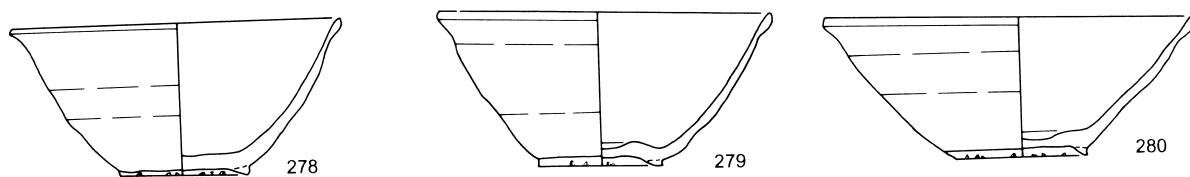
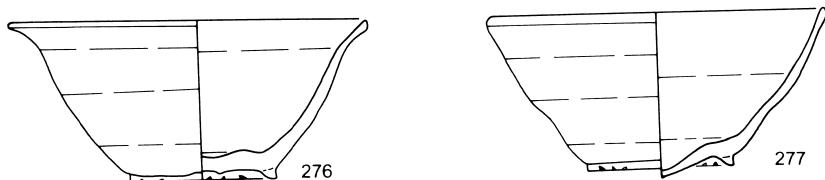
碗類

碗II類 (264～267) 口径128～141mm、器高56～60mm、高台径48～53mm。口台比2.5～2.9:1。

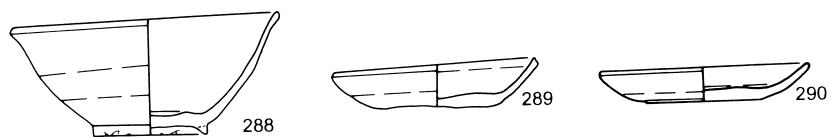
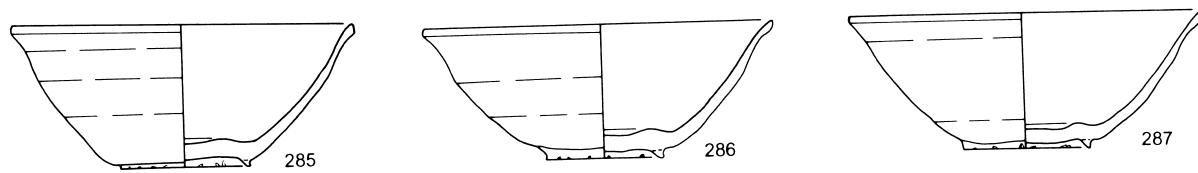
碗II類（小型） (268・269) 268:口径111mm、器高48mm、高台径44mm。口台比2.5:1。269:口径104mm、器高43mm、高台径42mm。口台比2.5:1。



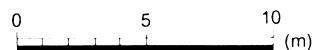
SK2



SK3



SK4



第35図 SK2～SK4 (O S) 出土遺物

皿類

皿II類 (270~272) 口径79mm、器高14~16mm、底径41~46mm。口底比1.7~1.9:1。

その他の器種

小壺の蓋 (275) 口径64mm、器高17mm。小壺に合嵌する蓋と思われる。円柱状のかえし部下面には糸切り痕が残っている。

陶丸 (273・274) 径22~30mm。球形を呈する。指痕が残っている。

4. SK3出土遺物(第35図)

SK3からは、碗、皿が出土している。II類のみが確認されている。

碗類

碗II類 (276~280) 口径130~145mm、器高55~62mm、高台径48~57mm。口台比2.3~2.8:1。

皿類

皿II類 (281~284) 口径80~84mm、器高12~16mm、底径48~51mm。口底比1.6~1.7:1。

5. SK4出土遺物(第35図)

SK3からは、碗、皿が出土している。II類のみが確認されている。

碗類

碗II類 (285~287) 口径134~138mm、器高52~56mm、高台径46~51mm。口台比2.6~3.0:1。口縁の外反が比較的顕著なため、II類として分類しているが、法量的にはむしろIII類に近いといえる。

II類とIII類の中間形態である。

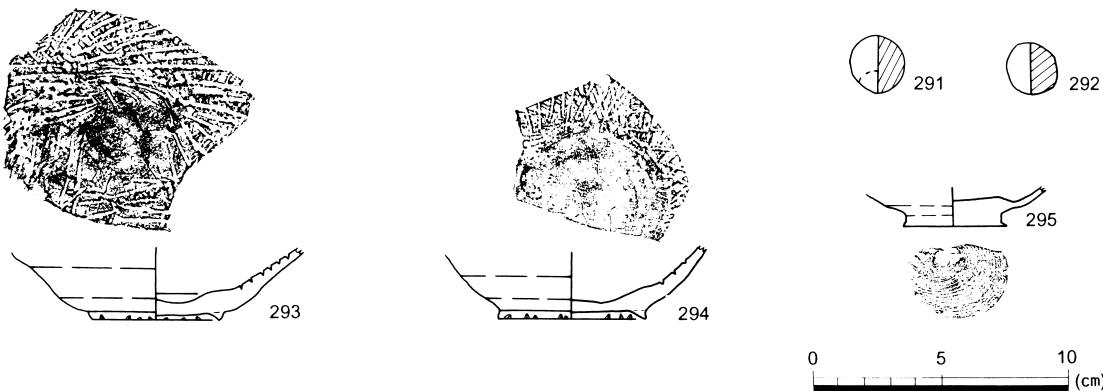
碗II類(小型) (288) 口径107mm、器高46mm、高台径45mm。口台比2.4:1。II類の小型碗である。

皿類

皿II類 (289・290) 289:口径78mm、器高17mm、底径48mm。口底比1.6:1。290:口径81mm、器高13mm、底径45mm。口底比1.8:1。

7. 大沢13号窯遺構外出土遺物

13号窯の出土品中、ここでは遺構外の出土品のうち特殊な器形のものなどをとりあげる。オロシ碗、陶丸、台付皿が出土している。



第36図 遺構外(O.S.)出土遺物

碗 類

オロシ碗 (293・294) 293: 底径51mm。294: 底径59mm。底部内面から胴部内面にかけて斜格子状のオロシ目が施されている。外面全体に降灰が認められ、蓋として焼成されたものと思われる。13号窯灰原出土のオロシ碗同様、高台がつけられている、293はE 5、294はF 5グリッドより出土している。

皿類

台付皿 (295) 高台径41mm。外見的には高台に見える中実の台をともなう皿である。高台部および胴部は一気に挽き上げられている。高台基部は外反している。台の基部には糸切り痕が残る。

その他の器種

陶丸 (291・292) 径23~20mm。球形を呈する。指痕が残っている。

第3節 小 結

1. 遺 構

当調査区では、遺構の前後関係について、13号窯体に先行する遺構は確認されず、今回確認された遺構はすべて13号窯に付帯する施設であると考えられる。SK 2、SK 4はいずれも13号窯の掘抜排土上にそれぞれの土坑の掘抜排土が堆積している。また、SK 2はSK 4を切る形で構築されている。このことから13号窯→SK 4→SK 2、また13号窯→SK 3の前後関係を導き出すことができる。SK 2掘抜排土には焼土が含まれ、SK 3掘抜排土上には焼土等は含まれないため、SK 3がSK 2に先行するものと思われる。しかし、SK 2もSK 3も掘抜排土中に遺物が含まれないため、13号窯の構築からさほど時を経ずして構築されたものと思われる。SK 3とSK 4は切り合い関係が確認できないため、遺構の観察からお互いの前後関係を確認することはできない。なお、作業場については、切り合いが全くなく遺構からは何ともいえない。

2. 遺 物

白瓷系陶器の類型については、第8章で詳述するが、本報告中の類型を美濃窯における山茶碗編年にあてはめると、I類=白土原1号窯期、II類=明和1号窯期、III類=大畠大洞4号窯期(古)、IV類=大畠大洞4号窯期(新)に比定することができる。

遺物の型式から、各遺構の年代的な位置づけを考えると、13号窯(最終操業期)=明和1号窯期、灰原=白土原1号窯期~明和1号窯期、SK 2=明和1号窯期、SK 3=明和1号窯期、SK 4=明和1号窯期(ただし大畠大洞4号窯期の特徴も持つ器形である)に比定される。

このことから、各土坑はほとんど同時期に掘削されたものと考えられる。

13号窯の灰原から白土原1号窯期に属する遺物が出土しているため、13号窯の操業開始時期は、白土原1号窯期までさかのぼる可能性が高い。

(澤村雄一郎)

第5章 北小木大谷洞28号窯

第1節 遺構

調査対象となったのは、窯体の上部にあたる範囲のみであった。調査によって、窯体のうち、煙道部および焼成室の一部が確認された。焚口、燃焼室、焼成室および灰原などは調査区外の斜面下方に残存すると思われる。調査範囲においては、攪乱等はほとんどみられず、残存状態は良好であった。なお、隣接して北小木大谷洞27号窯（遺跡番号=G37T07641）の存在も周知されているが、今回の調査では確認されなかった。遺物（山茶碗片）の散布状況から、おそらく28号窯の南側やや下方に構築されているものと思われる。

立地・基本層序

本窯は、頂部標高289.2mを測る丘陵の南向きの斜面上に立地する。斜面の傾斜角度は約20度を測る。確認された窯体は標高279.2～280.5m（焼成室上部から煙道部）に構築されている。本窯の下方には、東海自然歩道がおそらく窯の灰原を横切る形で東西にはしる。この東海自然歩道が岐阜県と愛知県の県境となっており、東海自然歩道より南側は愛知県春日井市である。

本窯における基本層序は、落ち葉などからなる腐葉土を表土とする。その下に茶褐色土が堆積している。この茶褐色土は丘陵頂部よりの流出土と考えられる。これらの下層に礫を多く含む明褐色土が地山として堆積している。

窯体

規模 窯体の規模は、確認長3.2m、確認された床面の最大幅1.25mを測る。焼成室における床面の傾斜角は23°である。主軸の方位はN-124°-Eである。

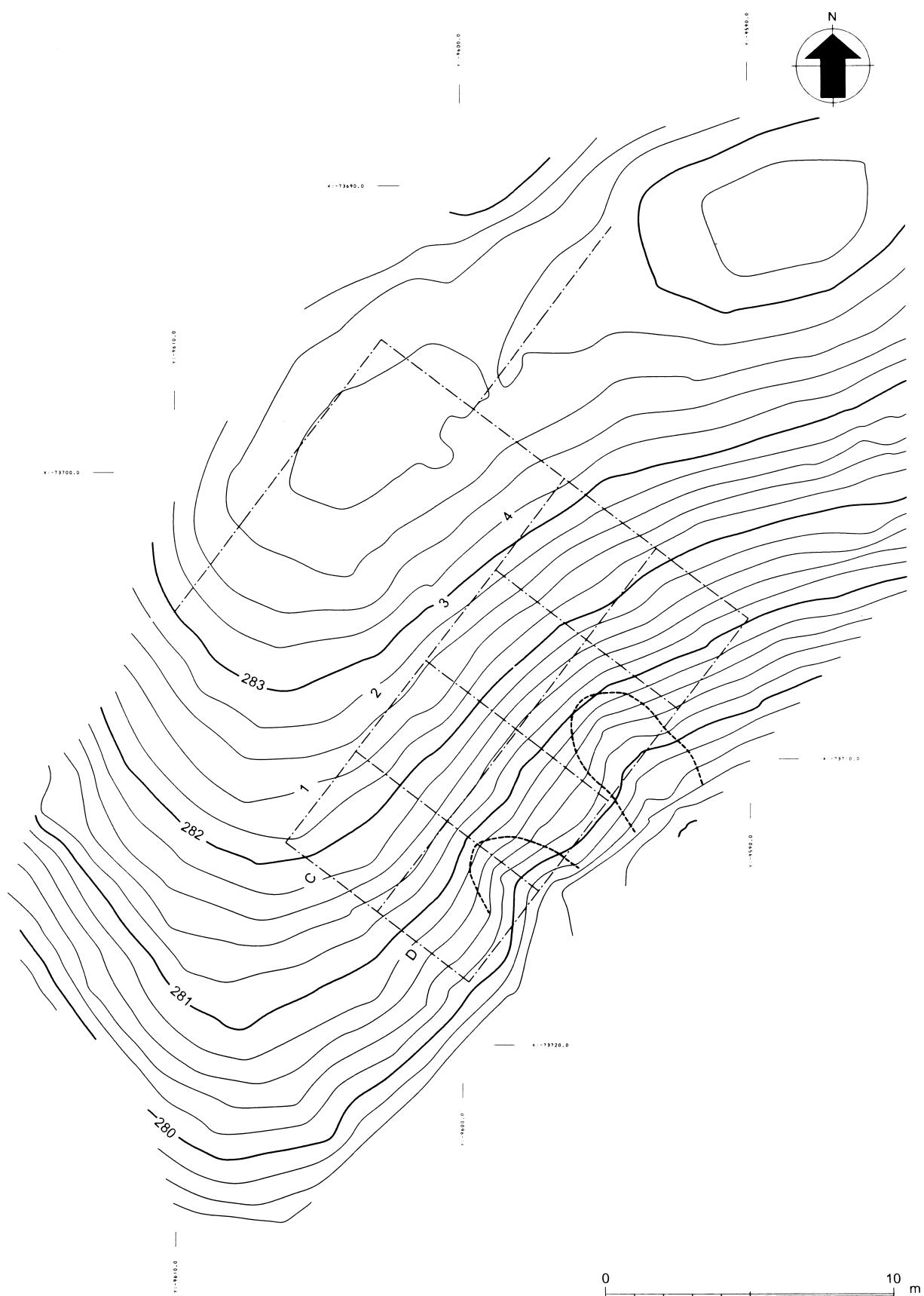
窯体埋土の層序 窯体埋土の状況は、窯体を横断する発掘区端に設定されたセクションにより確認することができる（第39図）。セクション断面の観察から、天井部（7）が一度に崩落し、その上部に流入土（6）が堆積していることがわかる。

焼成室 焼成室は、確認された長さ約0.9m、発掘区南端で最大幅1.25m、煙道部との境で幅0.7mである。床面の傾斜角は、このポイント発掘区南端から煙道部との境までは23°が測られた。床面の平面プランは、発掘区南端から煙道部との境まで緩やかに狭まっていく。

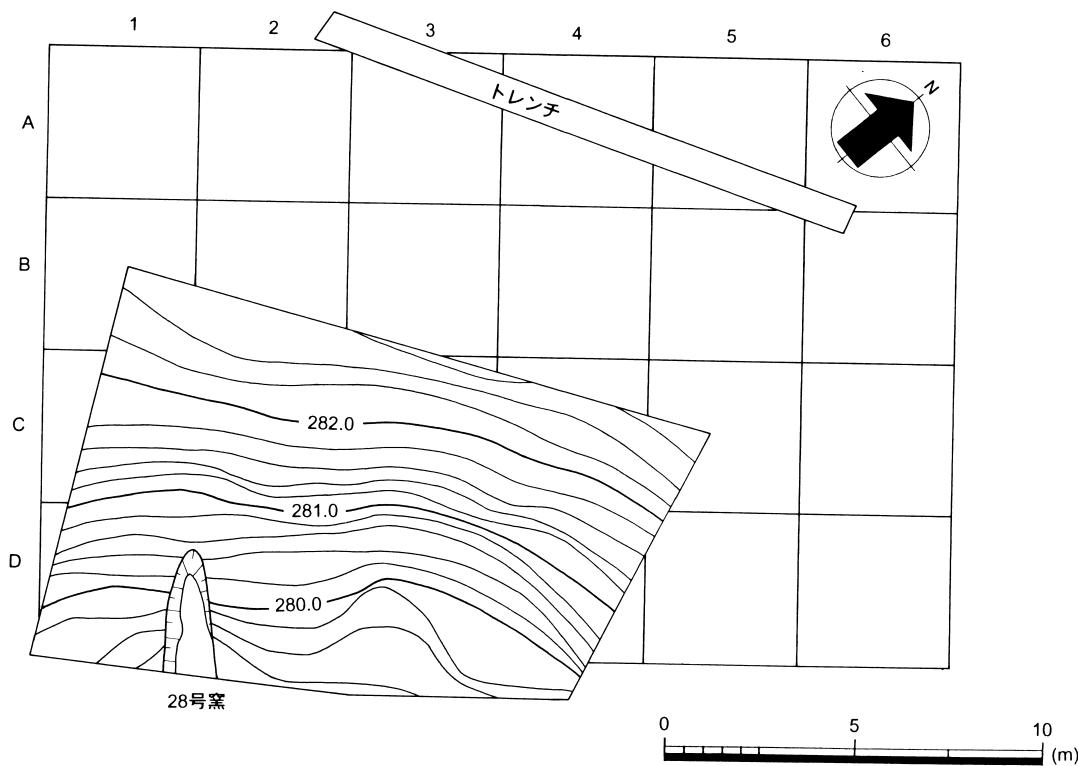
床面は、発掘区南端から煙道部との境の範囲で厚さ約5cmの貼床が確認できる。

床面には改修が施されていると考えられ、焼成室では被熱した地山土（3）を壁面を残して削り取り、その後床面に充填土（2、4）が敷かれ、さらに床面および壁面に粘土（1）が貼られたと考えられる。また、壁面も床面と一体で粘土（1）が貼られている。なお、焼成室内から若干の山茶碗が出土しているが、器形全体を復元しうるものは1点のみで、ほとんどの個体は底部のみ残存していた。

煙道部 煙道部は長さ2.0m、焼成室との境で幅0.7mを測る。床面の傾斜角は、焼成室との境を屈曲点としてやや平坦になり、焼成室との境から0.5mの地点までは約15°である。このポイントから弧状に傾斜角35°以上の角度で上昇する。平面プランは焼成室との境をくびれ部とし、焼成室との境から0.5mまでは直線的なプランであるがそこから徐々にすぼまる。ただし窯体の左右は非対称で不整形な



第37図 北小木大谷洞28号窯調査前地形図 (S=1:200)



第38図 北小木大谷洞28号窯全体図

感がある。床面は、煙道部においては貼床は確認できず、厚さ約8cmにわたって地山土が赤く被熱していた。壁面の残存高は約60cmである。崩落天井の残存状況から、天井部は焼成室との境から0.5mの

第2節 遺 物

北小木大谷洞28号窯は、白瓷系陶器（山茶碗）を焼成している。いずれも砂粒をほとんど含まない緻密な胎土をもつ「北部系山茶碗」である。全体によく焼き締まっており、色調は多くは灰白色であるが、焼成温度の低いものは黄灰白色を呈するものもある。本調査では、煙道部および焼成室の一部に調査範囲が限られたため、確認された器種は碗のみにとどまった。

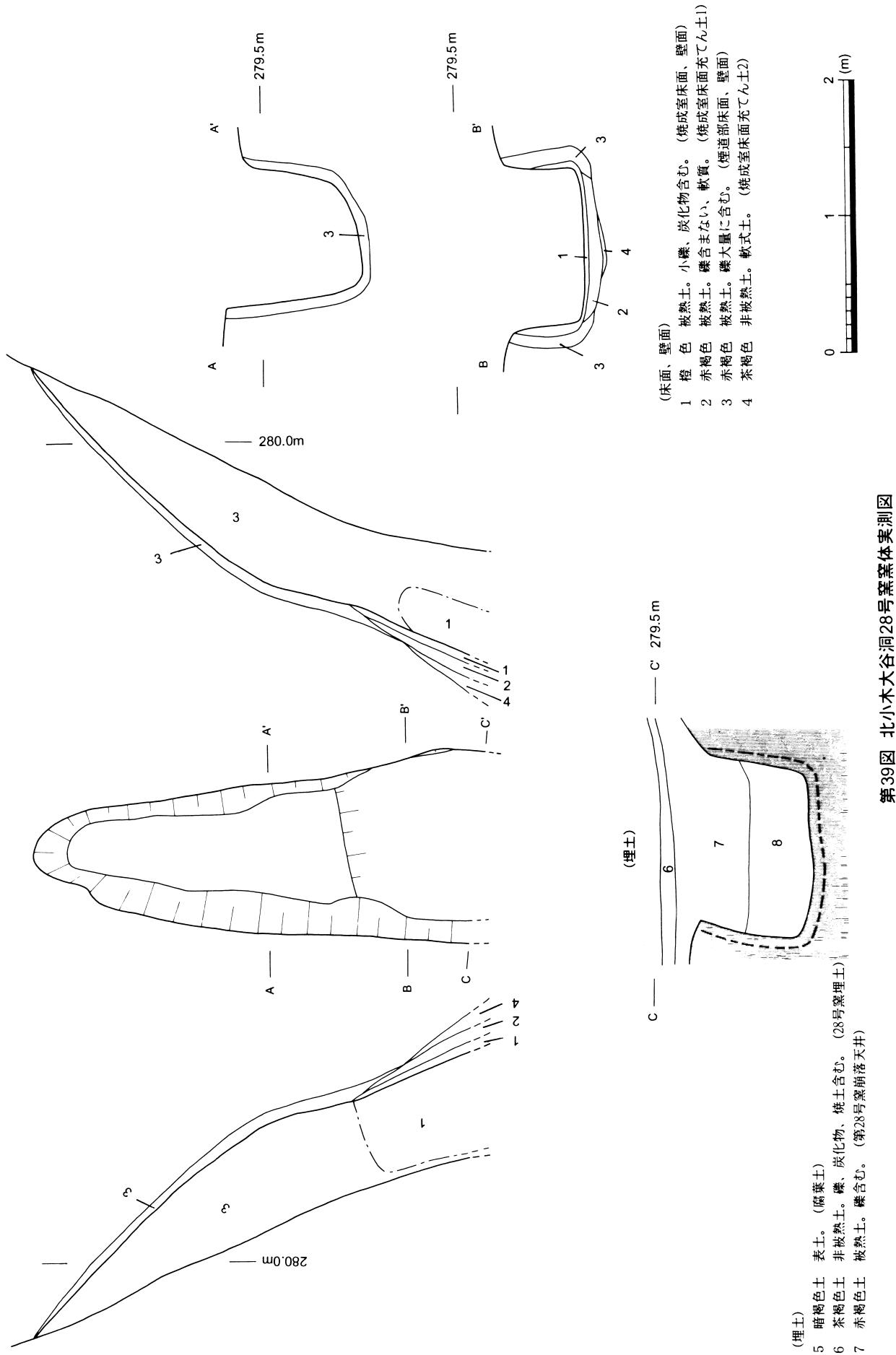
1. 北小木大谷洞28号窯出土遺物（第40図）

28号窯からは、碗、皿が出土している。類型はⅡ類およびⅢ類の碗が確認されている。

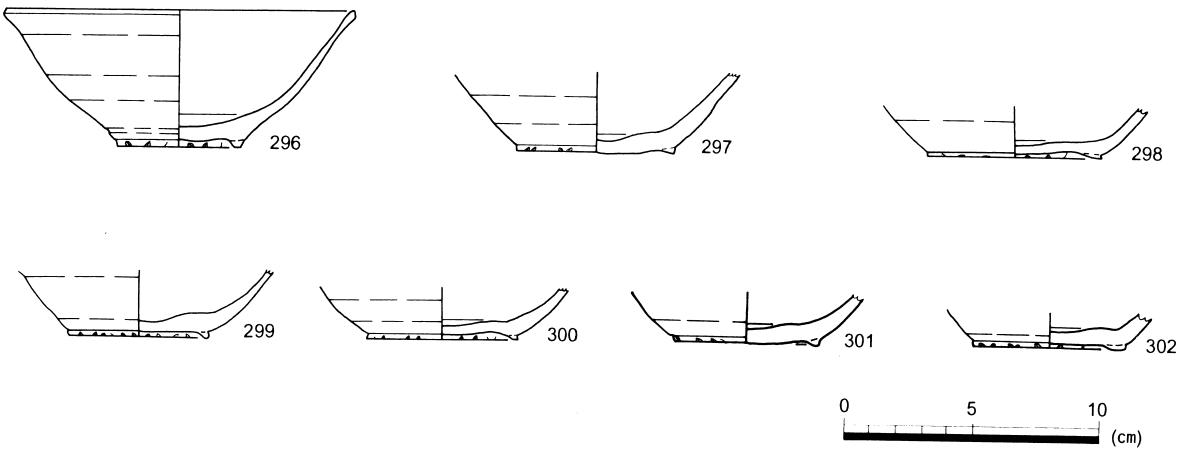
碗 類

碗Ⅱ類（297～302） 高台径56～68mm。いずれも底部のみの破片であるが、高台径および胴部下半の立ち上がりから、Ⅱ類に分類した。

碗Ⅲ類（296・299） 296：口径137mm、器高54mm、高台径49mm。口台比2.8：1。口縁端部が外反している点は、Ⅱ類に特徴的な調整であり、Ⅱ類とⅢ類の中間的な形態といえる。



第39図 北小木大谷洞28号窯窓体実測図



第40図 北小木大谷洞28号窯窯内出土遺物

第3節 小 結

1. 遺 構

遺構は、煙道部および焼成室の一部のみの調査であったため、特に切り合いもなかった。丘陵頂部に作業場の存在を想定してトレンチを設定したが、トレンチからは遺構は何も確認されなかった。

2. 遺 物

28号窯の出土遺物は、ほとんどが小片であり、口縁まで復元できる個体は1個体しかなかった。このため、遺物の位置づけは非常に難しい。あえて位置づけるとすると、明和1号窯期と大畠大洞4号窯期の間に位置づけることになる。その根拠として、図化した底部のみの遺物は底径が大きく、胴部の立ち上がりからも明和1号窯期に位置づけられる。そして、口縁まで残存する個体が、法量は大畠大洞4号窯期の碗と同様であるものの、口縁端部が外反するという明和1号様式期の特徴を併せ持っているという点である。よって本窯は、明和1号窯期から大畠大洞4号窯期に位置づけられる。

(澤村雄一郎)

第6章 北小木神明洞1号炭焼窯

第1節 遺 構

本窯の調査範囲は、窯体および灰原の全域にわたった。発掘調査によって、窯体、前庭部、窯体の掘抜排土、灰原などが確認された。遺物は窯体では全く確認されなかったものの、灰原で数点の山茶碗が確認された。攪乱等はほとんどみられず、残存状態は良好であった。

立地・基本層序

本窯は、北東に開く谷の奥部、尾根がせり出して谷が左右に分かれたさらに奥の西向きの斜面上（丘陵頂部標高291.9m）に立地する。斜面の傾斜角度は約30度を測る。窯体は標高268.8～270.7mで、丘陵やや下半、せり出した尾根に面した形で構築されている。この谷の奥部では泉がわいている。この泉を水源とし、谷づたいに北東方向の麓へと小川が流れている。

本窯における基本層序は、落ち葉などからなる腐葉土を表土とする。その下には茶褐色土が堆積する。この茶褐色土は丘陵頂部よりの流出土と考えられる。この層位の堆積は窯の前庭部より上部に限られる。この下に礫混じりの茶褐色土（地山）が堆積する。なお、前庭部より下部では茶褐色土層の堆積は認められず、灰原等では腐葉土のすぐ下に灰層が堆積している。これらの下層に礫を多く含む明褐色土が地山として堆積している。そして灰原の下部では地山は完全な礫層となっている。

窯体

規模 窯体の規模は、全長3.7m、床面最大幅1.7mを測る。床面の傾斜角は、約20°であるが、焼成室中央部から奥はかなり水平に感じられる。主軸の方位はN-67°-Wである。

窯体埋土の層序 窯体埋土の状況は、窯体を横断する窯体中央に設定されたセクションにより確認することができる（第43図）。セクション断面の観察から、天井部（10）が一度に崩落し、その上部および横部に流入土（7、8、9、11）が堆積していることがわかる。

窯体構造 本窯の構造は、焚口、焼成室（炭化室）、煙道部からなる。全体の平面プランは、焚口および煙道部が幅狭くなっている、焼成室中央が最大幅をとる胴張りで樽型の平面形を呈する。焚口は幅0.4mで、前庭部より約20cm程度高く段になっている。焼成室の床面には粘土が貼られており、炭化物の堆積層と赤褐色の被熱土層が互層になっており、焚口から焼成室中央部にかけてが1回、焼成室奥および煙道部は2回にわたって床面が改修されていることがわかる。また壁面は粘土は貼られず、地山をほぼ垂直に削り出している。煙道部は、幅0.4m、長さ0.4mを測る。煙道部の床面および壁面は粘土が貼られ、2回にわたって改修を受けている。煙道部最終壁面は非常になめらかに成形されている。煙道部は、床面からほぼ垂直に立ち上がるが、煙道中より径20cm程度の礫が数個確認された。おそらく粘土中に練り込まれ、焼成室との間で障壁をなしていたと思われる。

前庭部・掘抜排土

前庭部は全長5.5m、最大幅4.0mを測る。構築形態は、焚口両脇の地山を掘削する事により焚口付近を削り出し、窯体正面は掘抜排土による盛土によって、扇形に平坦面を作りだしている。前庭部には黒色灰層が掘抜排土上に堆積し、そのまま灰原へとつながっている。

掘抜排土は前庭部の大部分を占め、ほぼ焚口付近から下方に確認された。規模は8.5×5.5m、層厚は最大約35cmを測る。

灰原

灰原は黒色灰層および灰が多く含まれる暗褐色土からなる。

黒色灰層は9.0×5.0mの範囲で確認された。層厚はおおむね10cm程度である。黒色灰層の周囲には灰を多く含む暗褐色土層が10.0×8.0mの範囲で堆積しているが、黒色灰層からの流出による土層と考えられる。窯体同様、灰原にも遺物はほとんど含まれなかつたが、黒色灰層中の掘抜排土直上から数点の山茶碗片が確認されている。

第2節 遺物

北小木神明洞1号炭焼窯は、「炭」を焼成した炭焼窯であると思われる。窯体からは遺物は全く出土しなかつたが、灰原から数点の山茶碗片が出土している。また、表土から山茶碗片および近世の陶磁器片が出土している。

1. 北小木神明洞1号炭焼窯灰原出土遺物（第45図）

灰原から山茶碗の破片が出土している。類型はⅡ類およびⅢ類の碗が確認されている。

碗類

碗Ⅲ類（304～308）高台径45～50mm。いずれも底部のみの破片であるが、高台径および胴部下半の立ち上がりから、Ⅲ類に分類した。

碗Ⅳ類（303・307）303：口径126mm、器高47mm、高台径37mm。口台比3.4：1。307：高台径38mm。高台径が37mm前後とⅢ類に比較してかなり小さくなっている。

2. 北小木神明洞1号炭焼窯遺構外出土遺物（第45図）

碗類

碗Ⅲ類（309）高台径45mm。底部のみの破片であるが、高台径および胴部下半の立ち上がりから、Ⅲ類に分類した。

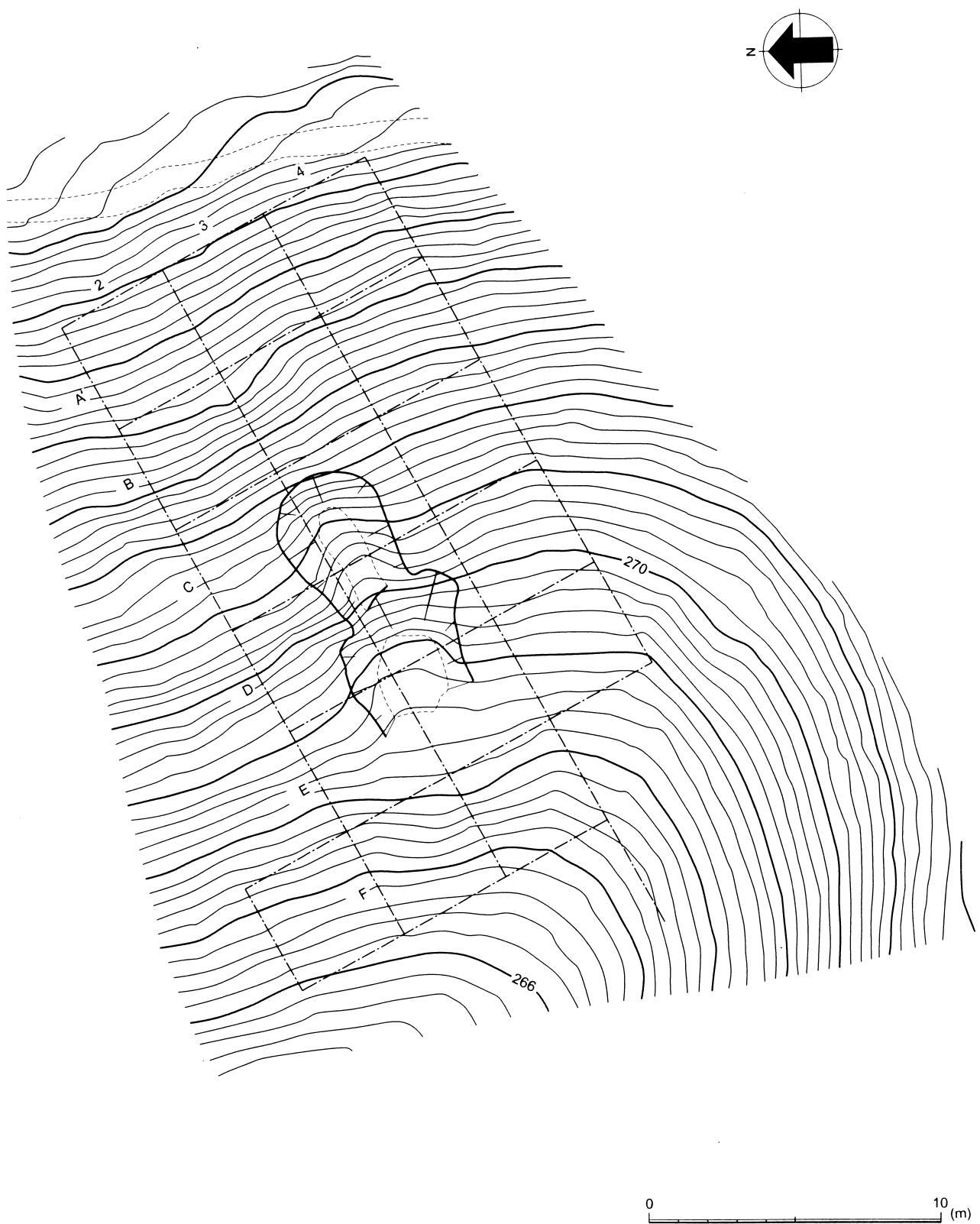
その他の器種

徳利（310）底径72mm。近世のものと思われる。

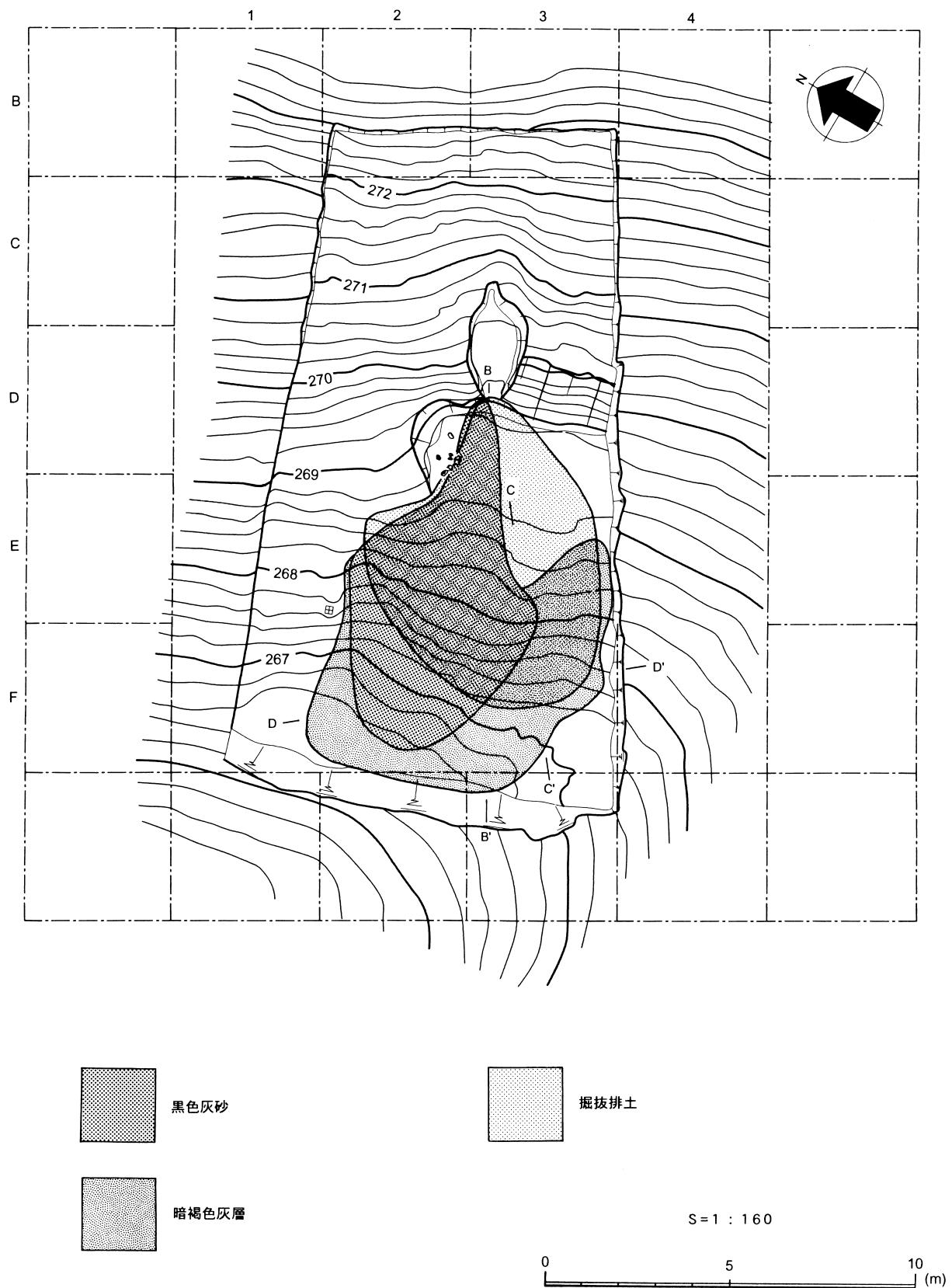
第3節 小結

遺構は、特に切り合いもないため、年代を推定する根拠はない。しかし、窯体の平面プランからは近世の炭焼窯に多い形態であるため、近世の炭焼窯である可能性も考えられた。

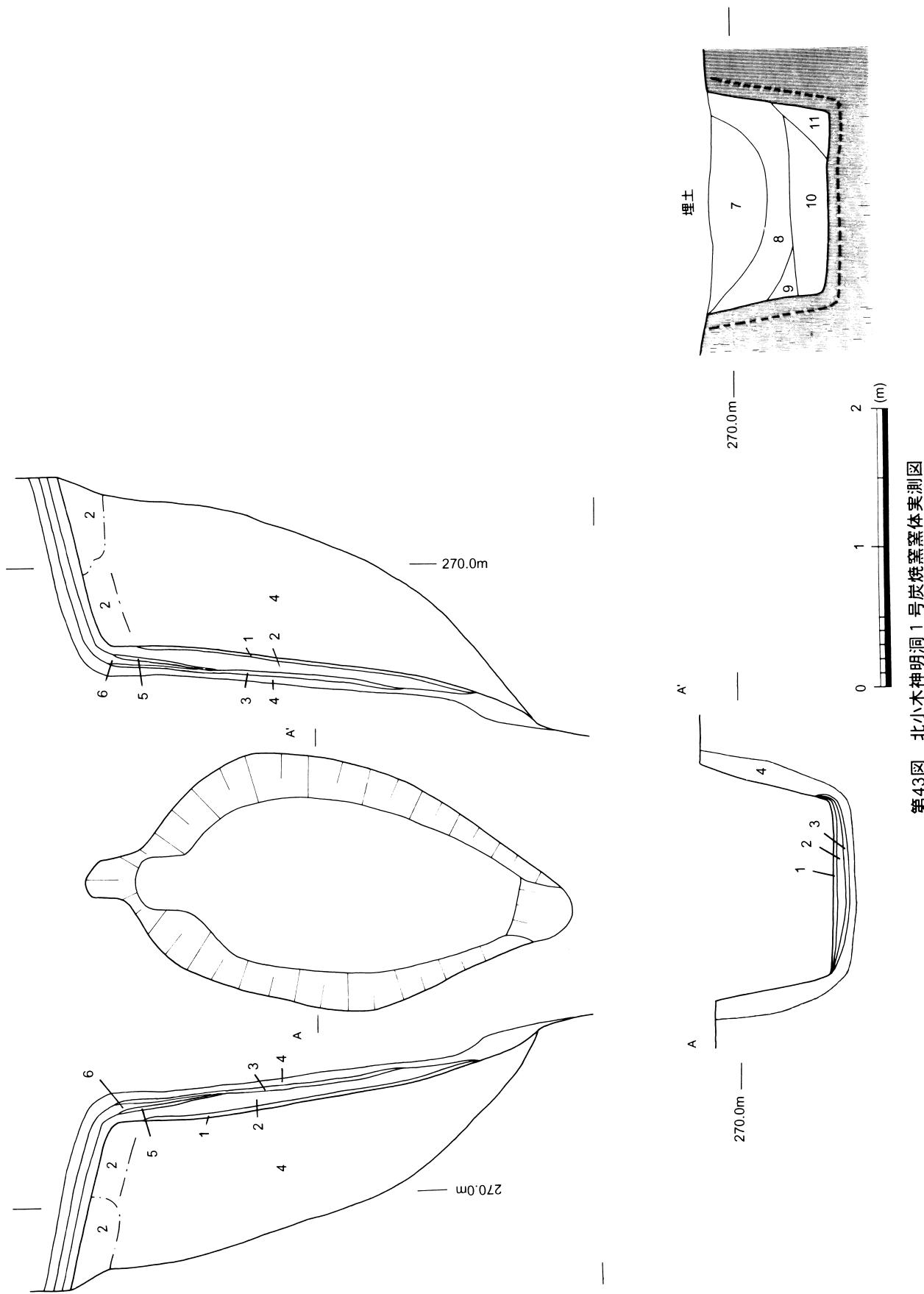
しかし、出土遺物からみると、出土遺物はほとんどが小片であるが中世に属する山茶碗である。そして、口縁まで復元できる個体は1個体しかなかつたため位置づけは難しい。けれど灰原出土の山茶碗はⅢ類およびⅣ類であり、年代的には大畠大洞4号窯期（古）～（新）に位置づけられる。これら



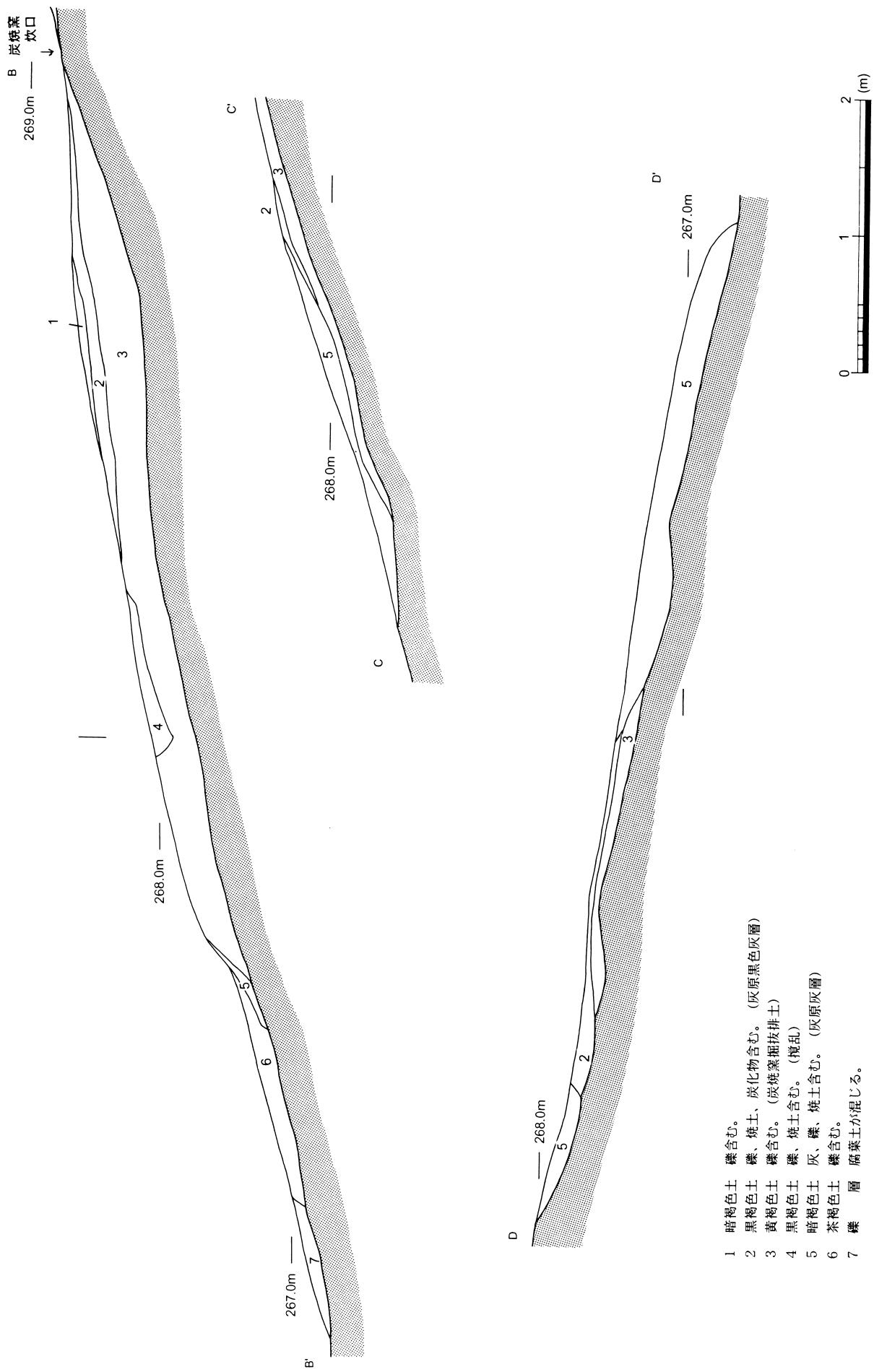
第41図 北小木神明洞1号炭焼窯調査前地形図 (S=1:200)



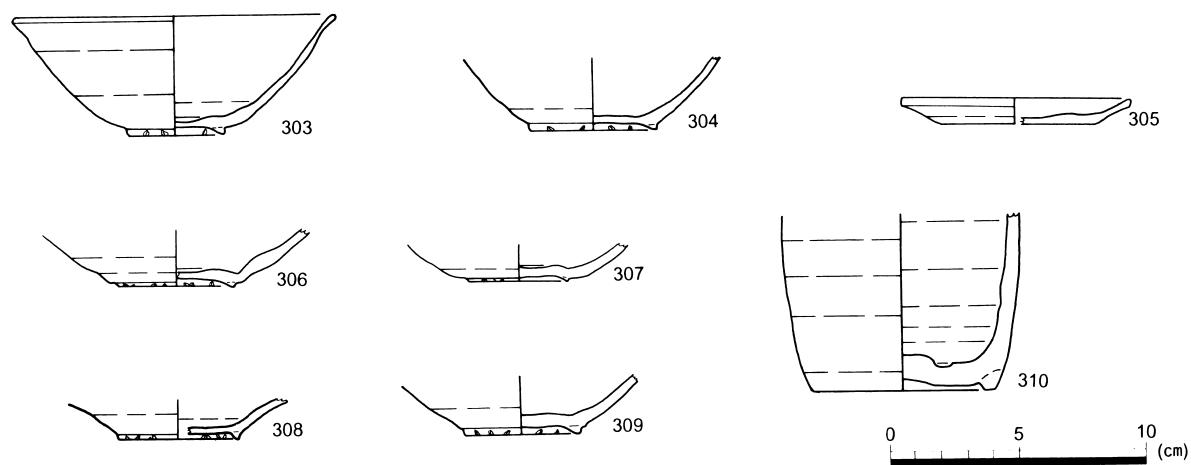
第42図 北小木神明洞1号炭焼窯全体図 ($S=1:160$)



第43図 北小木神明洞1号炭焼窯実測図



第44図 北小木神明洞1号炭焼窯掘抜井土・灰原セクション



第45図 北小木神明洞1号炭焼窯出土遺物

の遺物は黒色灰層下層で、なおかつ掘抜排土直上から出土している。このことから窯の操業直後に廃棄されたものと思われる。したがって、炭焼窯の操業時期も大畠大洞4号窯期（古）～（新）に位置づけられる。窯体の平面プランから考えられる位置づけとは矛盾するが、ここではとりあえず灰原出土の山茶碗の年代観を採用する。ただし、炭焼窯全体の年代観については、今後の炭焼窯の発掘成果に期待したい。

（澤村雄一郎）

第7章 自然科学分析

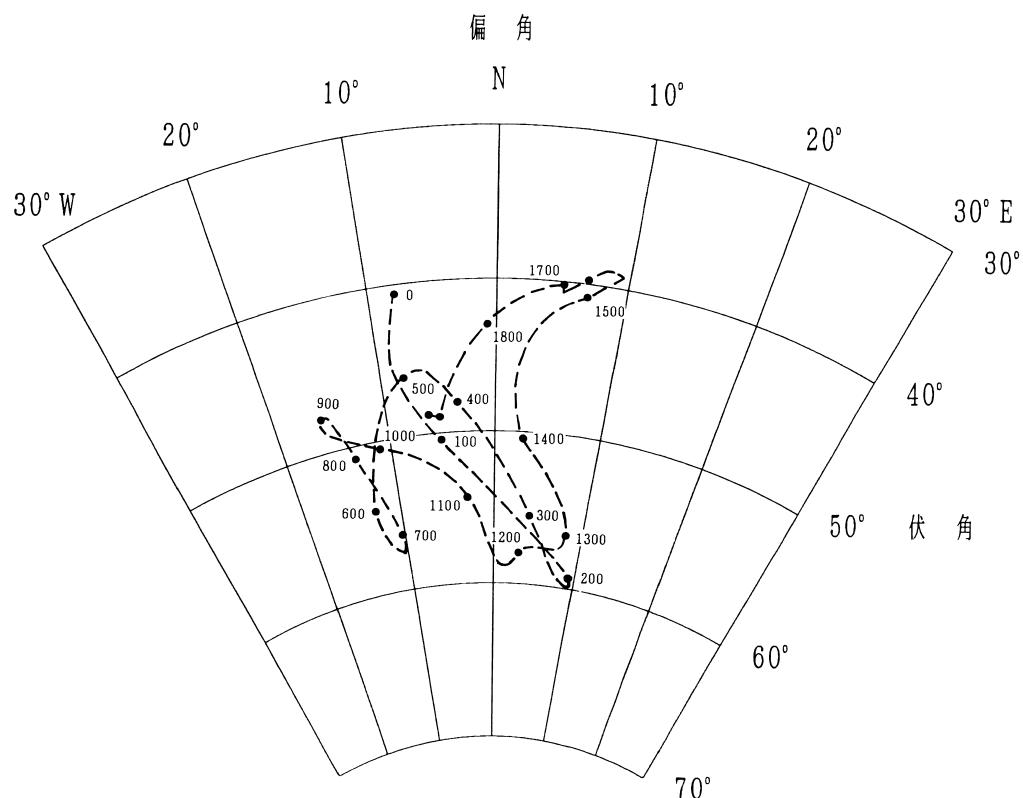
熱残留磁化測定による焼成年代推定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

北小木古窯群は、14世紀前半の大谷洞29号山茶碗窯、13世紀前半～後半の大谷洞30号山茶碗窯、13世紀中頃～後半の大沢洞13号山茶碗窯、13世紀後半～14世紀前半の大谷洞28号山茶碗窯、14世紀後半と思われる神明洞1号炭焼窯が検出されている。

ここでは、これら山茶碗窯4基と炭焼窯1基について、その床面焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から焼成年代を推定する。



第46図 Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からはずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在の北小木古窯群付近の偏角は約6.89°、伏角は約48.62°、全磁力（水平分力）は約30766.9(nT)である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁石になれる鉱物）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977, Shibuya, 1980; 第46図）。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodoほか, 1993）。

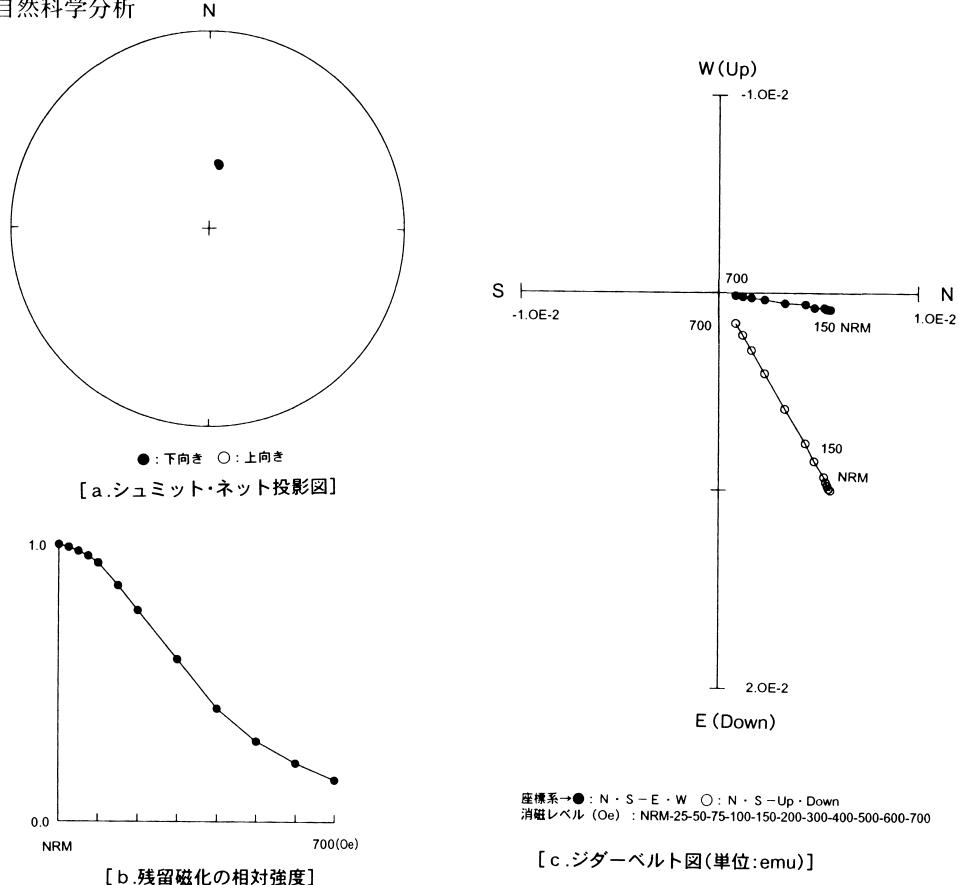
年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較すると、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている遺跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、¹⁴C年代測定法などの他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、土器等の年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定および結果

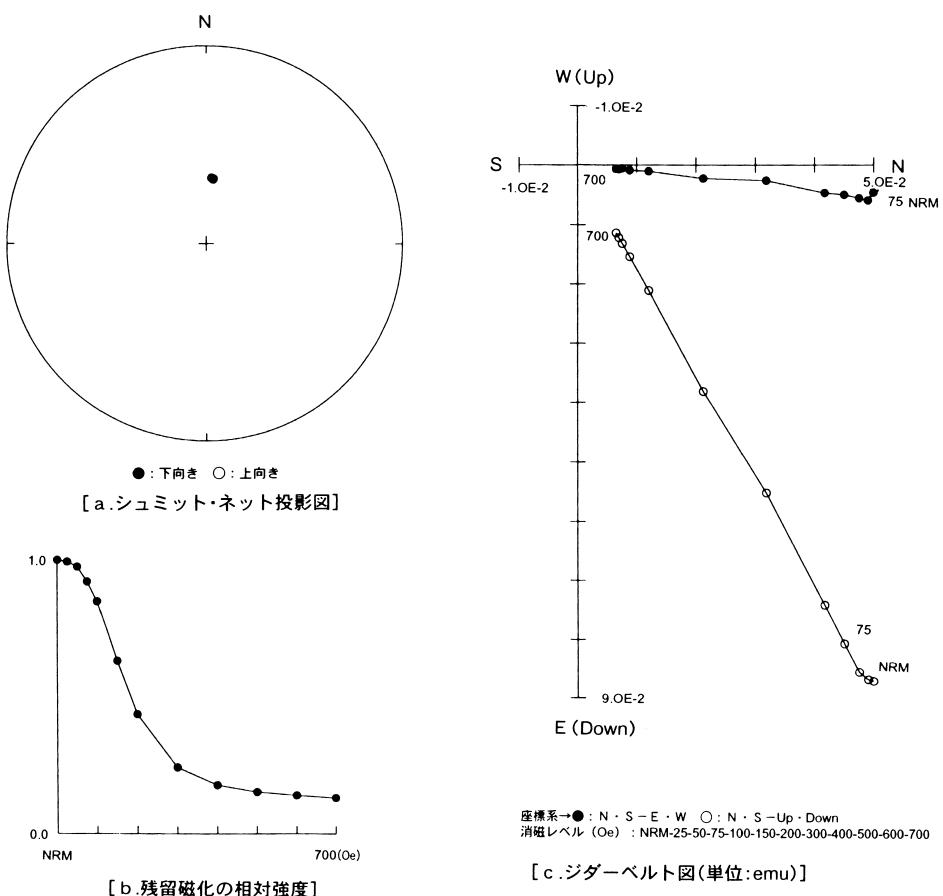
考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成時の年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認・検討するために、段階交流消磁も行った。

a. 測定用試料の採取および整形

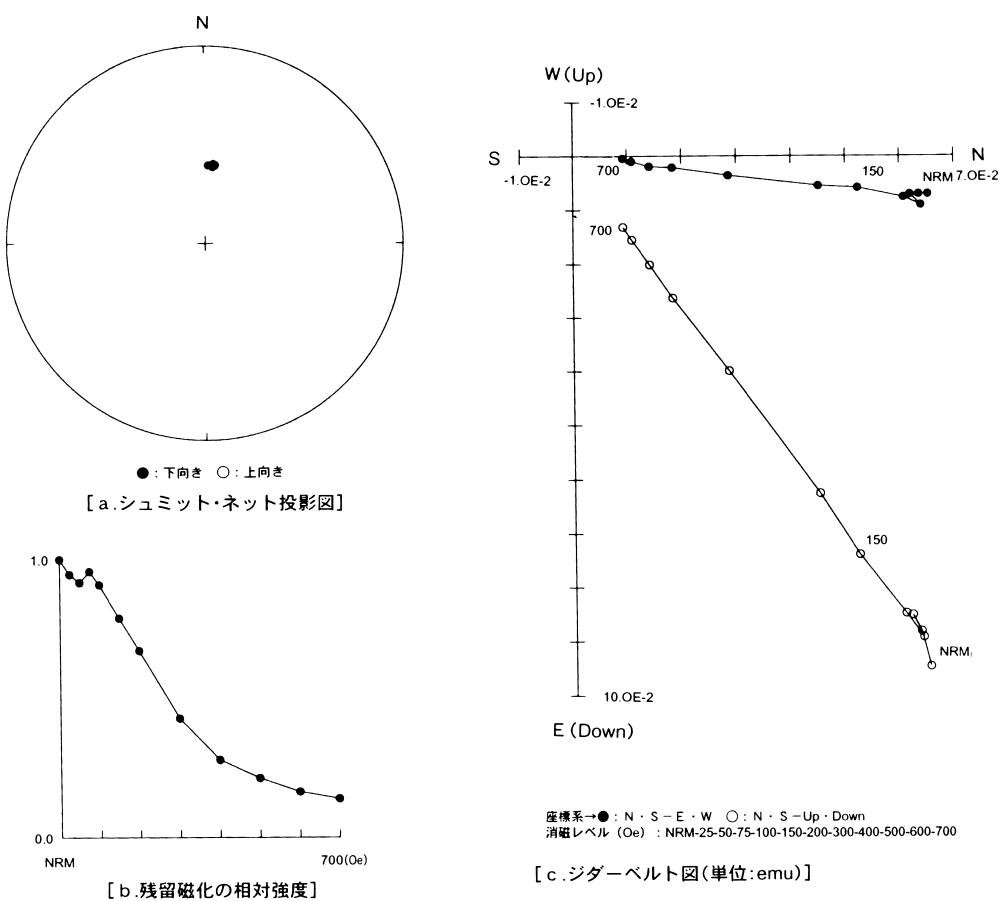
熱残留磁化測定を行った試料は、窯床面の焼土である。試料は、焼土面において、①一辺約4cmの



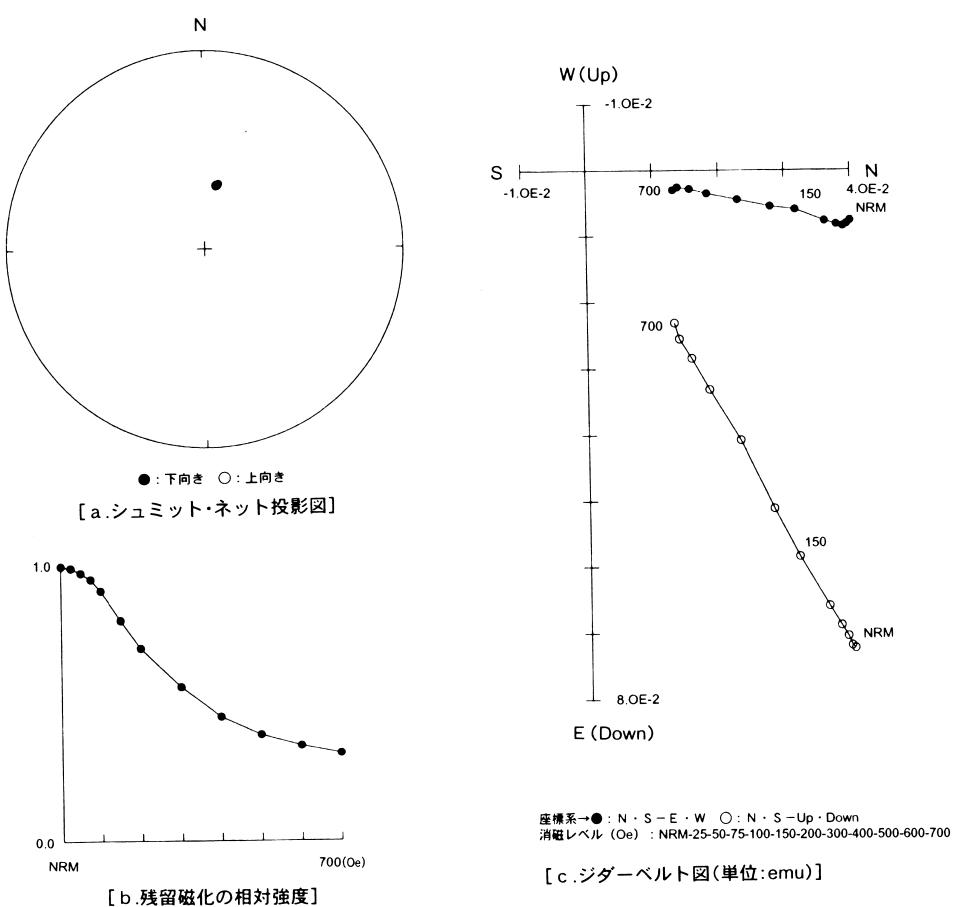
第47図 大谷洞29号窯床面焼土No.12の段階交流消磁測定結果



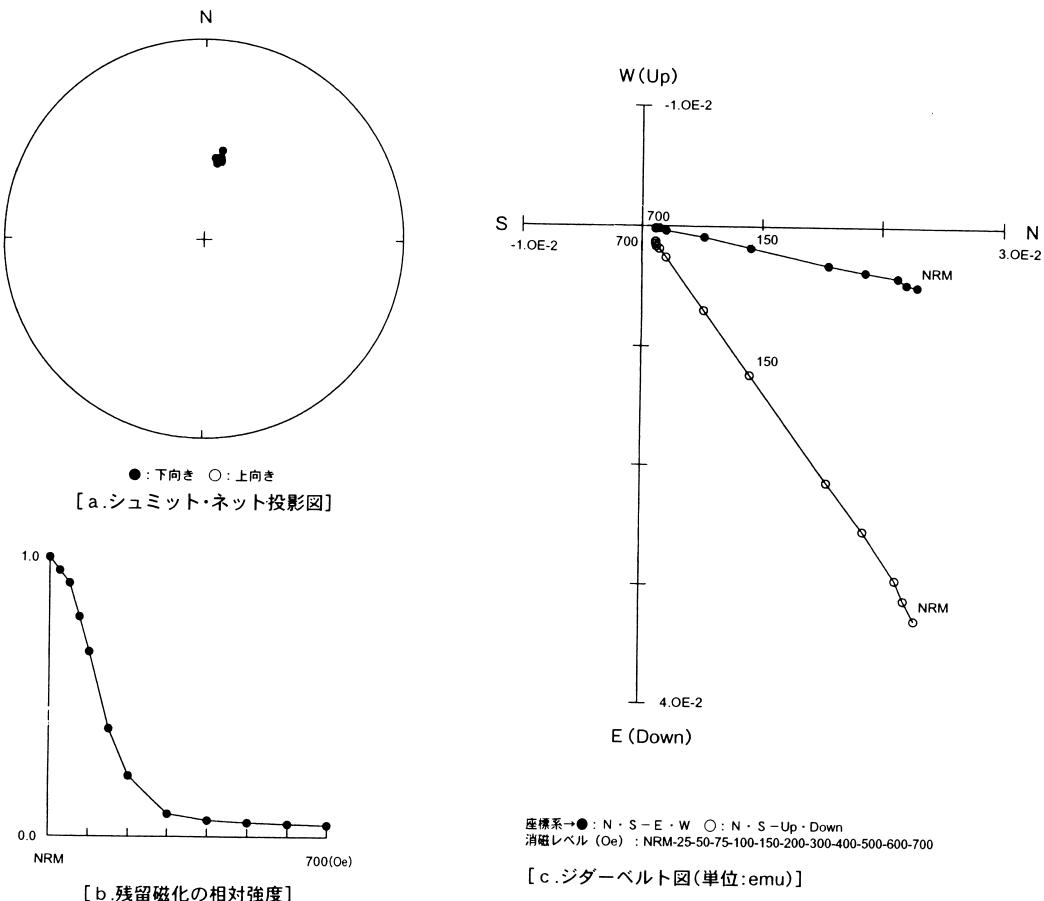
第48図 大谷洞30号窯床面焼土No.05の段階交流消磁測定結果



第49図 大沢13号窯床面焼土No.03の段階交流消磁測定結果



第50図 大谷洞28号窯床面焼土No.11の段階交流消磁測定結果



第51図 神明洞1号炭焼窯床面焼土No.04の段階交流消磁測定結果

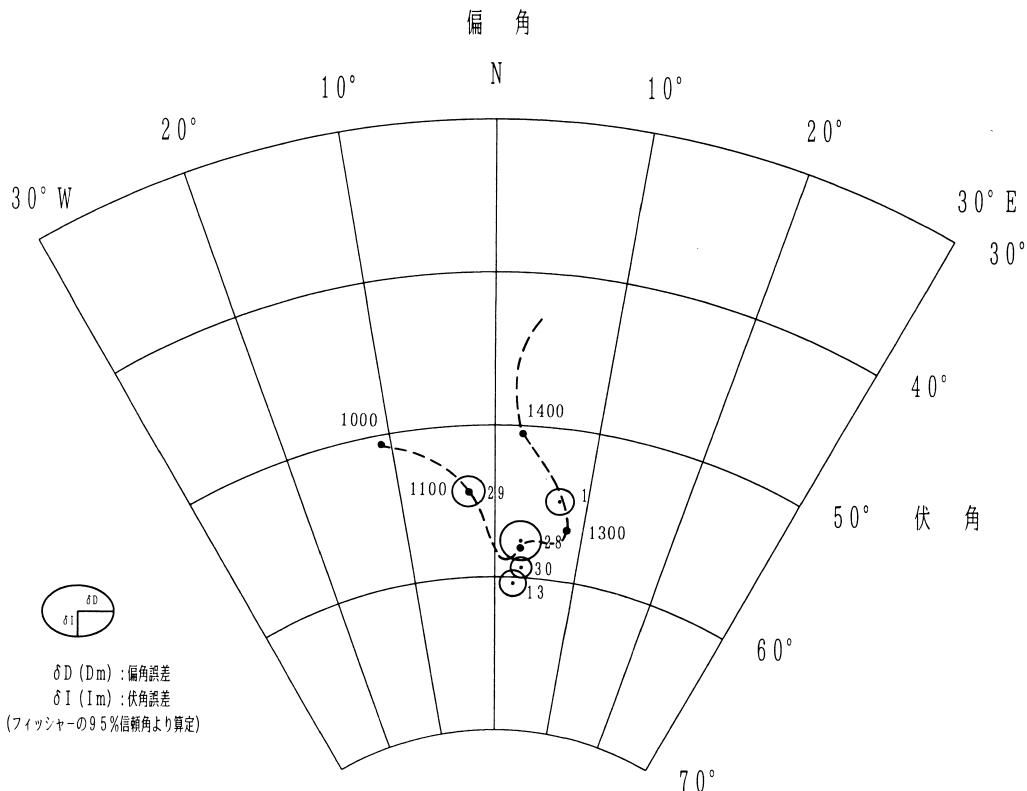
立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm・厚さ2.5cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、大谷洞29号窯12個、大谷洞30号窯14個、大沢13号窯13個、大谷洞28号窯12個、神明洞1号炭焼窯13個である。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算

試料の熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：株夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（大谷洞

表7 窯焼土の残留磁化測定と統計計算結果

遺構	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 (x10E-2)	備考	統計処理項目	統計値
大谷洞29号窯 (150 Oe消磁)	01	1.5	52.6	15.700		試料数 (n)	12
	02	1.5	52.5	15.000		平均偏角、Dm (° E)	4.70
	03	6.6	53.0	12.200		平均伏角、Im (°)	54.36
	04	4.6	55.5	12.200		誤差角(δ D) (°)	1.72
	05	3.3	56.3	11.600		誤差角(δ I) (°)	1.00
	06	2.6	53.7	15.600		信頼度係数 (k)	1875.87
	07	3.0	54.1	7.230		平均磁化強度 (x10E-2 emu)	10.87
	08	5.4	54.6	9.350			
	09	5.8	55.2	8.880			
	10	8.8	54.1	7.170			
	11	7.2	56.0	6.450			
	12	6.4	54.5	9.080	段階交流消磁		
	13						
	14						
大谷洞30号窯 (150 Oe消磁)	01	11.2	59.0	5.150		試料数 (n)	14
	02	9.9	59.2	5.330		平均偏角、Dm (° E)	10.18
	03	8.6	59.6	8.900		平均伏角、Im (°)	59.34
	04	15.0	59.0	4.500		誤差角(δ D) (°)	1.31
	05	10.6	61.0	6.670	段階交流消磁	誤差角(δ I) (°)	0.67
	06	7.3	58.9	9.260		信頼度係数 (k)	3538.14
	07	11.3	60.5	5.340		平均磁化強度 (x10E-2 emu)	6.70
	08	10.8	60.6	4.630			
	09	10.2	59.0	7.460			
	10	8.8	58.4	8.150			
	11	7.5	58.4	7.810			
	12	11.2	60.1	7.340			
	13	11.0	59.2	5.370			
	14	9.3	57.7	7.820			
大沢13号窯 (150 Oe消磁)	01	9.6	59.0	2.280		試料数 (n)	12
	02	8.3	59.2	1.080		平均偏角、Dm (° E)	9.24
	03	8.7	60.4	1.100	段階交流消磁	平均伏角、Im (°)	60.39
	04	9.3	60.6	0.647		誤差角(δ D) (°)	1.70
	05	9.2	60.4	0.794		誤差角(δ I) (°)	0.84
	06	7.6	60.3	0.549		信頼度係数 (k)	2697.07
	07	8.9	63.2	0.390		平均磁化強度 (x10E-2 emu)	1.01
	08	10.8	60.2	0.895			
	09	8.7	61.4	1.620			
	10	10.5	61.4	2.040			
	11	10.4	61.3	0.675			
	12	-10.5	52.8	1.770	計算から除外		
	13	8.9	57.2	4.920			
	14						
大谷洞28号窯 (75 Oe消磁)	01	10.0	58.0	0.244		試料数 (n)	11
	02	11.1	56.6	0.224		平均偏角、Dm (° E)	9.94
	03	10.2	56.3	2.180		平均伏角、Im (°)	57.59
	04	13.6	56.5	1.470		誤差角(δ D) (°)	2.41
	05	9.0	58.6	0.700		誤差角(δ I) (°)	1.29
	06	10.4	60.3	1.480		信頼度係数 (k)	1248.97
	07	10.1	57.6	3.760		平均磁化強度 (x10E-2 emu)	2.21
	08	5.5	55.7	0.694			
	09	13.4	58.3	2.110			
	10	9.6	54.6	2.250			
	11	6.3	60.7	9.250	段階交流消磁		
	12	-0.2	54.8	1.840	計算から除外		
	13						
	14						
神明洞1号炭焼窯 (75 Oe消磁)	01	14.1	54.9	4.380		試料数 (n)	13
	02	14.3	54.8	3.170		平均偏角、Dm (° E)	13.91
	03	14.5	54.1	4.280		平均伏角、Im (°)	54.82
	04	11.4	53.3	3.170	段階交流消磁	誤差角(δ D) (°)	1.48
	05	13.4	54.7	3.270		誤差角(δ I) (°)	0.85
	06	11.1	56.5	4.400		信頼度係数 (k)	2391.88
	07	13.8	56.0	4.770		平均磁化強度 (x10E-2 emu)	3.35
	08	13.9	53.2	2.840			
	09	15.5	55.3	2.970			
	10	16.7	54.0	2.650			
	11	14.5	53.6	3.860			
	12	15.6	54.2	3.830			
	13	11.7	57.9	2.090			
	14						



第52図 各窯跡の残留磁化方向と永年変化曲線の一部 (Shibuya, 1980)

29号窯がNo.12、大谷洞30号窯がNo.05、大沢13号窯がNo.03、大谷洞28号窯がNo.11、神明洞1号炭焼窯がNo.04）について交流消磁装置（DEM-8601：（株）夏原技研製）を用いて段階的に消磁し、その都度スピナーマ力計を用いて残留磁化を測定した（第47～51図）。その結果、いずれの試料の磁化強度は最大 10^{-2} emu前後と強い。また、磁化保持力は150 Oe（エルステッド）においてNRM（自然残留磁化）の約79%（大谷洞29号窯）、約81%（大谷洞30号窯）、約85%（大沢13号窯がNo.03）、約63%（大谷洞28号窯がNo.11）、約38%（神明洞1号炭焼窯がNo.04）であり（b. 残留磁化の相対強度）、神明洞1号炭焼窯No.04が低いものの他の試料は保持力が強い。磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している（c. ジダーベルト図）。

以上のことから、150 Oeで消磁した際の残留磁化方向は、焼成時の磁化方向として問題ない。そこで、これら以外の段階交流消磁を行っていない試料についても、150 Oe消磁した後に残留磁化を測定し、各試料の磁化方向とした。

こうした複数試料の測定から得た偏角（D_i）、伏角（I_i）を用いて、Fisher (1953) の統計法により平均値（D_m、I_m）を求めた（表7）。計算した結果は、いずれも誤差は小さく、信頼度係数（k）は大谷洞29号窯が1875.87、大谷洞30号窯が3538.14、大沢13号窯が2697.07、大谷洞28号窯が1248.97、神

明洞1号炭焼窯が2391.88といずれも高い数値を示している。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した 6.89° Wを使用した。その結果は、Shibuya (1980)による地磁気変化曲線とともにプロットした(第52図)。図中測定点に示した楕円は、Fisher (1953)の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

c. 炉跡の焼成年代

第52図には、Shibuya (1980)による地磁気永年変化曲線の一部とともに各窯焼土の磁化方向を示した。これによると、各古窯の磁化方向は、大谷洞29号窯が1,100年前後、大谷洞30号窯や大沢13号窯あるいは大谷洞28号窯が1,200年前後の永年変化曲線の近くに位置し、神明洞1号炭焼窯が永年変化曲線の1,300~1,400年に近い位置にある。

測定した磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動した場合、大谷洞29号窯が $1,105 \pm 15$ 年、大谷洞30号窯が $1,190 \pm 10$ 年、大沢13号窯が $1,180 \pm 25$ 年、大谷洞28号窯が $1,210^{+35}_{-15}$ 年、神明洞1号炭焼窯が $1,325 \pm 12$ 年と推定される。なお、いずれの古窯磁化方向も、変化曲線の100~300年に近い位置にあるが、この曲線に対する推定年代値は省略した。

表8. 考古地磁気年代推定

遺構	出土遺物による年代	考古地磁気推定年代 (A.D.)
大谷洞29号窯	14世紀前半	$1,105 \pm 15$ 年
大谷洞30号窯	13世紀前半~後半	$1,190 \pm 10$ 年
大沢13号窯	13世紀中頃~後半	$1,180 \pm 25$ 年
大谷洞28号窯	13世紀後半~14世紀前半	$1,210^{+35}_{-15}$ 年
神明洞1号炭焼窯	14世紀後半	$1,325 \pm 12$ 年

引用文献

- Fisher, R.A. (1953) Disparison on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, 15, 200-203
- Hyodo M., Itota C. and Yasukawa K. (1993) Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., 45, 669-696
- 理科年表 (1993) 国立天文台編, 丸善, 952p
- Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p

第8章 まとめ

本発掘調査の成果を出土遺物を中心に述べることとする。本発掘調査の対象である4基の山茶碗焼成古窯跡から数多くの山茶碗が出土しているが、これらは器形、法量などからI～IV類に分類することができる。この分類は、田口昭二氏らによる「美濃窯山茶碗編年」の「白土原1号窯期」から「大畠大洞4号窯期（新）」にかけての時期に比定される。以下にI～IV類の概要を述べ、これらの分析から各古窯跡の特に年代的な位置づけについて述べたいと思う。

第1節 各類型の概要（表9）

本発掘調査においては、碗、皿、蓋（窯道具）などが数多く確認されている。ここでは特殊な器形をのぞき、通有の器形である碗、皿、蓋の型式について述べることとする。なお、IV類については碗、皿のみしか出土していないので、蓋については述べていない。

I類（白土原1号窯期）

碗 口径129～148mm、器高50～63mm、高台径50～66mm、口台比（口径と高台径の比率）2.2～2.7を測る。おおむね口径140mm、器高55mm、高台径57mm、口台比2.4程度である。

全体に深い造りで、器壁はかなり厚い。なかでも胴部下半から底部にかけて非常に厚くつくられている。器形は胴部に張りをもつが、口縁部のすぐ下部に非常にはっきりした「くびれ」をもつのが特徴的である。口縁端部はやや外反する。胴部外面には轆轤痕による凹凸が非常に顕著にみられる。高台は断面三角形の付高台である。内面胴部の調整は鏝を当てるにより平滑に仕上げられている。また内面底部から胴部へと立ち上がる境は明確な稜をもってくびれるものと稜があまりはっきりしないものとにわかれれる。静止指撫で痕、藁状の植物圧痕は認められるものと認められないものがあるが、その比率は半々ぐらい（実測個体においては、指撫で痕は45%、植物圧痕は58%の個体に認められた）ようである。高台には粉殻痕が認められる。なお、内面にも粉殻痕がみられるものもある。

小型碗 口径113～132mm、器高49～50mm、高台径47～60mm、口台比2.2～2.4を測る。おおむね口径120mm、器高50mm、高台径53mm、口台比2.3程度である。

I類の小型碗である。器形的にはほぼI類の碗と同様で、口縁部のすぐ下部にはっきりした「くびれ」をもつ。静止指撫で痕は認められるものと認められないものがあるが、その比率は半々ぐらい（実測個体において50%の個体に認められる）、藁状の植物圧痕は認められないものの方が多い（実測個体において25%の個体に認められた）ようである。高台には粉殻痕が認められる。

皿 口径76～94mm、器高17～22mm、底径37～52mm、口径と底径の比率（口底比）1.7～2.2を測る。おおむね口径83mm、器高18mm、高台径45mm、口台比1.8程度である。

全体に深い造りで、器壁は厚くつくられている。胴部中央付近に非常に明瞭な稜をもつ、この稜を境にして胴部下半と上半はともにくびれた器形を呈する。口縁端部はやや外反する。底部内面はほぼ平坦に仕上げられている。多くの個体の底部内面中央に静止指撫で痕が認められる（実測個体で77%）。

底部外面には回転糸切り痕は認められるが、藁状の植物圧痕は半数以上の個体（実測個体で63%）に認められる。なお、I類には底径が35mm程度の小型の皿が存在する。

蓋 全形が確認しうる個体は2点（81、120）のみであるが、大型品（81）と小型品（120）がある。81：口径147mm、器高45mm、天井部径58mm、口径と天井部径の比率（口天比）2.5。120：口径134mm、器高31mm、天井部径50mm、口天比2.7。大型品、小型品ともに割合と深い造りで、器壁は厚くつくられている。器形は、胴部下半で一旦くびれ、胴部中央に強い張りをもつ。碗と同様に口縁部のすぐ下部に非常にはっきりした「くびれ」をもつ。これは、碗と蓋とが同一の成形技法によって製作されていることを示す。口縁端部は外反し、非常にシャープに仕上げられている。胴部外面には轆轤痕による凹凸が顕著にみられる。静止指撫で痕、藁状の植物圧痕は認められない（実測個体でともに0%）。粉殻痕は認められない。なお、印花碗（80）は蓋I類として焼成されている。

II類（明和1号窯期）

碗 口径128～155mm、器高51～69mm、高台径46～68mm、口台比2.1～3.0を測る。おおむね口径138mm、器高57mm、高台径55mm、口台比2.5程度である。

深い造りであるが、器壁は割合薄くつくられている。器形は底部から比較的まっすぐに立ち上がるものが多い。口縁端部はやや外反する。胴部外面には轆轤痕による凹凸が顕著にみられる。高台は断面三角形の付高台である。内面胴部の調整は鎌を当てることにより平滑に仕上げられている。また内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむものが多い。静止指撫で痕はほとんどすべての個体（実測個体で97%）に、藁状の植物圧痕は多くの個体（実測個体で77%）に認められる。高台には粉殻痕が認められる。

小型碗 口径104～128mm、器高43～55mm、高台径42～52mm、口台比2.3～2.8を測る。おおむね口径116mm、器高48mm、高台径47mm、口台比2.4程度である。

II類の小型碗である。器形的にはほぼII類の碗と同様である。静止指撫で痕はほぼすべての個体（実測個体で100%）に、藁状の植物圧痕は多くの個体（実測個体で85%）に認められる。高台には粉殻痕が認められる。

皿 口径71～86mm、器高11～20mm、底径39～60mm、口底比1.4～2.1を測る。おおむね口径81mm、器高14mm、高台径46mm、口台比1.7程度である。

I類の皿と比較してやや浅い造りで、器壁はやや厚くつくられている。器形は、底部から胴部が直線的に立ち上がるものと、I類同様中央付近に稜をもつものにわかれ。この稜は、I類ほど明瞭ではなく、緩やかに屈曲する。直線的に立ち上がるものの口縁端部はやや外反する。一方胴部中央に稜をもつものは、口縁端部はほぼまっすぐに成形される。内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむものがある。これらは底部内面がやや盛り上がった感じがする。静止指撫で痕はほぼすべての個体（実測個体で97%）に、藁状の植物圧痕は多くの個体（実測個体で84%）に認められる。

蓋 口径141～156mm、器高41～55mm、天井部径44～66mm、口天比2.5～3.5。おおむね口径150mm、器高45mm、天井部径55mm、口天比2.7程度である。割合深い造りで、器壁は薄くつくられている。器形は、胴部下半がやや張りで、胴部中央で大きくくびれ、口縁部付近でさらにくびれる。口縁端部は外反し、非常にシャープに仕上げられている。胴部外面には轆轤痕による凹凸が顕著にみられる。静

表9 山茶碗の型式

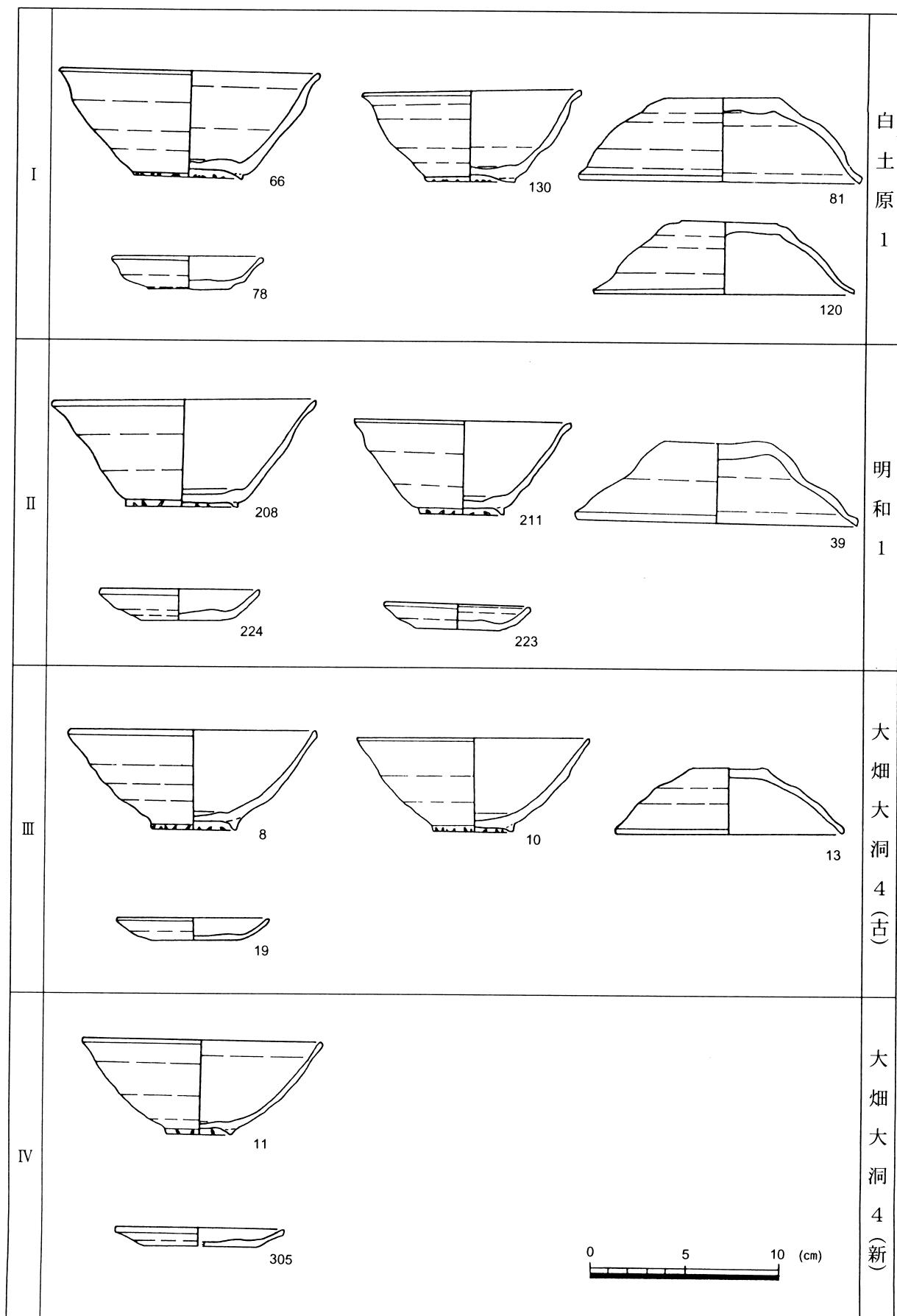


表10 美濃窯山茶碗編年表（多治見市教委1993より一部変更）

西暦	時代	南部系山茶碗 (藤澤・1990)	古瀬戸様式 (藤澤・1991)	美濃窯山茶碗 (試案)	北小木古窯跡群 大沢古窯跡群
900	平			白　　壺	
1000		1型式			
	安	2型式			
1100		3型式		1 西坂1	
		4型式		2 谷迫間2	
1200		5型式	I	3 浅間窯下1	
	鎌	6型式	II	4 丸石3	
	倉	7型式	III	5 窯洞1	
1300		8型式	IV	6 白土原1	
	南北朝	9型式	I	7 明和1	大谷洞30
			II		大沢13
			III		大谷洞28
			IV	大畠大洞4 (前半)	大谷洞29
1400	室	10型式	I	大畠大洞4 (後半)	神明洞1炭焼
	町	11型式	II	9 大洞東1	
			III		
1500			IV(古)	10 脇之島3	
			IV(新)	11 生田2	
			大窯	大窯	

止指撫で痕は半数以上の個体（実測個体で64%）に認められる。藁状の植物圧痕は3分の1程度の個体（実測個体で30%）に認められる。粉殻痕は認められない。オロシ碗の多くが蓋として焼成されている。

III類（大畑大洞4号窯期（古））

碗 口径129～141mm、器高42～56mm、高台径43～53mm、口台比2.5～3.1を測る。おおむね口径136mm、器高51mm、高台径48mm、口台比2.5程度である。I・II類と比較して全体に浅く、また器壁は薄く造られている。器形は胴部下半がくびれ、胴部中央は張りをもつが、中央部から口縁部に向かってわりと直線的に立ち上がる。口縁端部はやや内彎する。胴部外面には轆轤痕による凹凸がみられるが、I・II類と比較するとさほど顕著ではない。高台は断面三角形の付高台である。内面胴部の調整は鏝を当てることにより平滑に仕上げられている。また内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむ。静止指撫で痕は多くの個体（実測個体で87%）に、藁状の植物圧痕は半数以上の個体（実測個体で66%）に認められる。また、高台には粉殻痕が認められる。

皿 口径78～84mm、器高11～15mm、底径44～48mm、口底比1.7～1.8を測る。おおむね口径81mm、器高13mm、高台径46mm、口台比1.7程度である。

全体に浅い造りで、器壁は薄くつくられている。器形は、底部からわりと直線的に立ち上がる。口縁端部はやや内彎する。また内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむ。これにより底部内面がやや盛り上がった感じがする。静止指撫で痕、藁状の植物圧痕はともにほぼすべての個体（実測個体でともに100%）に認められる。

蓋 口径118～138mm、器高31～52mm、天井部径41～50mm、口天比2.4～2.9。おおむね口径126mm、器高37mm、天井部径48mm、口天比2.6程度である。

浅い造りで、器壁は非常に薄くつくられている。器形は、胴部下半でくびれ、胴部中央はやや張る。口縁端部はやや内反し、非常にシャープに仕上げられている。胴部外面には轆轤痕による凹凸が顕著にみられる。静止指撫で痕は3分の1程度の個体（実測個体で33%）に認められる。藁状の植物圧痕は2割程度の個体（実測個体で17%）に認められる。粉殻痕は認められない。

オロシ碗の多くが蓋として焼成されている。

IV類（大畑大洞4号窯期（新））

碗 全形が確認しうる個体は2点（11、303）のみである。11：口径126mm、器高51mm、高台径35mm、口台比3.4。303：口径126mm、器高47mm、高台径37mm、口台比3.4。を測る。

口径126mm、器高47～50mm、高台径35～37mm程度。口径は130～140mm程度。口台比3.5：1前後である。最も浅く、器壁はI～IV類のうち薄い。器形は、胴部が底部から弧状に立ち上がり、胴部下半が張る。口縁端部はやや外反する。胴部外面には轆轤痕による凹凸がみられるが、III類同様さほど顕著ではない。高台は断面三角形の付高台である。内面胴部の調整は鏝を当てることにより平滑に仕上げられている。また内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむ。ほぼすべての個体（実測個体で100%－2個体のみ）の底部内面中央に1～2回の静止指撫で痕、底部外面には回転糸切り痕および藁状の植物圧痕、高台には粉殻痕が認められる。

皿 1点（305）のみの出土である。305：口径89mm、器高10mm、底径56mm、口底比1.6を測る。全体に浅い造りで、器壁は非常に薄くつくられている。器形は、底部からわりと直線的に立ち上がる。口縁端部はやや外反する。また内面底部から胴部へと立ち上がる境の部分が輪状にくぼむ。これにより底部内面がやや盛り上がった感じがする。静止指撫で痕、藁状の植物圧痕はともに認められる。

第2節 窯 の 時 期

主に出土遺物の検討から、各窯の時期について述べることとする。北小木大谷洞29号窯は、1点のみIV類に比定される碗が出土しているが、窯内遺物の大部分がIII類が主体をなすため、最終操業時期は「大畑大洞4号窯期（古）（～（新））」と考えられる。北小木大谷洞30号窯および大沢13号窯の最終操業時期は「明和1号窯期」と考えられる。ただし30号窯に付帯すると考えられる土坑よりI類の山茶碗が出土しているため、操業開始時期は「白土原1号窯期」もしくはそれ以前まで遡る可能性がある。北小木大谷洞28号窯は、II類とIII類の中間的な形態を示しているため、最終操業時期は「明和1号窯期」から「大畑大洞4号窯期（古）」にかけての時期に比定される。北小木神明洞1号炭焼窯は、灰原よりIV類の遺物が出土していることから、「大畑大洞4号窯期（新）」に比定されると考えられる。

（澤村雄一郎）

参考文献

- 田口昭二1983『美濃焼』(考古学ライブラリー17)。
- 藤沢良祐1990「瀬戸地方の北部系山茶碗」『尾呂』(瀬戸市教育委員会)。
- 多治見市教育委員会1991『北小木古窯跡群発掘調査報告書』。
- 多治見市教育委員会1993『小名田小滝古窯跡群』。
- 藤沢良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3(三重県埋蔵文化財センター)。

表11 遺物観察表

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		糊殻		ユビナデ	植物圧痕	類型
													内	外	内	外			
1	KO	29号窯	E3	前庭部最下層	碗	132	50	52	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	III類
2	KO	29号窯	E3	4層	碗	133	53	51	2.6	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	○	III類
3	KO	29号窯	E3	4層	碗	140	50	51	2.7	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	III類
4	KO	29号窯	E3	前庭部最下層	碗	141	50	52	2.7	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	III類
5	KO	29号窯		埋土最下層	碗	137	50	48	2.9	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	III類
6	KO	29号窯			碗	132	51	46	2.9	密	灰白色	良	○	○	-	○	○	○	III類
7	KO	29号窯			碗	138	55	48	2.9	密	黄灰白色	不良	○	-	-	○	○	○	III類
8	KO	29号窯	E3	4層	碗	129	54	45	2.9	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	III類(小型)
9	KO	29号窯	E3	前庭部最下層	碗	122	49	46	2.7	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	III類(小型)
10	KO	29号窯	E3	前庭部最下層	碗	122	51	44	2.8	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	III類(小型)
11	KO	29号窯	F3	前庭部最下層	碗	126	51	35	3.4	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	IV類
12	KO	29号窯	E3	4層	碗	135	42	43	3.1	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	-	III類
13	KO	29号窯	E3	最下層	蓋	118	35	41	2.9	密	黄灰白色	不良	-	○	-	-	-	-	III類
14	KO	29号窯	E3	最下層	蓋	122	31	49	2.5	密	黄灰白色	不良	-	○	-	-	-	-	III類
15	KO	29号窯	E3	最下層	蓋	120	36	50	2.4	密	黄灰白色	不良	-	○	-	-	-	-	III類
16	KO	29号窯			オロシ碗		58			密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	
17	KO	29号窯	D3	窯内上層	オロシ碗		48			密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
18	KO	29号窯	F3	前庭部最下層	皿	84	11	48	1.8	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	III類
19	KO	29号窯	F3	前庭部最下層	皿	81	12	45	1.8	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	III類
20	KO	29号窯	E3	4層	皿	78	13	44	1.8	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	III類
21	KO	29号窯	F3	前庭部最下層	皿	83	13	45	1.8	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○	○	III類
22	KO	29号窯		最下層	皿	81	14	46	1.8	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○	○	III類
23	KO	29号窯	E3	4層	皿	1	18	42	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○	I類
24	KO	29号窯	E3	前庭部最下層	碗	129	50	51	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	-	-	I類
26	KO	30号窯		1~2層	碗	145	59	59	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	-	II類
27	KO	30号窯		最下層	碗	132	54	55	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
28	KO	30号窯		最下層	碗	145	56	61	2.4	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	○	II類
29	KO	30号窯			碗	144	58	58	2.5	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	-	II類
30	KO	30号窯	G4	3層	碗	137	56	55	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	II類
31	KO	30号窯	G4	3層	碗	136	55	50	2.7	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	III類
32	KO	30号窯	G4	3層	碗	139	55	48	2.8	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	III類
33	KO	30号窯	G4		碗	132	52	48	2.8	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○	○	○	III類
34	KO	30号窯			碗	139	56	52	2.7	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	-	III類
35	KO	30号窯		最下層	蓋	156	52	65	2.4	密	灰白色	良	-	○	-	○	○	-	III類
36	KO	30号窯		最下層	蓋	152	50	58	2.6	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	II類
37	KO	30号窯	G4	3層	蓋	138	52	50	2.8	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	III類
38	KO	30号窯			蓋	153	41	66	2.3	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	II類
39	KO	30号窯		埋土上層	蓋	148	44	57	2.6	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	II類
40	KO	30号窯		最下層	蓋	141	42	53	2.7	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	II類

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		糊殼	ユビ ナデ	植物 圧痕	類型
													内	外				
41	KO	30号窯		最下層	皿	80	16	44	1.8	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ ○	II類
42	KO	30号窯		最下層	皿	85	17	41	2.1	密	黄灰白色	不良	○	-	-	-	○ ○	II類
43	KO	30号窯		最下層	皿	83	14	39	2.1	密	灰白色	良	-	-	-	-	○ ○	II類
44	KO	30号窯		最下層	皿	82	14	44	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ ○	II類
45	KO	30号窯		最下層	皿	79	16	41	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ -	II類
46	KO	30号窯		最下層	皿	81	12	40	2.0	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ 不明	II類
47	KO	30号窯		最下層	皿	83	13	43	1.9	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○ ○	II類
48	KO	30号窯		最下層	皿	84	11	41	2.0	密	灰白色	良	○	○	-	-	○ ○	II類
49	KO	30号窯		最下層	皿	81	16	43	1.9	密	灰白色	良	-	○	-	-	○ -	II類
50	KO	30号窯		最下層	皿	84	13	45	1.9	密	灰白色	良	○	○	-	-	○ -	II類
51	KO	30号窯	G4	最下層	蓋			64		密	灰白色	良	-	○	-	-	-	
52	KO	30号窯		最下層	オロシ碗	170				密	灰白色	良	-	○	-	-	-	II類
53	KO	30号窯		埋土下層	オロシ碗	152	42	44	3.5	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	II類
54	KO	30号窯		最下層	オロシ碗	153	43	62	2.5	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	II類
55	KO	30号窯		最下層	オロシ碗	152	43	55	2.8	密	灰白色	良	-	○	-	-	○ -	II類
56	KO	30号窯		最下層	オロシ碗	146	47	49	3.0	密	灰白色	良	-	○	不明	-	不明 不明	II類
57	KO	30号窯		最下層	オロシ碗			60		密	灰白色	良	-	○	-	-	○ -	
58	KO	30号窯		最下層	オロシ碗			57		密	灰白色	良	-	○	-	-	○ -	
59	KO	30号窯	G4	3 1層	オロシ碗			56		密	灰白色	良	-	○	-	-	○ ○	
60	KO	30号窯		最下層	オロシ碗			61		密	灰白色	良	-	○	-	-	-	
61	KO	30号窯		最下層	オロシ碗			66		密	灰白色	良	-	○	-	-	○ -	
63	KO	SK1			碗	144	60	60	2.4	密	黄灰白色	不良	-	-	○ ○	-	○	I類
64	KO	SK1			碗	147	52	60	2.5	密	灰白色	良	○	○	○ ○	○ ○	-	I類
65	KO	SK1			碗	140	60	60	2.3	密	灰白色	良	-	○	○ ○	○ ○	-	I類
66	KO	SK1			碗	135	57	57	2.4	密	灰白色	良	○	○	○ ○	○ ○	-	I類
67	KO	SK1			碗	138	57	54	2.6	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○ ○	-	I類
68	KO	SK1			碗	140	55	60	2.3	密	灰白色	良	○	○	○ ○	○ ○	-	I類
69	KO	SK1			碗	140	61	55	2.5	密	灰白色	良	-	-	○ ○	○ ○	-	I類
70	KO	SK1			碗	138	56	57	2.4	密	灰白色	良	-	-	○ ○	○ ○	-	I類
71	KO	SK1			碗	132	59	50	2.6	密	黄灰白色	不良	-	-	○ ○	○ ○	-	I類
72	KO	SK1			碗	142	53	58	2.4	密	灰白色	良	○	○	○ ○	○ ○	○ ○	I類
73	KO	SK1			碗	132	50	60	2.2	密	灰白色	良	○	○	-	○ ○	-	I類(小型)
74	KO	SK1			皿	76	18	43	1.8	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○ -	I類
75	KO	SK1			皿	82	19	43	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ ○	I類
76	KO	SK1			皿	88	22	44	2.0	密	灰白色	良	○	-	-	-	不明 -	I類
77	KO	SK1			皿	94	17	49	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ ○	I類
78	KO	SK1			皿	78	17	42	1.9	密	灰白色	良	-	-	-	-	○ -	I類
79	KO	SK1			皿	84	21	42	2.0	密	灰白色	良	○	-	-	-	○ ○	I類
80	KO	SK1			印花碗			79		密	灰白色	良	-	○	-	-	-	

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		粉殼		ユビナデ	植物痕	類型
													内	外	内	外			
81	KO	SK1			蓋	147	45	58	2.5	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	I類
82	KO	SK2		下層	碗	147	63	54	2.7	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○	○	○	I類
83	KO	SK2			碗	144	55	54	2.7	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	-	II類
84	KO	SK2		上層	碗	135	57	53	2.5	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
85	KO	SK2		下層	碗	142	58	52	2.7	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
86	KO	SK2		下層	碗	142	56	57	2.5	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	-	II類
87	KO	SK2		下層	碗	144	54	61	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
88	KO	SK2		下層	碗	155	62	63	2.5	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
89	KO	SK2		上層	碗	145	56	56	2.6	密	灰白色	良	○	-	○	○	-	○	II類
90	KO	SK2		下層	碗	147	61	63	2.3	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
91	KO	SK2		上層	碗	144	53	58	2.5	密	黄灰白色	不良	○	-	○	○	-	-	II類
92	KO	SK2		上層	碗	143	53	54	2.6	密	灰白色	良	-	-	○	○	-	-	II類
93	KO	SK2		上層	碗	139	54	57	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	-	-	II類
94	KO	SK2		下層	碗	145	55	53	2.7	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	-	II類
95	KO	SK2		上層	碗	144	54	58	2.5	密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○	II類
96	KO	SK2		下層	碗	121	47	48	2.5	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	-	II類(小型)
97	KO	SK2		下層	碗	122	52	46	2.7	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類(小型)
98	KO	SK2			碗	120	47	42	2.8	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類(小型)
99	KO	SK2		上層	碗	128	52	52	2.5	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	○	II類(小型)
100	KO	SK2		上層	碗	119	46	49	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	-	II類(小型)
101	KO	SK2		上層	碗	138	47	53	2.6	密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○	III類
102	KO	SK2		下層	碗	139	47	50	2.8	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	-	III類
103	KO	SK2	G3		皿	83	19	45	1.8	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	-	II類
104	KO	SK2		上層	皿	81	18	50	1.6	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	II類
105	KO	SK2		上層	皿	86	17	50	1.7	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○	II類
106	KO	SK2		上層	皿	83	16	44	1.9	密	灰白色	良	-	-	-	-	-	○	II類
107	KO	SK2		上層	皿	83	15	48	1.7	密	灰白色	良	○	-	-	-	不明	○	III類
108	KO	SK2		上層	皿	80	14	48	1.7	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○	III類
109	KO	SK2		上層	皿	87	18	52	1.7	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○	○	I類
110	KO	SK2		下層	皿	83	20	37	2.2	密	灰白色	良	-	-	-	-	-	○	I類
111	KO	SK2	G3		蓋			65		密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	
112	KO	SK2	G3	上層	陶丸		23			密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	
113	KO	SK2	G3	上層	陶丸		24			密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	
114	KO	SK2	G3	上層	陶丸		22			密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	
115	KO	SK2			陶丸		28			密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	
116	KO	SK2	G3	下層	オロシ碗		62			密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	
117	KO	SK2		上層	蓋	156	55	61	2.6	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	○	II類
118	KO	SK2		上層	蓋	155	43	65	2.4	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	不明	II類
119	KO	SK2		上層	蓋	151	45	54	2.8	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	○	II類

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		糊殻		ユビナ子	植物 圧痕	類型
													内	外	内	外			
120	KO	SK2		下層	蓋	136	38	50	2.7	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	-	I類
121	KO	SK2		上層	蓋	134	31	50	2.7	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	不明	I類
122	KO	SK3			碗	142	54	61	2.3	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	-	○	I類
123	KO	SK3			碗	140	57	61	2.3	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	-	○	I類
124	KO	SK3			碗	148	52	62	2.4	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	-	○	I類
125	KO	SK3			碗	141	52	52	2.7	密	灰白色	良	○	○	○	○	○	○	I類
126	KO	SK3			碗	137	55	55	2.5	密	灰白色	良	-	○	○	○	-	-	I類
127	KO	SK3			碗	146	55	54	2.7	密	黄灰白色	不良	○	-	○	○	-	○	I類
128	KO	SK3			碗	134	57	59	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	-	-	I類
129	KO	SK3			碗	137	57	62	2.2	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	I類
130	KO	SK3			碗	113	49	47	2.4	密	灰白色	良	-	○	○	○	-	-	I類(小型)
131	KO	SK3			皿	83	19	44	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	-	-	I類
132	KO	SK3	H4		皿	63	18	31	2.0	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	I類(小型)
133	KO	SK3	H4		皿	65	18	35	1.9	密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	I類(小型)
134	KO	G5南端			碗	142	57	61	2.3	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
135	KO	G5南端			碗	134	56	58	2.3	密	黄灰白色	不良	○	-	○	○	-	○	II類
136	KO	G5南端			碗	134	55	53	2.5	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
137	KO	G5南端			碗	147	54	58	2.5	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
138	KO	G5南端			碗	141	51	57	2.5	密	灰白色	良	○	○	-	○	○	○	II類
139	KO	G5南端			碗	139	52	56	2.5	密	黄灰白色	不良	○	-	○	○	○	○	II類
140	KO	G5南端			碗	142	51	55	2.6	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
141	KO	G5南端			碗	126	45	52	2.4	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類(小型)
142	KO	G5南端			碗	120	43	43	2.8	密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○	II類(小型)
143	KO	G5南端			皿	83	18	48	1.7	密	灰白色	良	○	○	-	-	○	-	I類
144	KO	G5南端			皿	80	19	44	1.8	密	灰白色	良	○	○	-	-	不明	-	I類
145	KO	G5南端			皿	83	15	51	1.6	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	-	II類
146	KO	G5南端			蓋	103	23	49	2.1	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	-	
147	KO	G5南端			瓶			115		密	灰白色	良	-	-	-	○	-	-	
148	KO	遺構外	F3	1層	小壺	28	38	35		密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
149	KO	遺構外	E4	1層	オロシ碗			62		密	灰白色	良	-	○	-	-	-	○	
150	KO	遺構外	H3	2層	平高台皿			50		密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
151	KO	遺構外	G4	2層	蓋	133	32	50	2.7	密	灰白色	良	-	○	-	-	-	○	III類
152	KO	遺構外	H4	上層	坏	100	40	50	2.0	密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
153	KO	遺構外	C4	1層	把手					密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
154	KO	遺構外	H2	3層	鉢		86			密	暗褐色	良	-	-	-	-	-	-	
155	KO	遺構外	D3	2層	不明			62		密	灰白色	良	-	-	-	-	-	-	
156	OS	13号窯			碗	143	60	60	2.4	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
157	OS	13号窯			碗	140	58	54	2.6	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	II類
158	OS	13号窯			碗	141	59	52	2.7	密	黄灰白色	不良	-	○	○	○	○	-	II類

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		粉殻		ユビ ナデ	植物 圧痕	類型
													内	外	内	外			
159	OS	13号窯			碗	140	54	56	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	-	○	○	II類
160	OS	13号窯			碗	136	60	54	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	II類
161	OS	13号窯			碗	145	58	55	2.6	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	-	II類
162	OS	13号窯			碗	135	60	53	2.5	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
163	OS	13号窯			碗	139	69	57	2.4	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○	○	-	II類
164	OS	13号窯			碗	145	59	51	2.8	密	灰白色	良	-	-	○	-	○	○	II類
165	OS	13号窯			碗	142	57	56	2.5	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	-	II類
166	OS	13号窯			碗	143	56	59	2.4	密	黄灰白色	不良	○	-	○	○	○	-	II類
167	OS	13号窯			碗	135	60	60	2.3	密	黄灰白色	不良	-	○	○	○	○	○	II類
168	OS	13号窯			碗	145	59	53	2.7	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○	○	-	II類
169	OS	13号窯			碗	139	53	53	2.6	密	黄灰白色	不良	-	○	○	○	○	-	II類
170	OS	13号窯			碗	137	60	55	2.5	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
171	OS	13号窯			碗	137	59	59	2.3	密	黄灰白色	不良	○	-	-	○	○	-	II類
172	OS	13号窯			碗	144	59	50	2.9	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
173	OS	13号窯		無高台碗	碗	136	51	60	2.3	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○	○	II類
174	OS	13号窯			碗	119	49	51	2.3	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
175	OS	13号窯			碗	119	52	51	2.3	密	黄灰白色	不良	-	-	-	○	○	-	II類
176	OS	13号窯			碗	115	49	48	2.4	密	灰白色	良	-	-	○	-	○	○	II類
177	OS	13号窯			碗	119	52	52	2.3	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	II類
178	OS	13号窯			皿	78	20	46	1.7	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○	II類
179	OS	13号窯			皿	81	13	53	1.5	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	II類
180	OS	13号窯			皿	82	13	60	1.4	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	○	II類
181	OS	13号窯			皿	78	12	54	1.4	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	○	II類
182	OS	13号窯			皿	86	13	49	1.8	密	黄灰白色	不良	-	-	-	-	○	○	II類
183	OS	13号窯			皿	82	13	57	1.4	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○	II類
184	OS	灰原	E7		碗	140	64	52	2.7	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
185	OS	灰原	F7	灰原右上	碗	133	66	58	2.3	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
186	OS	灰原	E5	灰原左上	碗	144	64	64	2.2	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
187	OS	灰原	E7		碗	137	63	56	2.4	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	-	○	I類
188	OS	灰原	E7		碗	136	63	54	2.5	密	灰白色	良	○	○	-	○	○	○	II類
189	OS	灰原	E7		碗	132	60	56	2.4	密	灰白色	良	-	○	○	○	○	○	II類
190	OS	灰原	F6		碗	133	59	53	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	II類
191	OS	灰原	F6		碗	132	58	54	2.4	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	○	II類
192	OS	灰原	E6		碗	133	59	51	2.6	密	灰白色	良	○	○	○	○	○	○	II類
193	OS	灰原	E6		碗	132	55	58	2.3	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
194	OS	灰原	F7	灰原右上	碗	139	60	53	2.6	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類
195	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	131	59	54	2.4	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	○	II類
196	OS	灰原	E7		碗	134	59	56	2.4	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	II類
197	OS	灰原	E7	灰原	碗	134	60	56	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	II類

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		糊殻		ユビナデ	植物圧痕	類型	
													内	外	内	外				
198	OS	灰原	E5	灰原左上	碗	138	58	63	2.2	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類
199	OS	灰原	E6		碗	133	56	56	2.4	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	○	○	II類
200	OS	灰原	F7	灰原右上	碗	133	57	54	2.5	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類
201	OS	灰原	E7		碗	132	53	51	2.6	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	-	○	II類
202	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	134	56	51	2.6	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類
203	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	125	55	51	2.5	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	-	○	II類
204	OS	灰原	F6		碗	143	54	52	2.8	密	灰白色	良	○	-	-	○	○	○	○	II類
205	OS	灰原	E7		碗	129	53	52	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	○	○	○	○	II類
206	OS	灰原			碗	144	55	66	2.2	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	I類
207	OS	灰原		灰原	碗	142	57	61	2.3	密	黄灰白色	不良	○	○	-	○	○	○	○	II類
208	OS	灰原	E7	灰原	碗	140	56	59	2.4	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	○	II類
209	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	139	52	65	2.1	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類
210	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	116	46	45	2.6	密	灰白色	良	-	-	○	○	○	○	○	II類(小型)
211	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	114	49	43	2.7	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類(小型)
212	OS	灰原	F7	灰原右上	碗	106	45	45	2.4	密	灰白色	良	-	-	-	○	○	○	○	II類(小型)
213	OS	灰原	E5	灰原左上	碗	112	49	46	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類(小型)
214	OS	灰原	E6		碗	113	52	48	2.4	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類(小型)
215	OS	灰原	F5	灰原左上	碗	141	54	47	3.0	密	灰白色	良	○	-	○	○	○	○	○	II類
216	OS	灰原	F5	灰原左上	穿孔碗	143	55	52	2.8	密	黄灰白色	不良	○	○	○	○	○	○	○	
217	OS	灰原	F5	灰原左上	穿孔無高台碗	138	58	58	2.4	密	灰白色	良	-	○	-	-	○	○		
218	OS	灰原	F6		無高台碗	137	63	55	2.5	密	黄灰白色	不良	-	-	○	-	○	○	○	II類
219	OS	灰原			皿	82	18	44	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	不明	○		I類
220	OS	灰原	E7		皿	85	19	49	1.7	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		I類
221	OS	灰原		灰原	皿	84	18	48	1.8	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○		I類
222	OS	灰原			皿	84	18	42	2.0	密	灰白色	良	○	-	-	-	-	○		I類
223	OS	灰原	E7		皿	78	18	45	1.7	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○		II類
224	OS	灰原	E7		皿	83	16	44	1.9	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○		II類
225	OS	灰原	F5	灰原左上	皿	86	16	49	1.8	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		II類
226	OS	灰原	E5	灰原左上	皿	81	15	52	1.6	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	-		II類
227	OS	灰原	F5	灰原左上	皿	71	15	41	1.7	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		II類
228	OS	灰原			皿	84	14	48	1.8	密	灰白色	良	○	-	-	-	○	○		II類
229	OS	灰原	E7		皿	82	13	53	1.5	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		II類
230	OS	灰原	F5	灰原左上	皿	75	13	42	1.8	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		II類
231	OS	灰原	E5	灰原左上	皿	74	11	40	1.9	密	灰白色	良	-	-	-	-	○	○		II類
232	OS	灰原	G6	灰原右中	オロシ碗					密	灰白色	良	-	-			-			
233	OS	灰原	F7	ベルト	オロシ碗			52		密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○	不明	
234	OS	灰原	F6	灰原左中	オロシ碗			52		密	灰白色	良	-	○	-	○	○	-		
235	OS	灰原	E5	灰原左上	オロシ碗			48		密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○		
236	OS	灰原	F5	灰原左上	オロシ碗			54		密	灰白色	良	-	○	-	○	○	○	不明	

番号	略号	遺構	Gr.	層位	器種	口径	器高	高台型	口台比	胎土	色調	焼成	降灰		糊殻		ユビナデ	植物圧痕	類型
													内	外	内	外			
237	OS	灰原	F5	灰原左上	オロシ碗			51		密	灰白色	良	—	○	—	○	○	—	
238	OS	灰原	E6		器種不明		7	56		密	灰白色	良	○	○	—	○	○	—	
239	OS	灰原	E5		蓋	80	22			密	灰白色	良	—	—			—		
240	OS	灰原	E5	灰原左上	蓋	78	19			密	灰白色	良	—	—	—	—	—	—	
241	OS	灰原	F5	灰原左上	蓋					密	灰白色	良	—	—			—		
242	OS	灰原	F6	ベルト1層	不明		48			蜜	灰白色	良	—	○	—	—	—	—	
243	OS	灰原	E5	灰原左上	陶丸		21			密	灰白色	良	—	○	—				
244	OS	灰原			陶丸		20			密	灰白色	良	—	○	—				
245	OS	灰原	F7	灰原右中	陶丸		23			密	灰白色	良	—	○	—				
246	OS	灰原	F5	灰原左上	陶丸		20			密	灰白色	良	—	○	—				
247	OS	灰原	E5	灰原左上	陶丸		21			密	灰白色	良	—	○	—				
248	OS	灰原			陶丸		24			密	灰白色	良	—	○	—				
249	OS	灰原			陶丸		21			密	灰白色	良	—	○	—				
250	OS	灰原	F6	ベルト	陶丸		26			密	灰白色	良	—	○	—				
251	OS	灰原	F6	灰原左中	陶丸		21			密	灰白色	良	—	○	—				
252	OS	灰原	F6	ベルト	陶丸		20			密	灰白色	良	—	○	—				
253	OS	灰原	E5	灰原左上	陶丸		25			密	灰白色	良	—	○	—				
254	OS	灰原	F5	灰原左上	陶丸		20			密	灰白色	良	—	○	—				
255	OS	灰原	F7		蓋	76	15	30	2.5	密	灰白色	良	—	—	—	—	—	—	
256	OS	灰原			六器														
257	OS	灰原	E6	灰原左上	六器	88	22	54	1.6	密	黄灰白色	不良	—	—	—	—	—	○	
258	OS	灰原	F6	灰原右上	小壺(穿孔)		55			密	灰白色	良	—	○	—				
259	OS	灰原	G6	灰原左中	小壺					密	灰白色	良	—	○	—				
260	OS	灰原	H6	ベルト	小壺		46			密	灰白色	良	—	○	—				
261	OS	灰原	G7	灰原右中	鉢?	86				密	暗褐色	良	—	—	—	—	—	—	
264	OS	SK2			碗	141	58	51	2.8	密	灰白色	良	○	—	○	○	○	○	II類
265	OS	SK2			碗	139	60	48	2.9	密	灰白色	良	○	—	○	○	○	○	II類
266	OS	SK2			碗	137	57	53	2.6	密	灰白色	良	—	○	○	○	○	○	
267	OS	SK2			碗	128	56	51	2.5	密	黄灰白色	不良	—	—	○	○	○	○	II類
268	OS	SK2			碗	111	48	44	2.5	密	灰白色	良	○	—	○	○	○	○	II類
269	OS	SK2			碗	104	43	42	2.5	密	灰白色	良	—	—	—	○	○	○	II類
270	OS	SK2			皿	79	16	41	1.9	密	灰白色	良	—	—	—	—	○	○	II類
271	OS	SK2			皿	79	14	46	1.7	密	灰白色	良	—	—	—	—	○	○	II類
272	OS	SK2			皿	79	16	42	1.9	密	灰白色	良	—	—	—	—	○	○	II類
273	OS	SK2			陶丸		30			密	灰白色	良	—	○	—				
274	OS	SK2			陶丸		22			密	灰白色	良	—	○	—				
275	OS	SK2			蓋	64	17			密	灰白色	良	—	—	—				
276	OS	SK3		1層	碗	140	62	56	2.5	密	黄灰白色	不良	—	—	○	○	○	○	II類
277	OS	SK3		1層	碗	133	61	57	2.3	密	黄灰白色	不良	—	—	○	○	○	○	II類

圖 版

図版 1



遺跡より東方を望む

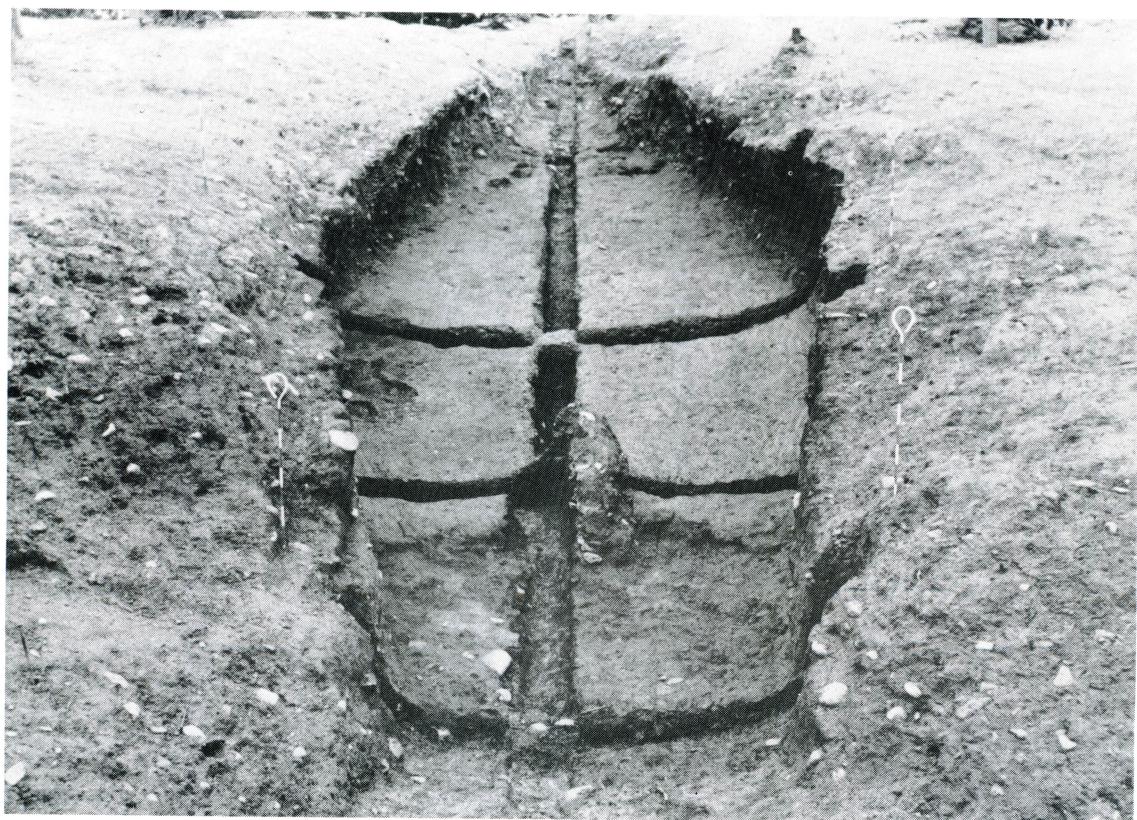


北小木大谷洞29・30号窯全景

図版 2



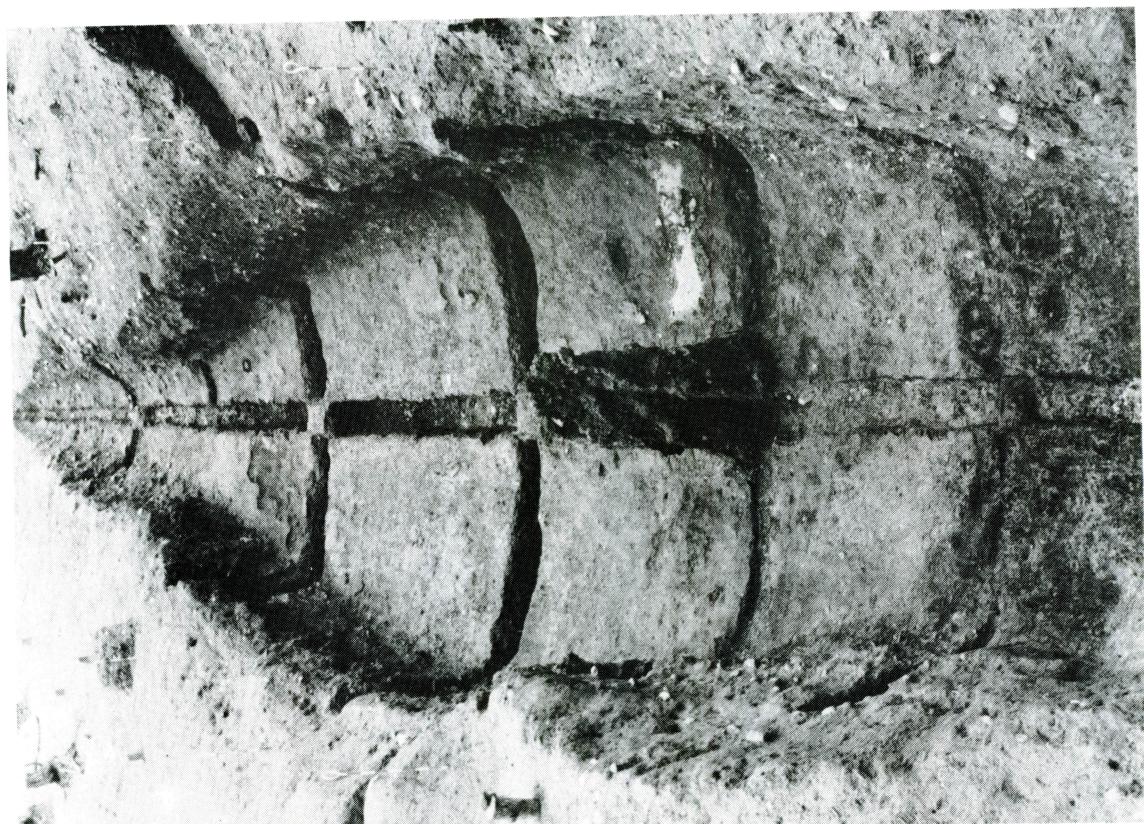
全 景



断ち割り

北小木大谷洞29号窯

図版 3



断ち割り



全
景

北小木大谷洞30号窯

図版 4



ダンパー (29号窯)



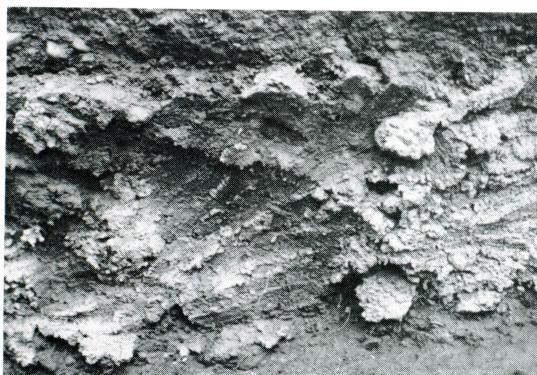
分焰柱と床面 (29号窯)



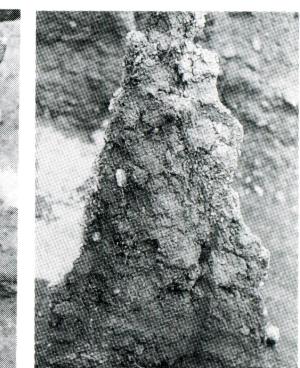
分焰柱断ち割り (29号窯)



床面調整 (29号窯)



側壁 (30号窯)



分焰柱断ち割り (30号窯)



燃焼室・前庭部セクション (西から) (30号窯)



S K 1～S K 3 (KO) セクション

北小木大谷洞29・30号窯

図版 5



全景



分焰柱



焼成室



分焰柱断ち割り



窯壁

大沢13号窯

図版 6



灰原（南北）①



灰原（南北）②



灰原（東西）①



灰原（東西）②



SK 4（半裁）



SK 3（半裁）



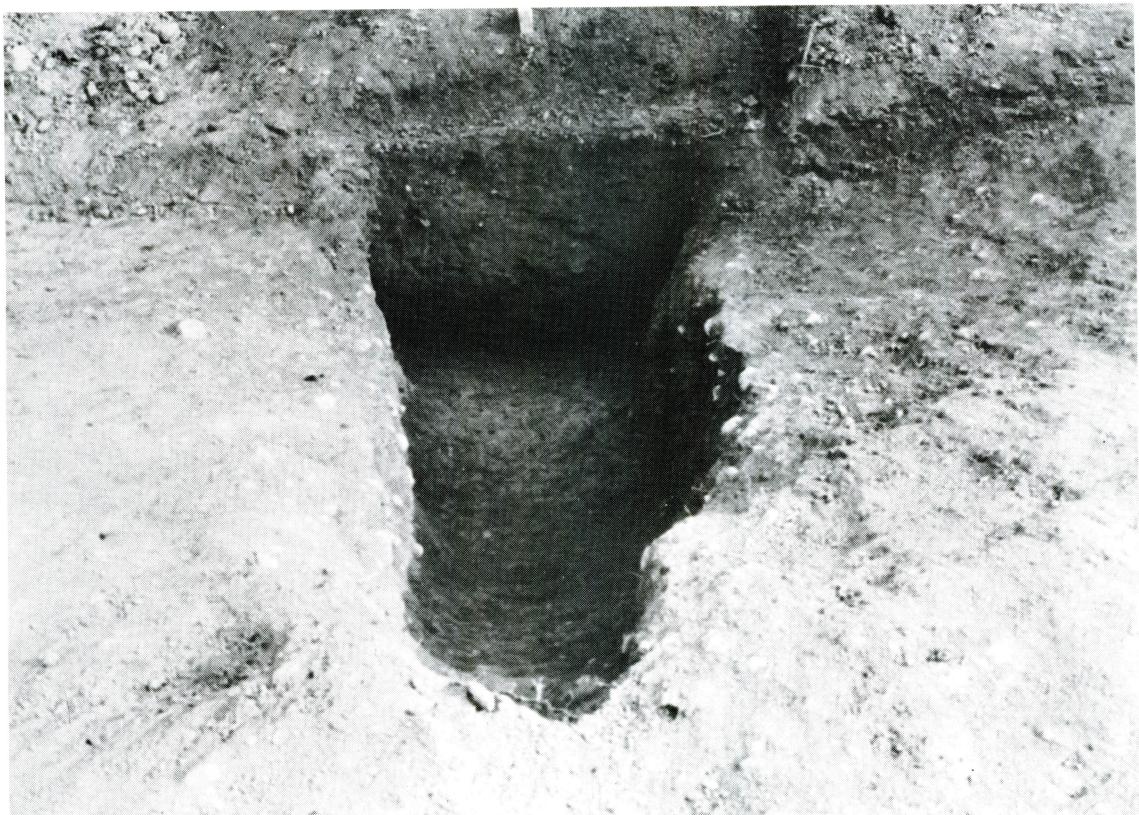
作業場全景



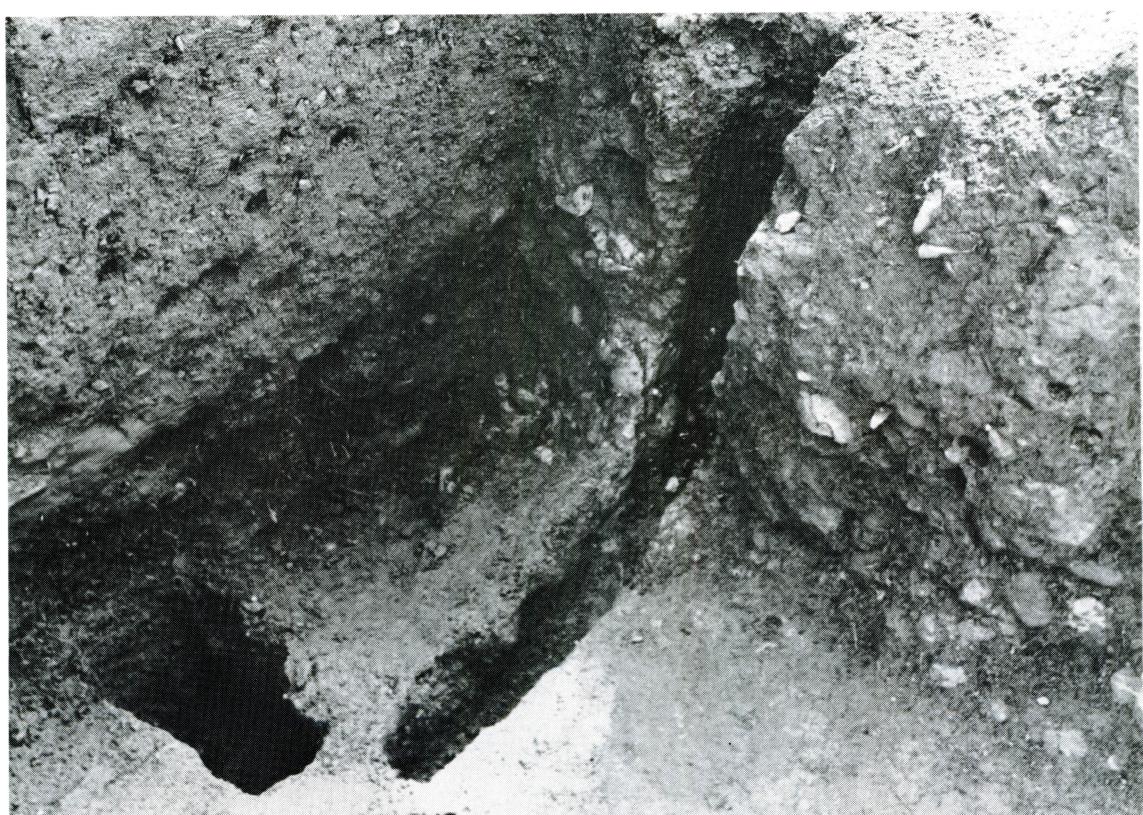
白色粘土ピット（左）

大沢13号窯

図版 7



全景



断ち割り

北小木大谷洞28号窯

図版 8



全景



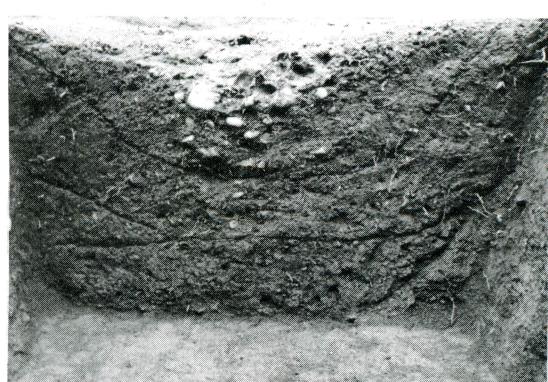
断ち割り



煙道部



灰原



窯内埋土

北小木神明洞 1 号炭焼窯

図版 9



41

碗（III類）



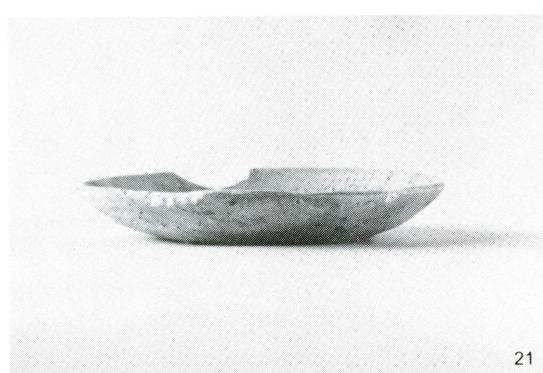
10

碗（III類）



22

皿（III類）



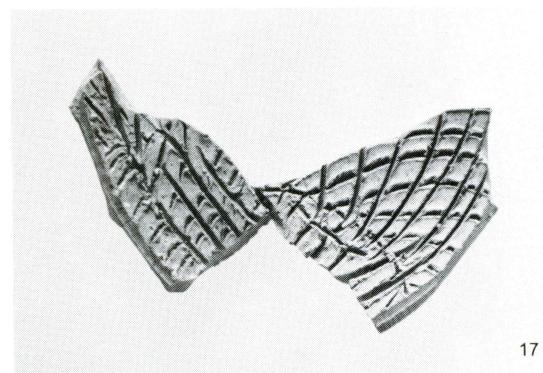
21

皿（III類）



16

オロシ碗



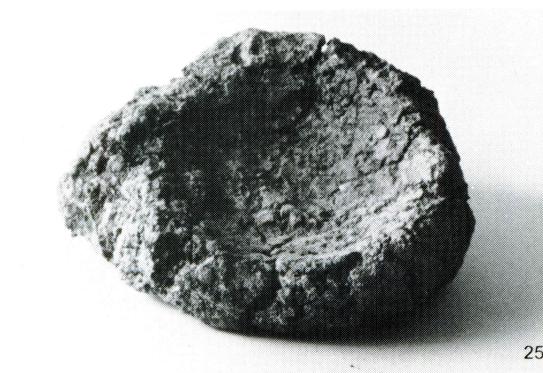
17

オロシ碗



15

蓋（III類）



25

焼台

北小木大谷洞29号窯出土遺物

図版10



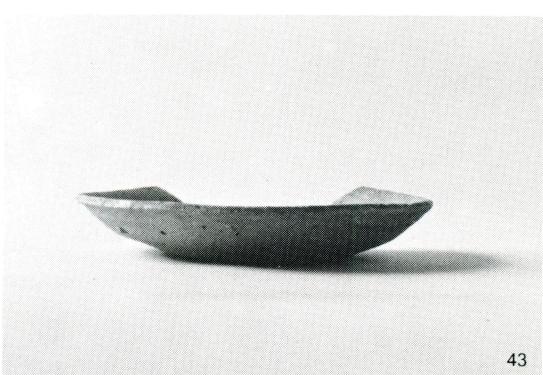
碗（II類）



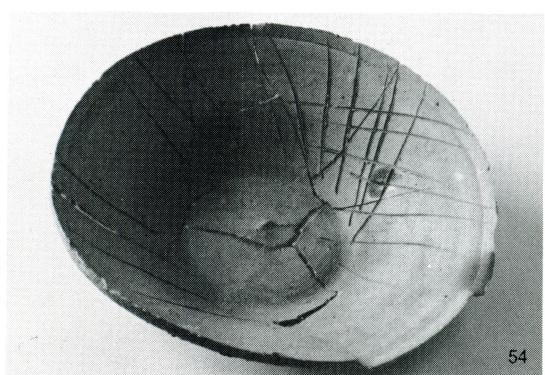
碗（II類）



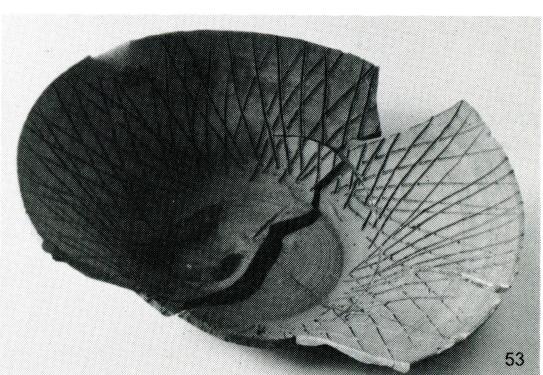
碗（II類）



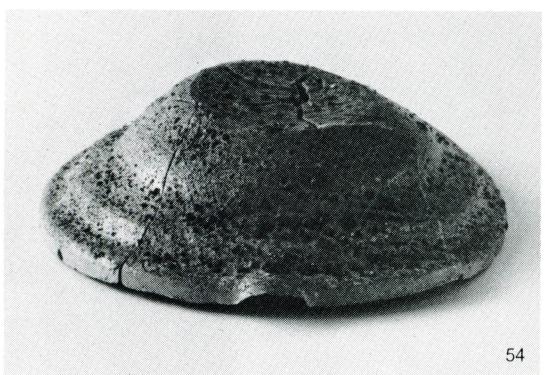
皿（II類）



オロシ片口碗（II類）



オロシ片口碗（II類）



オロシ片口碗（II類）



焼台

北小木大谷洞30号窯出土遺物

図版11



71

碗（I類）



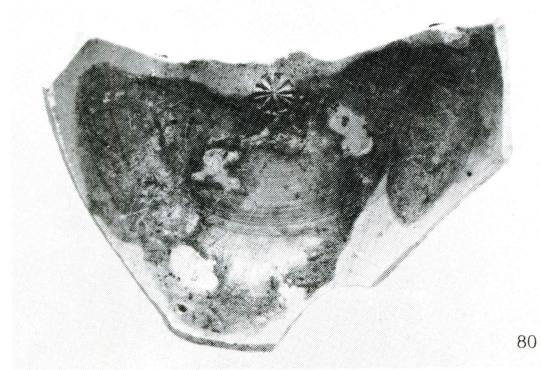
77

皿（I類）



81

蓋（I類）



80

印花碗（I類）



88

碗（II類）



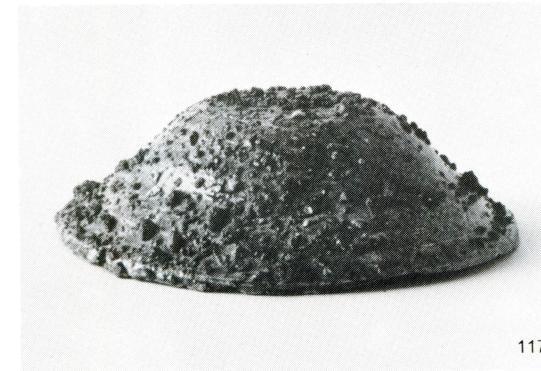
103

皿（II類）



95

碗・皿重ね焼（II類）

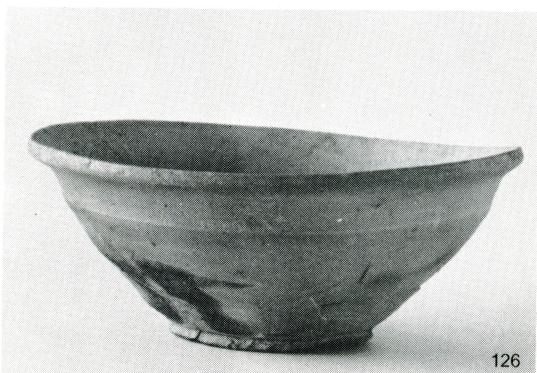


117

蓋（II類）

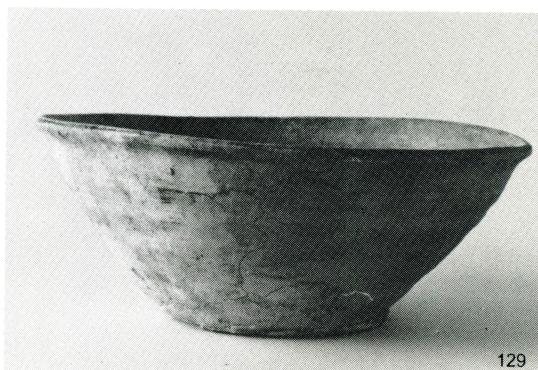
SK1（上4枚）・SK2（下4枚）(KO) 出土遺物

図版12



126

碗（I類）



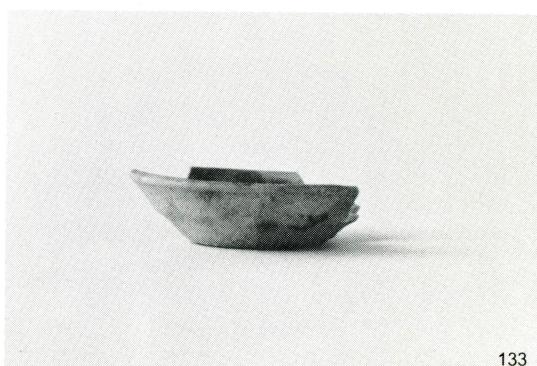
129

碗（I類）



131

皿（I類）



133

皿（I類小型）



150

平高台皿



153

把手



152

坏



148

小壺

SK3 (上 4 枚)・遺構外 (下 4 枚) (KO) 出土遺物

図版13



碗（II類）



碗（II類）



碗（II類）



碗（II類）



碗（II類）



皿（II類）



皿（II類）



皿（II類）

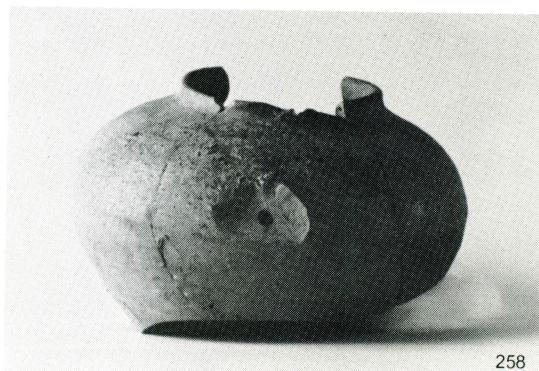
大沢13号窯出土遺物

図版14



217

穿孔無高台碗



258

注口を有する小壺



257

六器



240

蓋



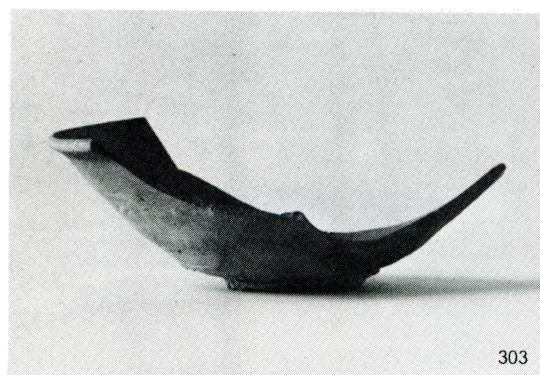
236

器種不明



262

焼台



303

碗 (IV類)



305

皿 (IV類)

大沢13号窯灰原・北小木神明洞1号炭焼窯(303, 305)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きたおぎこようあとぐん・おおさわ13ごうこようあと						
書名	北小木古窯跡群・大沢13号古窯跡						
副書名	主要地方道多治見犬山線道路改良工事にともなう緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書						
シリーズ番号	第34集						
編著者名	澤村雄一郎、小淵忠司、小木曾文和、藤岡比呂志、藤根久						
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500 岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内) TEL 058-264-1111 (814)						
発行年月日	1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
きたおぎおわたにばら 北小木大谷洞 29ごうこようあと 29号古窯跡	ぎふけんたじみしきたお 岐阜県多治見市北小 ぎちょうおわたにばら 木町大谷洞578-11	212041	—	35° 02' 11"	137° 03' 49"	19950710～ 19951109	主要地方道 多治見犬山 線道路改良 工事に伴う
きたおぎおわたにばら 北小木大谷洞 30ごうこようあと 30号古窯跡	ぎふけんたじみしきたお 岐阜県多治見市北小 ぎちょうおわたにばら 木町大谷洞578-11	212041	—	35° 02' 10"	137° 03' 49"	750m ²	
おおさわ13ごうこよう 大沢13号古窯 あと 跡	ぎふけんたじみしおおさわ 岐阜県多治見市大沢 ちょう 町2丁目1-1	212041	—	35° 02' 11"	137° 03' 52"	19960507～ 19961015	1,500m ²
きたおぎおわたにばら 北小木大谷洞 28ごうこようあと 28号古窯跡	ぎふけんたじみしきたお 岐阜県多治見市北小 ぎちょうおわたにばら 木町大谷洞578-1	212041	7642 (県遺跡番号)	35° 02' 08"	137° 03' 32"		
きたおぎしんめいばら 北小木神明洞 1ごうすみやきかまあと 1号炭焼窯跡	ぎふけんたじみしきたお 岐阜県多治見市北小 ぎちょうしんめいばら 木町神明洞494-5	212041	—	35° 02' 07"	137° 03' 28"		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
北小木大谷洞 29号古窯跡	窯	鎌倉～室町	窯体、灰原	灰釉系陶器 (山茶碗)			
北小木大谷洞 30号古窯跡	窯	鎌倉	窯体、灰原、土坑	灰釉系陶器 (山茶碗)			
大沢13号古窯跡	窯	鎌倉	窯体、灰原、土坑 作業場	灰釉系陶器 (山茶碗)			
北小木大谷洞 28号古窯跡	窯	鎌倉	窯体	灰釉系陶器 (山茶碗)		煙道部および焼成 室の一部のみ発掘	
北小木神明洞 1号炭焼窯跡	炭焼窯	室町	窯体、灰原	灰釉系陶器 (山茶碗)			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第34集

北小木古窯跡群・大沢13号古窯跡

主要地方道多治見犬山線道路改良
工事に伴う緊急発掘調査報告書

1997年3月25日 印刷

1997年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印 刷 西濃印刷株式会社

『北小木古窯跡群・大沢13号古窯跡』正誤表

ページ	訂正箇所	誤	正
55	第 29 図	基準高がはいっていない。	A-A' 302.5 m B-B' 302.0 m
56	第 30 図	基準高がはいっていない。	A-A' 302.5 m
68	2行目と3行目の間	1行脱落している。	2行目と3行目の間に、下記の文章を1行加えてください。 「やや平坦な部分まで架けられていたと考えられる。」
報告書 抄録	「発行年月日」	1996年3月31日	1997年3月31日